

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

インタビュー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2018-03-16 キーワード: 作成者: 小長谷, 有紀, ジャーダムバ, ルハグワテムチグ, ロッサビ, メアリー, ロッサビ, モリス メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008929

インタビュー

I バダムハンドさん

父の名はダムバ。1943年、ハラホリン生まれ。女性。2009年12月のインタビュー時点で66歳。社会主義時代はハラホリンの小麦工場に勤務していた。現在は家畜を放牧している遊牧民。体調が悪いために、冬季、ハラホリン市内に居住していた。インタビューでは、とくに社会主義時代の宗教生活と、現在の仏教実践について語った。インタビュー時間は約2時間。

B: バダムハンド

D: ルハグワデムチグ

I 出自

B: 書くんだったら、この机のここで。

D: ああ、大丈夫です。

B: 私たちの世代っていうと、一時期この信仰というものはあれだよ、禁止されていたんだよ。暗闇の中だよ、あなたたちが小さいころ、こんなくらいのころというのは…。

D: こっちに座ってください。どこに座りますか？

B: いいんだよ、私はここで。

D: 寒くないですか？

B: 大丈夫だよ。

D: こっちに座らないですか。あなたのお名前は？

B: バダムハンド。

D: 誰のバダムハンドですか？(姓は何ですか？)

B: ダムビーン・バダムハンド。

D: ご自分のこと、どこで生まれたんですか？ 家はどのあたりですか？

B: 今？

D: 総じて。

B: もともとこのあたりの人間だよ。うちは本当にこのあたりなんだ、エルデネ・ゾー寺院の北側にハンドジャムツの仏塔がある、私はこの仏塔のあたりで生まれたらしいよ。本当に生まれた土地にずっと住んでいるんだよ。

D: そうですか。何年に生まれたんですか？

B: 1943年。

D: それ以後、ずっとこの土地に？

B：そうだよ、それ以後この土地にずっとこうやって住んでいる。小さいころから、田舎でずっと過ごして、そのあと工場を定年退職して…。今は68歳になったっけ。そして今までこうやって故郷に住み続けているんだよ。私の両親はというとね、その、先祖はみんな太子だったらしいよ、太子の血筋の者たち。そして、このエルデネ・ゾー寺院の僧侶たち…。この北に、寺院の丘と呼ばれているところがある。この寺の僧侶には父の親戚にあたる人がいて、父の母、私の祖母の兄はそこの僧侶だったというよ。そして、オトチ・マーランバ（医学を修得した僧に与えられる位）、今でいうならばエルデネ・ゾー寺院の最高位にあたるこのオトチ・マーランバは、これまたうちの親戚だったという。そして、これらの人びとはみんな捕らえられて連れて行かれてしまった。

D：あなたは小さいころ、学校で勉強したんですか？

B：いいや、学校にはまったく行かなかった。私たちの時代は、1950何年ごろには、ほとんど学校に行かせなかったんだよ。学校をやめさせた人というのは、ずるがしこい人だったんだろうよ。自分の子どもを学校からやめさせた人というのはね。

D：あなたは何人兄弟ですか？

B：2人だよ。私の弟はウランバートルにいるよ、私にそっくりのおじいさんだよ。軍隊で長年働いていた、そして定年になってね…。

D：そのお兄さんは学校で勉強したんですか、しなかったんですか？

B：弟かい？ 勉強したよ。彼は私と違って学校で勉強したんだ。軍隊に行って、そこでずっと勤めて、そして定年になって…。

D：あなたのご両親と一緒に？

B：そう、私は両親と一緒に…。

D：家畜を？

B：そう、家畜を育てていたんだよ、家畜と一緒にいてね、そうやって過ごして今日を迎えたんだよ、今も暗闇（無教養）さ。学んだ本も何もない、まあ仕方ないね。

2 ハラホリン国営農場の建設

D：当時というのは、ネグデル化運動は起こっていなかったんですか？

B：ああ、そうだよ、まだ始まっていなかった。ネグデル化運動というのは、ここでは59年に終わったんだよ。59年にはすべてが、58年から始まって、59年にはみんなネグデルになって、シャンハのネグデルになったんだよ。何ていう名前だったっけ、「エンフタイヴァン（平和の意味）」だったっけ、名前さえ忘れてしまったよ。そうして、60、61年だったろうか、60年に、58、59年にこの未開墾地を開墾して、そうして、60年に国営農場が作られたんだよ、国営農場と一緒にあったんだ、このハラホリン国営農場に。そして、うちはというと何頭かの家畜をネグデルに渡して、ネグデルから

残されたほんの少しの家畜は最後には国営農場に取り上げられて、一時期ほとんど無家畜になってしまった、家畜を持っている人なんていないんだよ。本来、ソム中心地の人たちは労働をして、草原部の人は家畜を飼ってそれで生活をしていけるものなのに。最後には、78年だったかね、ここの国営農場が全部持ってってしまったんだよ。何にも残さずに持ってってしまったんだ。10頭の家畜さえも残さなかったんだよ。それはうちのこの国営農場以外の他の場所ではやらなかった、この国営農場だけがやった誤りだと私は思っているよ。そういうわけでこの私たちハラホリンの者たちというのは、疲弊してしまったんだよ、何頭かの家畜を少しでも多くしようというときに、また取り上げられて。

D：家畜を再び取り上げられて？

B：そう。また家畜をね、100頭ほどの家畜が残っていたんだよ。

D：その家畜をどうしたんでしょうね？

B：そうしてネグデルに売ってしまったんだよ。

D：国営農場の家畜を？

B：国営農場は自分の家畜だといって（私たちの家畜を）取り上げてね。そしてこのネグデルに持って行って、売り払って、少しずつネグデルに渡して、そうしてなくしてしまった。こうやって、うちの国営農場で働いていた者たちを滅茶苦茶にしまったんだよ。今こうしてみると、あなたがたの統計などにも表れているだろう、ネグデルの遊牧民だった人たちは格段に多い家畜を所有している。国営農場、ここで労働者だった者たちは家畜はというと何もないだろう、一番少ないんだよ、私たちはそうやって取り上げられたからね。

D：ネグデル化運動が起こったとき、一般的に人びとは好意的だったんでしょうか、どうだったんでしょうか？

B：ああ、一部は本当に嫌がっていたよ。そのころ、ネグデル化運動が起こったときというのは、私が16、17歳だったころだろうか、かなり大きくなっていた。一部は本当に嫌悪していたし、一部はまあいいさ、とりあえず人民は従わなくては、とそんなふうだった。ある人びとはみんなに従うというか、今、1人で孤立してどうするんだといって、ある人びとは昔コムーン（コミュン集団経営体）というものがあつたらしいが、そのようにしようとしているんだといって、本当に嫌がっていたんだよ。

D：そして、あなたの両親は家畜を国営農場に？

B：そう。国営農場に渡したんだよ、うちの両親は、そして…。

D：そして、あなたの弟さんは学校に入っていたんですか？

B：そうだったよ。うちの弟は学校で勉強して、このシャンハの学校は4年で卒業するものだったんだよ。その後、ホジルトに進学して勉強していた。ホジルトに行って、7年生は卒業しなかったと思う。ホジルトでは7年生を卒業するものだった。弟は5、

6年生までは学校にいただろう。そして、学校を辞めてしまって、草原で一時期暮らしたあと、国営農場でトラクター、コンバインの運転手になって、そして何年かトラクターを運転していた。そして、軍に入隊して、それから軍人になったんだよ。

D：若いころ、だいたいどんなふうな暮らしでしたか？ 朝は何時に起きて…？

B：朝はだいたい、若いころというと、家畜の放牧をしていたとき、メスウシの搾乳をしていたときというのは、今思えば、3時くらいに起きていただろうねえ。

D：そんなに早く？

B：そう、まだ星が出ていたよ、メスウシを搾ろうとするときは。そのネグデル化運動が成功してからというもの、ザボ（工場を意味するロシア語のザボードからの借用語）が乳を集めていたんだ。ザボの乳だといって持っていく。メスウシを飼っている者たちを集めてね。乳を搾るために早く起きるんだよ、ひどかったよ。呼ばれて起こされて、起きあがる時は星が輝いていたよ、あちこちに星がね。こうして考えてみると、3時だろうか、4時くらいだったと思うよ。こうやって起きて、あちらこちらでシャルシャルという音がしてね、まだ夜が明けていないから静まりかえっている、その中で乳を搾るシャルシャルと音が立つほど搾っていたんだ。私はとにかく今のこの子どもたちがそんなふうによく起きることはなくなってよかった、もしもそんなふうで起こされたら死んでしまうと思っているよ。

D：夜は何時くらいに寝ますか？

B：夜は完全に暗くなったところに眠る。夜になると自分たちでも遊んだりするんだよ。搾乳を終えて乳を渡して、日中は子ウシや他の家畜を追いかけて、ほとんど暇はないからね。今思うと、1日が長かったね、今思うと1年に感じられるようだったよ。そうして、夜に少し涼しくなってきたところに、自分たちも遊ぶんだ。そして、夜かなり更けてから眠る。もっと暗くなってから寝なさい、といって早くには寝かせないんだよ。日が落ちたとたんに布団に入って横になるなんて、といってね。若いころというのは、ちょうど眠りに落ちたなと眠り込んだ瞬間に起こされるように感じたものだよ。こうして起きるものだったんだよ、私たちは。私には今、こうしてたくさんの子どもがいる、私はとても小さな若いころから、ウシの乳搾りをしてきた者だよ。小さいころからこうやって朝早く起きて、夜はかなり遅くに寝る。そうして、その後は仕事をして、国（国営農場）の仕事をして、個人的にも1頭の家畜を持っていたよ、モンゴル人というのは家畜を飼って疲れることはないからね、1頭のメスウシを飼っていたんだよ、このソム中心地だね。その搾乳の仕事を間に合わせようと、6時よりも遅く起きるということはまずないね。時には6時になったり、時にはならないくらいに起きる。冬はというと、6時は少し早いだろう、夏ならばもう日が昇っているよ。

D：どんな遊びをするんですか？ どうやって遊びますか、だいたい、当時の子どもたちというのは？

B：私たちかい？ そうだね、当時というのは川辺やなんかで、特に何するでもなく、小さいころは落ちている石や骨でね。少し大きくなると、そういうことはしない、何で遊ぶというものを見つけれなくて、みんな並んで座ってね、だいたいそうやってそういう時間、そうやって過ごすことができていたんだろうよ。

D：石で家や何かを作って遊びますか？

B：そう。家を作って、骨でいろいろな家畜を作って、こうやって積み上げて、私たちのおもちゃというのは今思うとそんなものだったんだよ。

D：男の子たちも一緒に家を作りますか？

B：作るよ、作る。男の子、女の子一緒になって遊ぶよ、まだまださ。男の子は家畜の放牧に行く、家畜のところに行くよってのはごっこ遊びをするんだよ。そんなふうな遊びをしていたんだよ、私たちはね。こうして、ときどき小さな彩色された茶碗のかけらを見つける、それはとてもきれいだったよ。私の遊びというのは、そういうものだったんだよ。今の子どもたちはとてもきれいなものを見るようになって、物に関心を示さなくなった。

D：当時の子どもたちは夜になるとそう、彼らに昔話やなんかを土地の老人たちが話したりしてくれるんですか？

B：昔話やなんか、なぞなぞなどを話してくれる。なぞなぞの当てっこをする。そうして、例のシャガイ（くるぶしの骨）で遊ぶよ。こうしておはじきをしたり、そうして、アラク・メルヒー（シャガイをカメの形に積み上げてサイコロで出た数を取り合って遊ぶゲーム）をしたりして遊ぶ。いろいろな遊びをするよ。私たちのおもちゃというと、シャガイだし、シャガイで遊ぶ。大きな子も小さな子もみんな遊んでいたよ。そうしていたんだよ、ツァガン・サル（旧正月）以後には、家畜の寝床の場所の雪をのけて、そこに皮を敷いて、丸くなってみんなで座って、シャガイで遊ぶんだよ。大きな子も小さな子も。ゼンドメンというものがあつたんだよ、私たちの時代には。そのゼンドメンでもよく遊ぶね。

D：ゼンドメンというのは木でできた？

B：木でできていて、そして動物の形をしているおもちゃだよ、それでその、ダーロー（双六に似たゲーム。ドミノのような形で12の穴があいている）のようにこうやって上からこうやっておいて、下にあるのを取って遊ぶ、つき合わせてね。こういうもので遊ぶんだよ、うちのあたりの子どもたちは。

D：トランプは？

B：なかったよ。トランプというものでまったく遊んだことがない。私の小さいころはそのゼンドメンというものだけがあつた。

3 社会主義時代の食生活

D：当時、食事や何かはどんな感じだったんですか、今のように、野菜などを食べていたんですか？

B：いや、食べないよ。野菜はまったく食べたことがなかった。当時というのは、野菜はいうまでもなく、小麦粉も手に入らない。小麦粉というと、1つの世帯に3kgの細かい（良質な）小麦粉、この白い小麦粉だよ、それと2kgの粗い（粗悪な）小麦粉というものをくれていたんだ。それは世帯ごとに決まっている。小さなこういう枝が混じって、黒い色の物が配られたよ、粗い小麦粉といってね、そんなものをくれるんだよ、私たちには。そして行商で小麦粉がくるというので、自分たちの家庭用のものを買おうとそこに行く。時には少し多く入ってくるので、その時には5kgをそこで手に入れたんだよ、小麦粉をね。そして、食べるものはなにかというと、ツァーゲン・トス（原乳を沸騰させてできた乳脂肪を集めて保存したもの）そしてアーロール（酸凝固チーズ）、エーズギー（加熱凝固チーズ）やそういうものを食べるんだよ。夜になると、肉をゆでて食べてしまう。朝になって起きると、バターをお茶に入れて飲んで、家畜のところに行くんだよ。アーロール、エーズギーを少し、子どもたちの懐に入れてやって、放牧に行かせる。夜になって帰ってくると、ヒヤラムツァク（内臓を細かく刻み、血の中に混ぜたものを凍らせる。保存しておいたそれから少し切り取って汁を作る）が作ってあるかもしれない、ヒツジの頭や膝下部分をゆでてあるかもしれない、そういうもの、いつも肉の食事を食べるんだよ。

D：だいたいいつごろから、ジャガイモや野菜が入ってきたんですか？

B：このジャガイモ、野菜はというと、私の知っているのは、そう、ネゲデル化運動が完成して、62年から入ってきたんだよ、栽培し始めたんだよ、そのジャガイモをね。58、59年だったか、そのころ少し見かけるようになった、でもまったく食べたことはなかった。そしてだいたい60、59、60、61年、そのころ、この国営農場が作られて、野菜を栽培して、こうして、このキャベツやジャガイモが大量になってね。ジャガイモはとてもきれいな黄色いこういう物で、皮は新しく、とても質の良いものだったんだよ。収穫されたキャベツを持ってきて、ただでくれる、ただで車から下ろして、下ろして、人にあげてしまう。もらった方は食べたことがない、どうやって食べるのかわからないといって、外に転がしておいたんだよ。ゲルのある場所にまとめてくれるんだけれど、家畜さえも食べない、キャベツや何かは外に転がったままだったよ。こうしてジャガイモ、キャベツをまったく知らなかった、ジャガイモはときどき食べることもあった。でも、ジャガイモを切って、食事（肉）に入れて、食事と一緒にゆでて、肉と同時に取り出してしまう。生ゆでになるのは当然だよ、そして、ちゃんとできあがらない、だめなものだと、まったく食べることができなかった。後になって、かなり後になって、うちはソム中心地に移動してきて、うちは63年に入ってきた世帯

なんだよ。でも、それ以後もまだ野菜は食べられなかった。そうして、中心地にやってきて、子どもたちもたくさんになって、65, 6, 7, 8年ごろに70年ごろから、野菜を食べることを学んだんだよ。今では私は野菜がとても好きだし、この子たちと野菜の入った食事を一緒に食べたいなと思うんだよ。

D: 米は一般にあったんでしょうか？

B: 黄色い米(粟)だけがあったよ。白米は本当にほとんどなかったものだよ、当時は。たまにわずかに見かけたものだ。ほんの少しね、白米は普通まったく食べないよ。私の母はというと、私は1人っ子で育ったんだよ。家のたった1人の子どもとしてね。私のその弟もまた1人だよ。私の両親2人はというと兄妹だったんだよ。そして、私を養子にして育ててくれた母は子どもがなくて、父はというと、たった2人の子どもしかいなかった。そして、その2人の子どもを1人ずつ取って、そして2つのゲルでそれぞれ1人っ子のように育てたんだ。当時、白米というと、わずかな物があって、それをときどき「風邪をひいたみたいだね、米を炊いてあげよう」といって少し鍋に入れて、沸騰させて炊き込んで。そしてそういう風邪を引いたときに食べさせてくれるものだったんだよ、白米をね。それに比べて粟はいつもあったね。

D: 風邪をひいたときにとっても必要だったんですね、それは？

B: 必要だったということだよ。軽い食事といって食べさせてくれたんだろうか、そういうふうには与えられていたんだ。粟はね、粟は買って食べていたよ。

D: 甘い物や果実などはありましたか？

B: 当時というのは、ほとんどなかったねえ。私たちの小さいころというのは、ドムボン・チヘルという大きな白い飴があったんだよ、圧縮されたね。そうして、氷砂糖がある。紙に包まれた飴はまったくないよ。ときどきウランバートルから来た人なんか、チュムグン・チヘル(中にとりとした部分のはいつている飴)といって、こんな長い、固い飴を持ってきてくれる。私が小さいころには、私はそういう飴を見たことがあった。ドムボン・チヘルという、こういう大きな、大きな飴があったんだよ、粉砂糖のようなものを圧縮してしまったものだったようだよ、とても固いんだよ。普通の砂糖はあるよ、箱に入った角砂糖。

D: ロシア製ですか？

B: ロシア、角砂糖はね。そのドムボン・チヘルを割ろうとして子どもたちが円になって座ってね、ある子どものデール(民族衣装)の裾を敷いて、片手に金槌、片手に刀を持って、こうやって砕いて、座っていたものだよ。

D: 自分たちで？

B: 大人が子どもたちにあげようとね。大人たちが中心地に行ったんだろうか、どうしたのか、手に入れてきて、子どもたちに割ってやろうとしていてね、そのドムボン・チヘルを。そういう飴があったんだよ。粉砂糖というのはまったく見たことがなかつ

た。あることはあったんだろうよ、それは、でも買うことはなかった。干しぶどうはときどき手に入ったよ。60年代の末、60、70、59、60年代の時代、60、61、62年のころには、中国から、干したスモモや干シアズナなどが入ってきて食べていたよ。これはとってもおいしかったねえ…今ではなくなってしまったようだね。そういうものが中国から入ってきて、食べていたんだ、中国から持ってきていたんだよ。そうして、例の戦争が終わって、ネグデルが作られて、復興して、物を持ってくるようになったんだろう。車などで物を持ってくるようになったんだろうよ。そういうことが話されていたんだよ、うちの方ではね。私たちはこうして、こうやって育った者なんだよ。こういう物を食べて飲んで育った者だよ。ヒヤラムツァクをよく食べる。内臓も。そして頭や膝下をよく食べる。

D：ヒヤラム（乳を水に入れて沸かし、冷ました飲み物、乳のお湯割り）をたくさん飲ませて、お茶はあまり飲ませなかったというようにいわれているようですが？

B：お茶はそんなに飲ませないね。

D：どんな理由があるんですか？

B：それはよく知らないよ。子どもたちがお茶をたくさん飲むと、胃もたれをおこすといわれていたんだ。子どもたちにお茶を与えてどうする、消化不良をおこすぞといわれてね。それはお腹の中の何かを変化させてしまうものだったんだろうよ。

D：そうですね、あまりお茶を飲ませなかったといわれていますよね。

B：そう、お茶はそんなに飲ませない、ヒヤラムを与える。そうこうして、春や夏になると、アイラグをお腹いっぱいになるくらい飲むからね。

D：一般的に夏は肉を食べますか、食べませんか？

B：ないね、ボルツ（揚げ菓子）を作るといって、肉はないんだよ。春のいつだったか、わからないけれど、ウーツ（保存用の肉、秋に肉を屠り皮袋などにしっかりとめて保存する。春に出してきて食べる）、ウーツなど、この入れ物に入れてまとめた肉（冷凍）を割って、それは新鮮なままだったような気がするんだよ、ウーツといっぴりひとかたまりにした肉を出してきて、それをゆでて食べるんだよ。ゆでて近所の家にもあげてね、他の家の人たちや何かにあげてね、うちはウーツを割ったからといって。それらが終わると肉を用意することになる。夏はまったく食べないよ、肉をね。

D：肉などは？

B：夏かい？ 肉を食べたいねえ。夏は肉は何もないよ。こうなってくるとね、春になってくると雪がたくさん降る、新年以後、ツァガン・サルのは、家畜が出産し始める。家畜が出産するころになると、土が見えてきて、雪が溶けてきて、こうやって土の部分が丸く出てくるころになると、こうして家畜が出産するようになるね。さあ、米を炊くのに使う乳が出たというんだ。こうしてオーラグ（初乳）をゆでて食べて、米に乳を入れて炊いて食べて、だいたい、こうして肉から離れていくんだよ。と

きどきほんとうにときどき、とても寒い雨のとき、昔はというととても雨が多かったんだよ。そういう寒い雨が何日も降り続いているときに、血や肺…、なぜうちはボルツを入れなかったんだろうね、ボルツはだいたい入れなかったんだ。脂身はこんなに大きくて、脂身を切ってパンタン（小麦粉を溶かしたスープ）を作る。ああ、そのおいしかったことといたら。肉の姿を見ない（肉をほとんど食べていない）からね。

D：大麦粉や何かはありましたか？ ザムバイ？

B：大麦粉はこのあたりにはなかったよ。そのザムバイ粉というのはゴビの方にあったんだというよ。そう、私が小さいとき、大麦粉というのはこのあたりでは見かけなかったね。後になって、少し入ってくるようになったよ。そのザムバイというのはこの南側ゴビの方にあるんだというね。

D：あなたは放牧をしていて、そのあと工場で働くようになったんですか？

B：そうだよ。私は放牧をしていて、そのあと国营農場で2年間ヒツジの飼育をして、そして工場に入ったんだよ、そして工場で働いてね、30年近い年月、工場で働いたんだよ。そしてそこで定年になった。

D：工場ということですが、どんな工場だったんですか？

B：小麦工場だよ。この小麦工場はずいぶん昔に設立されたんだよ、うちのこのあたりにね。そして、この国营農場が作られて、その近辺の人びとを労働者にしたんだよ。遠く離れたゴチン（ゴチン・オス・ソム）やボグド（ソム）などから人びとを連れてきてね、労働者として働こうとやって来たんだ。遊牧民にしたり、トラクターの運転手にしたり、労働者として工場で働かせてね。

D：ほとんどは若者だったんでしょうね？

B：みんな若者だったよ、みんな私の同世代の若者たち。若い、20歳になったばかりの若者。

4 社会主義時代の祭りと信仰

D：当時、あなたが若かったころ、祭りやナーダム（祭典）というようなことはおこなわれていましたか？ どんなお祭りがありましたか？

B：おこなわれていたよ。ナーダム。ナーダムがおこなわれるんだ。ナーダム以外の祭りはほとんどないよ。ナーダムが開かれていたよ。ときどき、選挙になる、選挙というと例の選挙用のゲルを持ってきて、エルデネ・ゾー寺院のところに持ってきて、何日前にゲルを建ててしまう。そして、中にはシャタル（将棋）やダーム（ドミノ）が置いてあってね、あれもあったかもしれない、こういうラジオ、52（ロデイナ52）というものがあったんだよ、そのラジオが置いてあった、そして、こういう広報の掲示板など。それらを見ようとして混み合っていたよ。それはまた、とても楽しいものだったよ、選挙を行って競馬をする、またシャタルやダームの選手権をおこなうんだ

よ。相撲も取る。それ以外には、ナーダムがあった。ナーダムはとてもすばらしいものだったよ。ああ、私たちにとってはね、今の子どもたちはどう思うかわからないけどね。朝は早く起きて、ウシの乳搾りをしたあと、ここから南へ、シャンハに向かうんだよ。搾乳をして、日が昇る前に乳を渡して、そのナーダムに行くんだよ、馬に乗って走っていく。みんな一緒に馬に乗ってね。そして夜に戻ってきて、また乳搾りをして、乳を渡して翌朝にはまた行くんだよ。3日間おこなわれるものだった、ナーダムはとてもすばしかったもんだよ、ナーダム。3日おこなわれて、1日目、2日目は子どもたちを行かせる。3日目になると両親が行く、年配者が。今思うと、その3日目はアルヒ（ウォッカ）や何かを全部、3日目にすべてを集めて飲んだらうよ。私はそう思っている。そういうナーダムというものがおこなわれていたんだよ。

D：ツァガン・サルは？

B：ツァガン・サルかい。一時期はしてはならなかったんだよ。一時期ツァガン・サルは、私が小さいころはおこなわれていなかった、新年の挨拶もさせなかった。そして、例の仏へのお供えの食べ物や米なんかは供えさせない。大箱の中に、前に開くこんな形の箱に入れておいて、夜更けになると箱を開けて、そこで灯明をあげる、こんな感じだったんだよ。

D：ツァガン・サルに？

B：そう。一時期とても大変だったんだよ、私が小さい頃というのは。とにかく、そんなことをしたというと、そのバグの教化者という者たちが、とても威張っていた奴らが、いたんだよ。常に走ってやってきてうるさいんだよ、常に走ってきてはそのお供えのお皿に入った食べ物や米、仏へのお供えを調べてやめないんだよ。

D：それはいつくらいの年代ですか？

B：それは60何年だったよ。60年そう、58、59年に57、58年このくらいにはまったく新年の挨拶をさせなかったよ。後になると、50年代の後半にネグデルで働くネグデルチンたちの祭りだといって（彼らはするようになった）、労働者たちは行ってはならない、このネグデルの家畜を飼っている遊牧民はツァガン・サルを行っていたんだ。ずっとそうしていて、最後にはツァガン・サルをさせるようになった。

D：当時、あなたはツァガン・サルをすることはできなかったんでしょ？

B：できないよ。私たちは労働者だといって、ツァガン・サルをおこなわせないというんだよ。

D：灯明の25（旧暦の冬の最初の月の新月から数えて25日目に多くの灯明を灯して徳を積む習慣）というのは行っていましたか、当時？

B：私は暗闇（無宗教、無知識）の中で生きてきたから、ゾリーン25は知らなかった。その後、ゾリーン25と、年配の人たちはそのゾリーン25を、後になって、かなり後になって行ってたよ。他の場所では行ってたんだろう。私はまったくその暗闇のま

ま過ごしてきて、信仰心の薄い人間なんだよ。

D：あなたが幼いころ、あなたの家には仏画や何かはありましたか？

B：あったよ。仏画を隠してしまうんだ。仏画をわかるように置くと、例の奴らが怒ってね、何というものだったか、その捕まえて行くといってやめない、宗教の残骸だといって、黄色い宗教（チベット仏教）の残党だといって。そして、封建主義の残りだといって、仏を拜むことは表だっておこなわせない。仏や供物というのは私が小さいころにはこの岩の空洞にたくさんあったんだよ。岩の窪みに経典などが、そこそこに仏が。そうやって隠していたんだろうよ。

D：夜になると仏を出してきて、灯明やお香をあげますか？

B：ああ、そうだね。こんな大箱の中にしまい込んでいて、夜、大箱の前面のふたを開けたままにしておいて、灯明やお香をあげるんだよ。

D：毎夜あげますか？

B：毎夜あげるよ。それを毎夜あげて、朝になるとお供え物をする。そして素早く閉めてかぎをかけてしまう。

D：そのほかの家はどんな感じだったんですか？

B：知らないね。そのほかの家がどんなだったか、小さかったからねえ、そのころは。うちの近くの家ではだいたいそんな感じだったよ。

D：お守りや何かを身につけますか、つけませんか？

B：つけるよ。こういうこんな感じのもの。仏（の絵）やお守りやなんかを、皮を粗く縫ったお守り袋を作って、そこにに入れて首からさげていたんだよ、小さいころ。それまではさすがに調べられないみたいだったよ、大人も子どももそういう仏を持っている。

D：まじないの言葉や何かを教えてくださいませんか、例えば何かから怖がっているときなど。

B：教えてくれるよ。誰もいない草原に行くときに、怖かったりしたら、それを唱えなさい、今はあまりよくない時代だから、これを唱えていなさいとそれを教えてくれるんだよ。

D：両親が教えてくれますか？

B：ああ。両親が教えてくれる、他に誰も教えてくれないよ。

D：当時、一般に僧侶はいたんでしょうか？

B：いないよ、僧侶の格好をした人はまったく見かけることはなかった、僧侶だという人はときどきいたように思うよ。しかし、僧服を身につけることはない、普通の人の格好をしていた。

D：そして、家畜を飼って？

B：家畜を飼って、本当に普通に、そうでなければ、例の封建主義の残党といって捕まえていかれてしまう。

D：妻子はいたんでしょうか、いなかったんでしょうか？

B：妻子を持っているよ、彼らはみんな妻と子どもがいる、あそこから出て、寺院から出て（還俗して）、妻子を持つようになったんだろうよ。みんな妻子持ちのそういう人たちだよ、宗教が認められてから、この寺院、エルデネ・ゾー寺院にたくさん僧侶になって戻ってきたんだよ。だいたいみんなとても知識のある人びとだったようだよ。

D：そういう人びとは隠れて経典を読んでいたんでしょうか？

B：ああ、読んでいたよ、深夜に読経していたんだ。ツァガーン・サルのもとには必ず年配の人びとを連れてきて、とっぶり夜がふけたあと、天窓の覆いを閉めて経をあげさせていたんだよ。天窓の覆いをしめなければ、人が入ってくるかもしれないから。そのように深夜そうやって経を読んでいたんだよ、声をひそめてね。

D：僧侶からはときどきいろいろなことを聞いたり（教えを受けたり）したんでしょうか、どうだったんですか？

B：そうだねえ、聞くことは聞くね。でも、聞いている方も、聞かれている方も、絶対秘密にして聞かないと、「そういうことを聞いて、占わせている」と告げ口されたとしたら、双方罪に問われるんだよ。内密に聞いていたんだよ、後になって、少しはましになって…。

D：どのくらいの時期からましになったんですか？ だいたいいつから仏教への信仰を明らかにできるようになったんですか、それぞれの家では？

B：だいたいましになったのは70年に近くなってからだよ、恐れるのをやめたんだよ。それ以前は仏教を信仰することを、一般的に少し怖がっていたよ。僧侶に経を唱えさせる、その人を招く、祝福やお香を炊いてお清めをさせることや何かから、とても恐れていたねえ。70年代が近づいたころ、少しましになったんだよ。

D：ダライ・ラマがモンゴルを訪問したとき、そのときあなたはそれを聞いていましたか？ 田舎にいるとき、60年代の、70年代のころ？

B：私はそのころはソム中心地で仕事をしていたね。

D：そういうことを聞きましたか？ ダライ・ラマが来る、モンゴルに来るんだということなどを聞いていましたか？

B：ああ、聞いていたよ。ウランバートルにダライ・ラマがやってきて。それはというと70何年だったんだろうか、70年代だったかね。かなり昔のことだよ、ダライ・ラマがウランバートルを訪問しているという。どこに行った、ガンダンの丘が人でいっぱいになって入り切らなくなってしまった、バスや道路が通行止めになったなどが噂されていた。そして、そして、その米をダライ・ラマがこうやって撒き散らすとそれを拾おうとして人が折り重なって倒れたなどと話されていたよ。

D：それを、当時は反宗教ということをどんな人びとが語っていたんでしょうか？ 党の指導部の人たちやなんかですか？

B：ああ、例の党の人たち。

D：その人びとは反宗教の宣伝をかなり行っていたんでしょ？

B：ああ、とってもね、かなり行っていたよ。宗教というのをみんな悪くいうんだ。意識を混乱させるものだといって、長い年月200年あまりもそれに抑圧されてきたんだといって、それらを悪くいう、とても悪くいうんだよ。80年代になっても、悪くいうのは変わりなかったんだ。ずっとそうした状態で、最後にはかなりましになったんだよ。

D：あなたの家には経典などはありましたか？

B：うちには経典などがあったんだろうけど、どうしたかは知らないよ。

D：経典などをどう使っていたんでしょ、僧侶などに持って行って読ませたりしていたんでしょか？ それともただ置いておく？

B：そうだねえ、ほとんど読ませたりはしないよ。ときどき必要なそのとき、1年に1回読ませていただろうか、そういう読ませる経典がうちにはあったように思う。それをときどき読ませるんだ。うちは後になって経典を持つようになった家だからね。そうして、私が縁遠くなって、ある家に嫁ぐことになって、家を出てしまった。それからどうしたのか、無くなってしまったみたいだよ。経典もない、仏もない、どちらも無い。思うに、うちの母が「さあもうやめよう」といって無くしてしまったんだろう、エルデネ・ゾー寺院に納めてしまったのかもしれない、どうしたのかねえ。

D：あなたは若いころ、この仏教についてどう思っていましたか？

B：ほんとに、何も考えてなくて、人のいうようにそういう嘘のものだと思っていたよ。私みたいなものにはだいたい嘘を話すんだからね。今思うと、いつも意識を混乱させる、封建主義や何かだとその2つが話されていたんだ。本当にそういうもんだと思っていたんだよ、私は。

D：アルテリ（手工業生産組合）はどこにあったんですか？

B：アルテリかい？ このホジルトに「ホジルト・アルテリ」というのがあった。このシャンハには「シャンハの下のセンター」というのがあった。また他にもう1つのアルテリがあったよ。靴を作っていて、とても美しいモンゴル靴を作るんだ。

D：アルテリに僧侶たちはたくさん働いていたんでしょか？

B：年配のいろんな人たちが働いていたんだよ、そうだっただろう。後になって、残った何人かの僧侶たちがいたんだよ、このシャンハで働いていた人びとの「ホジルト・アルテリ」に私は本当は行ってみたことがない。ホジルトにはあった、「ホジルト・アルテリ」というのにね。ホジルトというのは一般にかなり上のほうにアルテリがあって、温泉や保養所があって、またそのあたりにはかなり大きな寺があったようだよ。

5 文化躍進運動

D：文化躍進運動というのがあったときはどんな感じだったんですか、その文化躍進運動は？

B：おお、そうだね、文化躍進運動をやったときは、私はもっと大きくなってしまっていた、もっと大人にね。文化躍進運動っていうのは本当にひどいもんだったよ、私たちをひどい目にあわせたもんだよ。文化躍進運動、3つの省の検査だといって。文化躍進運動がやってくるといって、3つの省の検査だといってね。

D：文化躍進運動で何をするんでしょうか？

B：それはもういろんなことをさせるんだよ。各人ごとに個人の布団を持ち、個人に2枚ずつの取り替えるためのシーツをもって、2枚ずつの交換用の掛け布団カバーをもって、そうやってそれらがちゃんと準備して洗ってあり、こうしてある。夜用の布団はまた別で、そしてそれにつけるシーツたち。そして入浴するためのタオルや風呂桶、そして足ふき用のタオルや何やとって各人ごとに1つずつ。それはね、本当に私たちをひどい目にあわせたよ。たくさんの子どもたちと仕事のかたわらでね。夜には、〔疲れていて〕こんなふうの子どもたちの靴が散らばったまま、寝てしまうしかなくてね。そうすると深夜、家に入ってきて調べるんだよ。当時、不可という成績をつけられたら、どうしよう、どうしようと思っていたよ。さすがに牢屋には入れないだろうけどね。そんな感じだったよ、その文化躍進運動っていうのはね。子どものおもちゃを置く一角、本の一角、本棚、衛生用品がなどと、ないものはないよ。そして、このゲルの柱から1つ1つノートがぶら下げられる。そして例の長、その地区の長や何かが入ってきて、調べるんだよ、1週間に2回は来なかったけれども。見て悪かったならば、そのノートに不可だと成績をつける、優や良ならば、良というふうにつける。そうやってこの柱の上の方などを、この天窓の中側を、彼らは綿でこうやって拭いてみてね、なんて傲慢な奴らだろう。カーテンの棧などもこうやって拭いてみて、埃がついていたら不可だよ。

D：今こうやってカーテンが引かれています、こういう文化躍進運動のころから、入ってきた習慣ですか、家々ではカーテンをつけていますよね？

B：そう、このベッドの前？ それはそのころから自分たちで飾るようになったんだよ。そして家ごとにこういう塗装をしたゲルじゃない。その文化躍進運動のために、ほとんどの家がみんな茶色いゲルだったから柱を洗って、きれいな色にしようとするけど、できない。だから、削って削ってね、そうして洗って拭いて、柱や天窓を洗ってばかり。その文化躍進運動っていうのは本当に大変だったよ、大変だったように思うよ。

D：以前、人びとはそれらを使っていたんですか？ そのシーツや何かを。あるいはただしまっただけだったんですか？

B：使うよ。家族が多い者たちはそれらをかぶって眠って、その布団や何かはどんどん

増えていくんだよ。そしてそれはいつもきれいにしておかないとね、突然入ってきて検査されて…。

- D：鉄製のベッドがあったんですか？ それとも木製のベッドがあったんでしょうか？
- B：木のベッドがほとんど、そして1つこういう青い枠の、緑の枠のベッドがあったんだよ。手に入る上等のベッドがそれだよ。この鉄製のベッドというのは、それらのベッドの後に入ってきたんだよ。うちが中心地に移ってきて、1つの青い枠のベッドを置いて、そして1つの木製の色のついた（モンゴルベッド）…それがあって、本当にきれいな物に思われたよ。今でもうちにあるよ、煙で黒くなってしまったけどね。田舎の者たちにはそういうベッドはないよ。とても上等の物といえば、その色のついたベッド（モンゴルベッド）、そしてだいたいこういう板で作った寝床。板寝床という、長い板にこういう足をつけて、作ったものをみんな置いていたんだよ。
- D：同盟（組合）のメンバーとならなければならない？
- B：そう、同盟（組合）のメンバーだよ、労働者同盟のメンバー、労働者同盟のメンバーでなくてはならない。
- D：党員でなければならないんですか？
- B：党員は絶対ではないよ。よく仕事をする、よい教育を受けた人びとが党員になるんだよ。党員になるときにとても大変だっただろうよ。3年見習いをして、そうして、こうして、ってね。3年間見習いをしたあと、党員にしたんだという。
- D：当時、給料は生活するのに十分でしたか？
- B：十分だったよ。給料はね、その額というのはあれだよ、評価がいいんだよ。お金はお金らしかったんだよ、当時はね。当時というのは生活するのに十分だったよ。見張り（管理人）は100トゥグルグくらい、120トゥグルグくらい、見張りや掃除夫や何かは120トゥグルグの給与をもらっていた、一部、それらの上役になると、少しまた180トゥグルグや何か、そしてこの工場ではね、小麦畑などで機械を動かして働けば、わりといい給料がもらえる。350、400トゥグルグ多くもらうよ。400や350トゥグルグ、当時の400、350トゥグルグといえば、今を思えばたくさんのお金だよ、いっぱいお金が買えるお金。うちはというと、私たち2人ともノルマで働く、私も自分のノルマをこなし、亡くなった夫もノルマをこなして、私たち2人は給料をもらっていたんだよ。だから十分だったね。
- D：品物や何かはどうだったんでしょうか、わりと豊富だったんですか？
- B：おお、品物は豊富だよ、商品は悪くなかったよ。たくさんあったんだ。ダーリムバ（粗製の木綿布）や何か、ヤムボー（粗い木綿布）やなんか、いろいろね。
- D：ロシア製ですか？
- B：ロシア製だよ、みんなロシア製。ダーリムバ、ヤムボー、そしてサテン、ジグーン（布の一種）。今ではどれも見かけなくなったね。

D：中国製品は？

B：今、中国製品は豊富だね。

D：中国製品はその当時あったんですか？

B：中国製品、絹が入ってきていた。18の絹（1メートル18トゥグルグで売られていた絹）、36の絹（1メートル36トゥグルグで売られていた絹）とって、それは、それは美しい絹、今の高い絹があった。ロシアは絹製品では今ひとつの所だね。ロシアからとってそういう美しい絹はまったく入ってこない。ロシアのもっとも美しい絹は柔らかくて、まあそれなりの絹だったよ。22（1メートル22トゥグルグで売られていた絹）とってね。それからいろいろなちりめんがよく入ってくる、ロシアから。ロシア製といわれていたけど、本当はどこからかは誰も知らなかった。そして粗悪な品物がたくさんやってくる。私たちは今の子どもたちのように着飾ったりはしなかったよ。ヤムボーやダーリンバでデールを作って着るんだよ。外出するときはサテンでデールを作って着るんだよ。そして大きくなって、ちゃんと着飾るようになると、絹や何かでデールを作って着るんだよ。私たちの着る服というのは絹と靴の2つだけだったから、消費は少なかったよ。いろいろな既製服なんかはほとんどなかった。

D：工場にはロシアの専門家などがいたんですか？

B：工場はハンガリーのだったから、ハンガリーの専門家たちがいたよ。これはハンガリーの工場だったんだよ。

D：へえ、そうですか。

B：そう。だからハンガリー人の専門家たちがいたんだよ。2、3人のハンガリー人がいたよ、ハンガリー。

D：彼らはここにずっとこうやって？

B：そう、ずっとその中でね、彼らは宿舎を持っていて、中に住んでいるんだ。そして、順番に交代で昼夜なく工場の中で働いている、工場を作って、そして技術を教えてやってね。

D：訳がついていたでしょうね、今思うと？

B：そうだね、通訳がいたんだろうねえ。でも特別にそういうものはなかっただろうよ。身振り手振りでね、こうやって。そうやっているうちにその言葉を覚えてしまうんだろうよ、一緒に働いている人たちだから。これはハンガリーの工場だから、ハンガリー人がいたんだよ。その南の発電所はポーランド人がいたよ。ポーランドの援助で建設されたからね。このアルコール工場これらは…。

D：遊牧民の子どもたちはピオネールに入る、そういうものだったんでしょうか？

B：みんなピオネール。ピオネールじゃない人なんていないよ、みんなピオネール。

D：学校に行く、行かないに関係なく？

B：学校に行った、学校に行く、行かないは関係ない、学校に行けばピオネール、例の

赤いスカーフを首に巻いてね、デールの上に結んでね。

D：あなたもつけていましたか？

B：どんな制服とかっていうもんじゃないよ、私のころはね、デールの上にそれを結んでいたんだ。

6 民主化時代の宗教と経済

D：この地域で有名なラマや転生者などという人びとの歴史や何かもあったんでしょうね？

B：ああ、あったらうよ。まったく知らないよ。私は暗闇の中で生きてきた、暗闇のままやってきた人間だからね。歴史や何か、あったと思うよ。うちのこのあたりには「オルホンの先生」という名前の人が1人いたんだ、ただ1人、年を取った人がいたんだよ、その上（北側あるいは川上）の方にね。

D：あなたはその後いつごろから仏教を信仰するようになって、こうやって家でまつて来ましたか？

B：まあねえ、例の宗教がよくなってからね…うちはだいたい信仰のない家だったんだよ。そうしていて、あとになって、かなり最近、この90年代から仏をまつようになったんだよ。

D：その僧侶は誰ですか？

B：どの僧侶？

D：それ、そっち側にある写真の？

B：違うよ、これは私の子どもたちの父親、父親の写真だよ。

D：ああ、そうですか。

D：私は僧侶か何かとだろかなあと…。

B：僧侶じゃないよ。

D：そうですか、この仏たちを最近になってまつたんですか？

B：そう、最近ね…。仏の名前も知らないんだよ。最近になって子どもたち…

D：経典や何かも最近まつたんですか？ それとも家にあったものですか？

B：うちにはまったく経典なんてなかったよ。これはうちの1人の息子のものだよ。上の子の2人の子ども（孫）のうちの1人、もう1人の子どもの2人の僧侶がいるんだよ、その2人が1つずつくれたんだよ。

D：ああ、子ども、あなたの子どもの中でラマになった子がいたんですか？

B：うちの1人の婿が僧侶なんだよ。あそこの、エルデネ・ゾー寺院の僧侶。経典のない家なんてないもんだとってね、その大きい方をくれて、その小さいほうをゴムボ（人名）がくれたんだよ、うちの息子の子ども（孫）。それもまたエルデネ・ゾー寺院の僧侶だよ。それがくれたんだ。

- D：あなたは息子が僧侶になるとき賛成しましたか？
- B：それは、あれだよ。その小さいほうはといううちの息子の子ども。その大きいほうはうちの婿だからね。これに対して嫌だなんていう話はどこからも出てこないよ。彼らはそれぞれ別々に自分たちの好きな道を生きているんだからね。
- D：あなたは今は毎日エルデネ・ゾー寺院を拝みますか、あるいはドゥイチンの日（春の最初の月の上旬、新年の15日間）だといって拝むんですか？
- B：ああ、ときどきそういうことをするよ。熱心じゃないからときどき忘れてしまうんだ。毎日お供えしようとは思っているんだけどね。
- D：このシャンハの寺院はいつ開院されたんですか、だいたい？
- B：このシャンハの寺院はいつ復興されたんだっけ？ …最近だよ。それほど間がないよ、92、3年の時代だったか。
- Bの娘：うちのお父さんが94年に亡くなって、そのころやっと復活したところだった、94年に読経をさせるといって…。
- B：ああ、そうだよ、亡き夫が亡くなって、それでシャンハに行って…そのころ復活したところだったよ、92、3年に復興したんだ。
- D：そのときはかなり年配の人びとが法会にはいたでしょうね？
- B：そう、年配の人たちがいたよ。今では年配の人はいなくなってしまったよ。かわいそうにそうしてみんな年を取って、年寄りから先に…。今では子どもたちが主にいるようだよ。
- D：今ではこのエルデネ・ゾー寺院にラマの転生者はいるんでしょうか？
- B：エルデネ・ゾーにはだいたい少ないよ。エルデネ・ゾーには年配の僧侶の人はほとんどいない。だいたい若い僧侶だよ。一般にエルデネ・ゾー寺院には年配の僧侶はほとんどいないねえ。
- D：あなたの世代の人びとから僧侶になった人はいたんでしょうか？
- B：いることはいたよ、ときどきね。今はもういないだろうよ。私の世代の人の中から僧侶になった人はとても珍しく、少なかったよ。南側のシャンハにシヒハヤン（人名）だけがいたんだよ。このエルデネ・ゾー寺院にはほとんどいなかったんだよ、見かけなかった。私の世代より少し年配の者たち、年配の僧侶たちがいたんだよ。そして後の世代、今30何歳より若い20何歳のあなたたちのような、こういう子たちの僧侶がいる。このエルデネ・ゾー寺院の最高位の僧は若者だよ、30何歳の人がいる。うちのプレブはまだ40歳になっていないだろう、なったっけ？
- Bの娘：なったわよ。42歳よ。
- B：おお、そうならばプレブと同年だよ、うちのプレブと同年だというよ。その最高位の僧は…。次のヒヤムバ（人名）はもっと若いよ。
- D：このエルデネ・ゾー寺院の？

- B：そう、もっともっと若いんだよ。
- D：2人のヒヤムバがいるんですか？
- B：2人。イヒ（大きいほう、あるいは年上のほう）・ヒヤムバはかわいそうに身体が弱いみたいだね、ときどき座って、ときどきは座らない。
- D：あなたはこのお寺に参拝しますか？
- B：行くよ。
- D：どんなときに行きますか、法会や読経をさせるといって行くんですか？
- B：法会のときや読経をさせるというときに行くよ。そしてときどきドゥイチン（新春の法会）のときや何かに行き、拜むんだよ。今はあまり体の調子がよくないから、行けなくなってしまったけれどね。このエルデネ・ゾー寺院の大ゲスグイ（統括する地位の僧）、はうちの婿なんだよ。
- D：そうですね、なんていう名前ですか？
- B：エルデネチョローン。よくあれだよ、ウランバートルに行っているよ。
- D：今はウランバートルに行っていますか？
- B：行ってるよ。今はあっちにいる。
- D：パーサンスレンというのはそのヒヤムバですか？
- B：そう。
- D：ウランバートルに行っているようですよ、また。
- B：ああ。パーサンスレンとうちの婿のふたりは、同い年だということなんだよ。
- D：その2人がですか？
- B：そうその2人は同い年。1人が1歳年上だったっけ。同い年だといったよ。そう、今はウランバートルに行っている。南のこのオター・グムブや何かにもよく行くよ、うちのその婿はね。
- D：ここで僧侶になった人ですか？
- B：そう、ここで僧侶になった、とても小さいころになったんだよ。
- D：90年代になって、幼い子どもたちが僧侶になったその時期ですか？
- B：ああ、そうだよ、当時にラマに…。
- D：当時なぜそのように小さな子どもたちがラマになったんでしょうね？
- B：知らないねえ。僧侶にみんな憧れていたんだろうよ。今でも小さな男の子たちを僧侶にしようという話が聞こえてくるんだからね。
- D：自分からですか？
- B：自分から。この僧侶というのはなかなかいいものだと思うだろうよ。うちからはその息子の小さい子どもたち、それらの中で一部は僧侶になりたいなあといっているようだよ。うちからはそのうちの1人の息子の子どもがエルデネ・ゾー寺院で僧侶になっているよ。それと婿の2人が僧侶だよ。

D：ここではその、他に、一般に90年以後、仏教以外の他の宗教がありますが、ここでは人びとは…？

B：おお、ここにもあるよ、ここに何ていったっけ、イエス（キリスト教系）というものがあるよ。

D：ああ、そうですか。

B：歌を歌わせてねえ。そういうものがあるんだよ、この辺りには。

そのイエスはかなり昔からあるよ、かなり前に入ってきた。いまもあるだろうよ、あるようだよ、ある、ある。

D：子どもたちや若者たちがそこに出入りしているのでしょうか？

B：そう、子どもたちや若者が、最初彼らがやって来たときに、たくさん出入りしていたんだよ。今は特に目立たないけど、どうしたんだろう。うちのこの辺りからはそれだよ、信者になった若者たちが大勢いるようだよ、労働者というか、役人というか。それらは最初に本を配って、道を歩いている若者たち、柵のあいだなんかから、こういう小さな本を配っていたんだよ。今はやめたようだね。食事や飲み物も与えていたんだというよ。

D：ここには学校があるようですね、宗教の？

B：そう、そっち側にね、仏教の上級学校（大学）があるんだよ。その校長をしているんだよ、うちのその婿は。このエルデネ・ゾー寺院の僧侶たちというのは、そうしているんだよ、いくつかの仕事を兼業しているんだよ。国から給与というものがなさそうだから、それでやっていっているんだから。

D：社会主義の時代には一般に宗教を厳しく監視して弾圧していたのでしょうか、どうだったのでしょうか？

B：そうだよ、ひどく弾圧していたんだよ、宗教を。社会主義時代というのはひどい目にあわせるんだよ、これを弾圧しようね。少なくとも人びとが相談したり、布教したりすることはできないんだよ。ときどき、1人の僧侶、時折優れた人の子どもや何かに相談したいと思っても、隠れて夜が更けてからの時間だけ尋ねることができて、そしてまた、不必要に何度も訪ねることはできない。何もできなかったよ…民主化してからやっと公然となったんだよ。それ以前は絶対に秘密だったんだよ。

Bの娘：私はよく覚えているわ。80何年だったか、うちの両親にツェレンナドミドという長の人を仏をしまえとっていたのを覚えているわ。

B：そうだったよ。そして80何年ごろはその仏を出させなかったよ。ひた隠しにするんだよ、それを。チーデレク（知人の名前）までも、ダワースレンが病気にときにはシャンハに行って僧侶に相談しようと、深夜に行ったもんだよ。かなり前のことだよ、それは。深夜相談して、もどってきたんだ。怖かったんだと、人に知れるのを恐れているんだとそういっていた。シャンハに行って相談していた、そこには僧侶がいたん

だよ。その土地の人間なら知っている、優れた人だということ。もしも世の中に知れたら、例の封建主義や何だといって、やられてしまうだろうよ。

D：オポーをまつったりしていたんでしょうね？

B：いいや。オポーをまつというのは、それはなかったんだよ。民主化したあと、このオポーをどこでもまつようになった。それだけでなく、オポーをまつ、作るということなんかは、もしもそれをまつていたならば捕らえられてしまうだけでなく、処刑されてしまうだろう。当時には自分の財産というものはなかったものだから、仕事をやめさせると脅していたもんだよ。仕事から追放すると、工場長がやめさせるといって。

D：普通にアルツ（松の芽を粉にしたお香）やお香を焚くということはありませんか、そのころ？

B：ああ、焚くよ。アルツはね、それを焚きなさいといっていたんだよ。それはなぜかということ100メートル以内を清めているといっている、アルツを焚きなさいといっていたんだよ。アルツは焚いていたね、大丈夫。

D：そして、自分をこうやって煙をかけて誰がお清めをしますか？

B：お清め？ 自分で清めるよ、誰かに頼んでするのはだめだっただろう。ちょうど子どもが入院しているとき、外からアルツを差し入れようとすると、シャンハの人たちはいつもこういうことをするといっているのしっていたものだよ、お清めをするといっている怒っていたんだよ。ゾル（子どもの名前）が入院して、かなり後のことだよ、1年生になっていた、そのとき、知り合いの同郷のそういう当直、看護婦が当直をしているときに、アルツを入れないと、持ち込ませないんだよ。シャンハの人たちは信仰をしている、アルツを持ち込んだといっている。

D：では少しのアルツやお香なんかはあげていたんですね。

B：そう、あげるよ。そして後になって、この民主化したあと、本当に恐れることをやめたんだよ、仏や信仰、ラマ、転生者、何だろうが特に怖がることはない。

D：信仰者連合というのが一時期でできましたよね、90年代以後？

B：ああ、そう。

D：その人びとや何かがやってきて寺を支援したんでしょうね？

B：ああ、そうだろう、私はよくは知らないよ。

D：あなたが小さいころ、経典をこうやって持って、ゲルを回ってこうやってぐるぐる回る、そういう習慣を行っていたんですか？

B：するよ、夜になると、夜にはゲルをこうやって、経典を持って家を回っていたんだよ。

D：それは子どもたちが持って回るんですか、あるいは大人が回りますか？

B：私たちが自分で回っていたよ、それがどういうことだったのかは知らずにね。帯を

しめて、帽子をかぶって、とても美しく回るんだよ、それは。何回でも回るんだよ、そしてドゥンゲルドゥンゲル（経文を唱える声）といて回っていたもんだよ。マーニタルニア（経文）を唱えて回っていたんだよ。

Bの娘：エルデネ・ゾー寺院にはまったく僧侶はいなかったのかしら？

B：いなかったよ。このエルデネ・ゾー寺院は完全に閉鎖されていたんだよ。この仏塔、今この外側の仏塔はみんな頭がない。利用されずにいるうちに、崩れ果ててしまったんだよ。そして、これは後になって、70何年から始まって、修復して、博物館にすると修理をして、博物館にするととてもきれいに修理してね。そして博物館になって、そしてその後、僧侶が法会をするようになったんだよ。

D：この法会の僧侶たちはこのあたりの子どもたちですか、この辺りの僧侶ですか、それとも？

B：だいたいはこのあたりの者だよ。このあたり、エルデネ・ゾーは大勢の僧侶がいて、秋の法会や何かには僧侶でいっぱいになってしまうんだよ、ドゥイツェン（ドゥイツェン）の法会ならばよりたくさんだよ。

D：子どもたちなどに名前をつけるときはまた、年配の僧侶の人のところに行って、名前をもらっていたんですか、それとも自分たちでつけますか？

B：もらうよ。ほとんどは自らつける、でも、つけてもらうこともある、年配の人からもらっていたよ。秘密で訪ねて行ってもら。うちの亡くなった夫の親戚だという、とても優れた僧侶だといわれている人がいた。1地区にいたんだという。ダワースレン（子ども）の名前をその僧侶からもらったんだよ。アンジャー（僧侶の名前）のところに行きなさいと義母がね、さあ、おまえはアンジャーのところに行きなさい、夜に密かにいきなさい。そしてそのころ、60何年、62年だったかね、かなり夜が更けてから行きなさい。名前を聞いた朝の色になってね、聞き終わったときには。とても優れた人だったというよ。そしてその人から名前をもらったんだ。そして「ダワースレン」という名前をつけて、黄色い物で襦袢を作りなさいという、「さあ、このあとの子どもたちの名前はおまえが自分で名付けなさい。どんな曜日に生まれるか、その上にスレンという名前を加えて名付けなさい」とそういていたんだよ。

D：人が亡くなるときにもまたアルタン・サヴ（金の容器）や何かをまた秘密に開かせていた（葬式などの助言をうける）んでしょうか、どうだったんでしょうか？

B：そう、開かせていたんだよ。開く人は滅多にいなかったよ。1人の人が、シャンハにはたった1人の人が開いていたんだというよ。そしてその後、このあたりにも開く人がいたんだろうよ。いやほとんど開かせないんだよ、それからとても恐れる。そのアルタン・サヴを開かせに行き、知られれば、それは許されないことだといつてね。

D：人が亡くなるときに、どのように葬られるんでしょうか、特に何もなくて、日や何かを見ないでただ葬られていたんでしょうか？

- B：日を見るよ。よい日，よい曜日を見ないはずがないよ。見てそして，それはね…。
- D：自分たちで見ますか？
- B：自分たちで，そのダワー（月曜），パーサン（金曜）なんかを数えてね。そして私が小さいころには，そんな特別なことはおこなわれていなかったんだよ。ウシの曳く車の上に置いて，そして吊いをしに行くもんだったよ。
- D：そのまま置くんですか？
- B：そのままだよ。当時には多くの人には必要ない，1人の人が吊いに行くんだよ。息子が誰か，自分の家族や近い者がね，特別にそういう吊いをしてくれる人もいたよ。そういう1人くらいのそういう人が，1人でその荷牛車を曳いて連れていくんだよ。
- D：そしてどうしますか，灯明を灯しますか？
- B：ああ，灯すよ。灯明を供える，灯明を供えて，経や何かを当然読むんだよ，自分たちでね。
- D：それは特に制限されていなかったようですね。
- B：それを知られないように，秘密でね。それは特に知らせたりしない。
- D：ヨールカ（クリスマス）というお祭りは，いつごろから入ってきたんでしょうか，モンゴルに？
- B：かなり昔に入ってきたんだよ。このあたりにはちょうど国营農場が建設された，その年にヨールカを行っていた。他にモンゴルで，ウランバートルなんかでいつ入ってきたのかは知らないよ。
- D：どのように祝っていたんでしょうか，映画に出てくるように冬のおじいさんや何かがあったんですか？
- B：ああ，そうだよ。冬のおじいさん，そしてその雪の娘たちとダンスをするんだよ。冬のおじいさんはとても白い長いひげを生やしたおじいさんだったね。当時というのはヨールカの飾りや何かはいろんなものがあるよ。糸をこうやって引っ張っていて，そこに綿をこうやって燃って，そして紙でまた燃ってね。色をつけて何層にもしてね。鎖や何かも紙でこうやって作っていたよ，あなたたちの時代も作っていただろうね。うちの田舎ではこうやって作っていたんだ。紙でこうやっていろんな色に染めて，鎖を作るんだよ。今と同じような，とてもきれいな飾りなんかはないんだよ。
- D：ツリーの木なんかは入ってきましたか？
- B：ツリーの木はね，山から持ってくるんだよ。でも今，最近ではツリーを持つようになって，山の木を持ってくるのをやめたようだね。山から緑の木を見つけてくるのは。
- D：それは家ごとにそうするのですか，それとも？
- B：しないよ，家々はしない。ただこれは国营農場の公的な機関がするもんだよ。
- D：普通の家ではだいたいお祝いしたんですか？
- B：お祝いするよ。でもそんなに盛大にヨールカ（ツリー）なんかを飾ったりはしない

よ。後になって、90年代以後、子どもたちにツリーを飾ってやるべきだと、飾るようになった。私はそういうものにとてもうといんだよ、うちはだいたいそんなふうにつリーを飾ったりはしなかったね。

D：当時、ロシア人たちはいたんでしょうか、一般にハラホリンに？

B：いなかっただろうよ。ロシア人を知らなかったよ、だいたい見かけることはなかった。

D：中国人は？

B：おお、いないよ。中国人はこの水路を建設して、それが終わると、追い出されて出て行かされてしまったよ。うちのハラホリンには中国人まったくいなかったと思う。少しの、1人くらいの年寄りの中国人がいたということもなく、まったくね。この南側、シャンハの方には1人か2人の年寄りの中国人がいたよ。それはそうやって暮らしていた中国人を国民党の兵士の追放というものがおこって、そのときに彼らを追放させてね、残った者を集めて連れて行ってしまったというよ、まったく抵抗できなかった。

D：ああ、とても昔。

B：とても昔。

D：20年代ですか？

B：そう、そして中国人はいなくなった。そして残った中国人を、私がとても小さいころ、50何年ごろだったからよくわかってはいなかったよ。そして残った中国人、この町中は中国人でいっぱいといっていたんだよ。残った中国人を集めて、追い出して、国外に追放してしまった。そして、ほとんど中国人はいなくなったんだ。今では、中国人がとても多くなってしまっているよ。中国人に支配されると危険なんだというよ、バザルワーニーホームパド（厄除けの意味で用いられる感嘆詞、ああ、仏さま）。

D：ロシア人たちには好意的だったんでしょ、当時？

B：ああ、ロシア人には好意的だったよ。ロシアを褒め称えていたんだよ。ロシアをとても褒めるんだよ。わがロシアの兄たちといってほめていたよ。

D：一般に今、人びとはたくさんアルヒを飲むというようですが、当時はだいたいアルヒをよく飲んでいたんでしょうか、どうだったんでしょうか？

B：ほとんど飲まないよ、アルヒを。アルヒはとても貴重だった、今と同じようにこういうロシアのアルヒなんかはとても珍しかったんだよ。ときどきわずかにモノポリ（モンゴル製アルヒの名前）というときどきそれがあるっていう噂を…そう宴会や結婚式なんかをしている家は1本か2本の瓶や何かがあったんだよ、どうやって手に入れていたんだろうか。そして、モンゴル・アルヒ、蒸留、蒸留したアイラグ（乳酒）がある。ツァガン・サルや何かになっても、そのロシア・アルヒはないものだよ。そのモンゴルの蒸留酒をちょっとだけね、その家でまあできる範囲で、そう2リットルか3リットルか、瀬戸物の入れ物などに少しそういうアルヒを持っている。そしてアイ

ラグを飲むよ。今と同じような規律のない状況じゃあないよ。せめてこうやって座ったとしても順列で座る。そして一番年上の人が上席で、年齢の順番で座るんだよ。そして小さな子どもたちや何かは、その下座のほうにこうして。そのアルヒや何かを飲むときには、30歳以下の人びとにはくれないんだよ。それは上座の何人かの有力な年配者だけが彼らのあいだでそれを飲むんだよ。

D：この工場の労働者たちもまたそれほど飲まないんですか？

B：当時は飲んでたよ、でも今と同じようにこんな無秩序には飲まないんだよ。ときどき、ある宴や儀式のときなんかには、その業務ごと、あるいはその部門ごとに集まるんだよ。それじゃなく、こうやって酔っぱらって、暴飲するということはないんだよ。だいたいアルヒはそんなじゃなかったんだよ、この何年か、完全に度が過ぎているね。アルヒも豊富になった、お金も豊富になったんだねえ。お金はというと、貴重なもののように、豊富なもののようになっているんだよね、今のお金ってのは。

D：当時、若者たちは今の30か40歳くらいの男性やなんかには、こうやって何かを尋ねようと思うと、よく知っている知り合いの僧侶、占える人やなんかいましたか、そして、お互いに少し調べて尋ねますか？

B：ああ、そうするよ。そうやってほしい両親が主に尋ねるんだよ。自分たちは一般にそれほど頻繁には行かないよ。そして40歳とか30歳後半になった人たちは宴会などの席でときどきそうしていたんだよ。私が若いころにはあれを、お酒を飲むときには年長者がこっち側に座る、ときどき腕に入ったアルヒがやってくるとこうやってね、かなり人の後ろに隠して、こうやって飲んだもんだよ。年長者の方を何回もちらちら見て、こっそり飲んだものだ。そういうきまりがあったんだ。今では、若者たちにもきまりなんてないし、大人にもないね。アルヒをそんなにやたらと飲んだりしなかったもんだよ。後になってだんだん、だんだんと、今では度が過ぎているよ。今よく流れている韓国の映画なんかも、アルヒの、子どもたちにとってアルヒを飲むきっかけを与えている映画のように思うね。その韓国映画を見ていると、とても若い娘たちもが常にアルヒを飲んでいるよ。ひどく酔っぱらって、アルヒを飲んで酔っぱらって気を失うと、1人がおんぶして走っていなくなってしまうんだよ。こういう韓国映画というものまたアルヒを飲む原因を作り出しているというよ。そして男の子たちはそんなふうにしていて、1人を背負って、いなくなっていくんだよ。

D：当時、結婚するときには両親が勧めるもんだったんですか、あるいは、自分たちだけで知り合って勝手に結婚するもんだったんですか？

B：違うよ。自分が誰かと知り合って、そしてそれをひた隠しにしてね、気絶しそうになるよ、知られることが怖くてね。

D：両親はまたいろんな人から年齢や干支が合うかどうかを尋ねたりしたものでしょうか？

B：知らない，聞いていたかもしれないよ，普通はどうするもんだったのか，今ではわからないよ。自分たちでね。両親からはほんとうに気を失いそうに怖かったもんだよ。秘密にしてね，秘密に…。

D：亡くなったご主人は子どもたちの名前を自分でつけたんですか？

B：自分でつけたよ。

D：人に尋ねたりしなかったんですか？

B：しなかったよ，みんな自分でつけたんだよ。

怖がると思ったら本当に異常なほどだったよ，はずかしかったんだよ，両親が怖かったのは。相手の知り合おうとしている人を見るとまた失神しそうになる。そんなふうだったんだよ，私たちはね。そうしているうちにある人と知り合って。

D：嫁問いなどはあったんですか？

B：その嫁問いや何かは，ああいう人たちにあったんだろうよ。その，例の金持ちの貴族や何か，そういう家系の人たちにあったものだろうね。私たちの時代にはなかったよ，私たちよりも前にあったんだろうよ。私たちの時代にはね，あなたは知っているかね，こうするもんだったんだよ。ある夜にね，ある夜に1頭のウマを曳いてやってくる，そして深夜くらいになったら出てきてくださいといってね。そのとき着ているデールのままでも構わない，出て行って，その人が2頭のウマと一緒に谷に立っているんだよ。私の場合は本当にそうだったんだよ。デールや服を持って来られるとすれば，お母さんがちょっと家を出たすきなどの場合で，デールを持ってこられることができればそれを着るし，持ってこられなかったらそのときに着ていたデールのままだよ。

D：ああ，そしてその人と一緒に行ってしまうんですか？

B：そうだよ，そのウマに乗ってね，行ってしまうんだよ。

D：そうやって逢い引きするんですか，それとも結婚するんですか？

B：結婚しようとしているんだよ。両親に隠れてね。後から親が探しにきて，また家に連れ戻されるんだよ，またそうやって。

D：両親はそれを知っていたんでしょうか？

B：知ってるよ，知らないわけがない。そしていい日を見てもらっていたと思うよ。必ず男性が正式にやってきて連れて行くという習慣があるといって，探しにきて一旦連れて帰るんだよ。

D：結婚の祝宴などはしますか，しませんか？

B：夏ならするものだよ。私は結婚の祝宴などはしていないんだよ。冬だったんだよ，冬だったように記憶しているよ。皿に盛ったもてなしの食べ物がおかれ，私が行ったときにはそういう食べ物があって，義母が肉をゆでてくれていて，置いてあったんだよ。亡き夫は母親にも何もいわなかったんだというよ。そうしていて，ある日，夜になったあとその2頭のウマに鞍をつけて曳いて行ってしまった，どうしたんだろうと隣の

人に聞いたんだというよ、亡き夫の母はね。すると、その人は息子さんはバダムハンドを連れて来ようとしてるに違いないといったんだ。義母は、ああ、本当にそういうことなんだろうと思って、お茶を沸かして待っていたんだけど、戻ってこない、かなり夜も更けてしまったんだよ、今思うとね。冬だったんだよ、それは冬だったように思うんだよ。若かったもんだよ、若かった。

D：ゲルを建ててくれるものですか？

B：建ててくれるよ。うちは実家で同居していて、小さな茶色いゲルで暮らしたあとに、後になって自分たちでゲルを建てたんだよ。

D：工場で働いていた人びとは寮や何かがあったんでしょうか、それとも？

B：ないよ、みんな自分たちのゲルだよ。後になって工場の建物（寮）というものができた。でも、寮に入るのは嫌だったね、それは。建物に慣れていないもんだからね。

D：暖かかったんでしょうか、どうだったんでしょうか？

B：寒かったみたいだよ。冬、寮に暮らしている人たちは寒くて死にそうだと話していたよ。暖房が弱かったんだろうね。後になって、そういう工場の寮として、労働者の寮として2階建ての建物があったんだよ。そこには何軒かの世帯が住んでいたよ。それらのわずかの世帯は冬には寒くて死にそうだと話していたもんだよ。寒かったんだよ、暖房が悪くてね。そしてその後、民主化になってね、それらも私有化されたんだよ。本当に人の家にいるってことほど、ばかげたことはないもんだよ。私有化したあと、住んでいた人たちを追い出してしまった。そしてその寮にいた人たちは前にはよかれ悪かれこういうゲルを持っていたんだけど、それを無くしてしまったと慌てていたんだよ、追い出されてしまってね。

D：私有化のときに券とって、そういうものをくれましたか？

B：ああ、そういうものをくれたよ。株式だといってあるものをくれたよ。うちには今もあるんだよ、その青い券があるよ。

D：ああ、旗や何かを描いてある？

B：小さいピンクの券は売ってしまった、それはすぐに売り払ってしまった。こっちのほうはね、いつまでも有効だ、子どもや孫たちの時代にはそれは高価な紙になるといつてくれたんだよ、最初にくれるときには。さあ、そしてその理由すらもわからない、どうしたもんだかそれをね、うちには6、7枚あるよ。これをどうにかしたいもんだとときどき思うんだよ。

D：民主化したとき、一般に人びとはどんな感じでしたか？

B：ああ、いろいろだったよ。一部は争いのない、いい時代が戻ってくるといつていた、時代がいい方に動いたと。一部はこの政権は60年だといわれていたというから、70年生き延びたのは10年長く生きていて、また戻ったんだと話していたよ。

D：話していた人びとというのは、どんな人びとだったんですか？

B：年配の人たちが話していたよ。私たちの世代よりも上の世代，40，50歳そのくらいになった。50歳を超えて60歳くらいの人たちだったんだよ。最初に人民革命が勝利して，このあたりの僧侶たちを減ぼしていたときには，時が来たんだから仕方がない。この政府もまあ短命な政府だよ，60歳の政府だと，僧侶たちはそういっていたんだよ。でも70歳になってしまった，この政府はといて。一部はいい時代がやってくると話していた，一部は悪い時代がくるといっていた，人はそれぞれそう話さずにはいられなかったんだよ。

D：あなたにはどう感じられましたか？

B：私なんかはいいことも知らないし，悪いことも知らないよ。どうなるものかなあと思っただけだよ。まあどっちでもいいさ，ひどく困らなければどっちの政府でもいいやと思っただよ。

D：当時，遊牧民たちは自分の勝手に冬用の肉を準備する権利があったんですか？

B：権利はあったよ。冬用の肉として食べるよ。

D：搾乳もする？

B：搾乳するよ，また。搾乳して，例の夏や何かはノルマの乳を渡すんだよ，ザボにね。そして，それを超えれば他に借りはない。それ以外にも，羊毛や何か取られないものはないんだよ，全部ノルマがあって，剛毛も毛も柔毛も，家畜から全部とるんだよ，さすがに糞は取らないけどね。その乳をザボに納めてしまえば，それ以上搾れるものは渡す必要はなかったんだよ。

D：自分たちで白いお茶を沸かす乳はありましたか？

B：ああ，乳はある。乳をお茶に入れて沸かして，タラグ（ヨーグルト）を発酵させていたよ。それに彼らはヒツジやヤギの乳は取らないんだよ。ウシの乳だけを集めていたんだ。

Bの娘：最後のほうはヒツジの乳も渡すようになったのよ，ね？

B：そう，その…。

Bの娘：私たちが小さいころは，ヒツジを搾らせなかったわよね。

B：そのころは搾らせなかったんだよ，あんたたちの小さいころはね。そして，乳をね，それになった，ああ何だったっけ，その私たちがいて解散した…。

Bの娘：ああ，国营農場？ 会社？

B：おお，そう。会社になってそれがヒツジの乳を取るようになった。

D：国营農場が会社になったんですか？

B：そうだよ。国营農場が解散して会社になって。解散してから会社になってしまって，そのヒツジの乳を取るようになったんだよ。国营農場はメリノス・ヒツジを搾乳させることはない，乳も取らない。

D：肉用のヒツジですか，毛用ですか？

B：毛，肉用のヒツジだったよ。たくさん毛が取れるヒツジだったよ。羊毛がとてもたくさん取れるんだよ。上質のヒツジからは5kgくらいは取れたんだというよ。体が毛でいっぱいなヒツジは今ではこのテレビなどでときどき出ているようだね。放牧に慣れさせていないから，放牧するときとても大変な家畜だよ。

D：そうなんですか，モンゴル・ヒツジと比べると？

B：モンゴル・ヒツジとは比べものにならないよ。子ヒツジはとても弱いんだよ。

D：牧地の家畜ではない？

B：飼料の家畜。

D：それであなたはここで働いていて，それで定年になったんですか？

B：そうだよ。この工場ですっと働いて，そして定年になった。

D：遊牧民たちはネゲデルで働いていた家畜を個人資産としてもらったんですか？

B：個人資産としてもらったんだ。

D：国营農場で働いていた人たちは？

B：国营農場で働いていた者たちももらったよ，でも，後になって例の会社になって，その会社で働いていて，そして家畜ももらったんだ，ほんの少しのね，それはそんなにたくさんじゃないよ。

D：工場で働いていた人たちは何も残らなかったんですか？

B：何にもくれなかった。工場で働いていた人たち，工場や役所には家畜を与えないということで，くれなかった。工場や役所から家畜をもらおうとすると，工場や役所で働いていた者だといって，国营農場の16頭の家畜をもらう，うちはというと10頭をもらう，そして他は全部取ってしまった。

D：あなたは今，家畜もっていますか？

B：ああ，今，田舎に何頭かいるよ，子どもが飼っているよ。まだ肉のスープはとぎれていないよ。

D：あなたはここで移動せずに住んでいるんですか？

B：そう。定住しているよ。私は田舎にいたんだよ。去年以後，体の具合がよくなってね。そして，子どもたちが田舎にいるよりも暖かい中心地にいなさいというので，ここにやってきたんだよ。夏になると田舎に出るよ。体がよくなればね，でもそれほど調子がよくない。一番下の娘に世話をさせて，その子には学校を休学させて，一緒に暮らしているんだよ。この先娘はどうなるだろうね。1年間休学させてね，世話をさせているんだよ。

D：では私はこれで失礼します。ありがとうございました。

II バダムレグゼンさん

父の名はダシペルジェー。1936年、ウブルハンガイ県ボグド郡生まれ。男性。2009年12月のインタビュー時点で74歳。社会主義時代は国营農場の農業技師で、現在はエルデニ・ゾー寺院の僧侶。インタビューの主な内容は、幼少期の生活ならびに社会主義時代の宗教を含む生活全般。革命青年同盟のリーダーであったが入党は許可されなかったという。13歳のときに元僧侶から、密かにコイン占いを学び、人びとの要請を受けてときおり実践していた。2005年に僧侶となり、詩作や地方誌史を独自に編纂している。チベット語につづいて、モンゴル語で読経し、英語でも読経できるよう準備している。インタビュー時間は約3時間。

B：バダムレグゼン

D：ルハグワテムチグ

1 出自

D：あなたのお名前は何とおっしゃいますか？

B：私はバダムレグゼンという者だよ。ウブルハンガイ県のズーンボグド郡、今ではウブルハンガイ県のボグド郡といわれている、その土地に生まれた者だ。本来の出自、ずっと昔をたどるとラミン・ゲゲーン聖僧の出自の者だ。さあ、なぜラミン・ゲゲーン聖僧の出自の者といったのかというと、バヤンホンゴルのパローンボグド、ウブルハンガイ県のズーンボグドというと、ラミン・ゲゲーン聖僧の治めるホショー（旗）の地だった。イヒボグド、バガボグドという2つの聖なる山をもつ。そのバガボグドというのはウブルハンガイのズーンボグド山、アルツボグドだといわれているんだよ。そのアルツボグドの出身なんだよ、私は。だからその出自や出身、血統をたどってみると、父方かというと、その当時ボグドハーン8世のシャビ（弟子）の旗と呼ばれているところがあった。サイン・ノヨン・ハンのアイマダの旗には入らず、直接ボグドハーン8世の管轄、シャビの旗とされていた。そのシャビの旗というのは、現代の管轄単位で見るとウブルハンガイのボグド郡、つまり私の生まれた土地になるんだ。昔はホブドと呼ばれていた。ホブドは合併されてボグドになった、後になって1つになったんだ。ゴチン・オス郡、トゥグルグ、パローンバヤン・オラーン、ハイルハンドラーンなどの郡、ナリーンテールまでも含まれていたんだよ。

シャビの旗は、ドンドボグドのシャビの旗と呼ばれていて、その中にアルツボグドの聖僧と歴史書などには記されているよ。そのボグドハーン8世の聖僧たちについて、仏教研究者の僧侶であるブレバトが書いている本があるだろう、そこに書かれているよ。アルツボグドの聖僧、ラミン・ゲゲーン聖僧の聖僧という2人の聖僧がいた。

そのアルツボグドの聖僧というのが私の父方の血筋にあたる者たちなんだよ。そう、そして私はダシベルジェーギーン・バダムレグゼンという。私の父ダシベルジェーという人はというとツェムベリーン・ダシベルジェーという名前だった。その父ツェムベルという人は、その時代ソイヴォンと呼ばれていた、高貴な僧侶の召使いで、そういう人びとのことをソイヴォンと呼んでいたんだ。つまり私たちのその聖僧、後になってウルシュー・バクシ（慈悲の師）と呼ばれる、私たちゴビ地域の者たちの敬うバヤディーン・ソノムツェレンという人の、召使いだっただよ、従者だったんだ。さあ、そして、そのウルシュー・バクシは1937年7月に捕えられ、処刑された、そういう人なんだ。ゴビのたった1人の有名なホトクト（仏教における僧侶階級の最高の称号、化身ラマ、一般に活仏と訳される）が私たちの故郷の人だったんだよ。今、ナサントクトフ、ダムディンシャラブという国家功労者となっている人たちというのは、父親はというとチミドドルジという人だった、いや、ちがうチミドバザル。彼らはチミドバザリーン・ナサントクトフ、ダムディンシャラブというんだよ。そして、そのチミドバザルの祖父の兄にあたる人というのが、そのウルシュー・バクシ、ボグドのソノムツェレンという人だったんだ。そして、その人のソイヴォンで、ツェムベルという人の孫が今のこの私なんだよ。

私はというと今74歳、1936年子年に生まれたんだ、そのボグド郡の地にね。ウルシュー・バクシの寺院の近く、そのダワーという山の近くだ。その後、私は70歳になって、このエルデネゾー寺院で僧となって、仏教の道に入ったんだ。それより前、社会主義時代には、専門は農業技師で、専門として農業に従事し、37年、私は農業を行ってきた。そして、今こうやって僧になっても、私はこの生産の仕事を手を捨ててはいないよ。今もこのあたりの南側の丘、その水路から1km離れたところに私の畑がある。そして2ヘクタールの土地を妻と2人、土地私有法によって土地を所有することになって、その1ヘクタールの畑に毎年いろいろな種類の野菜を栽培しているんだ。この仕事をやめてはいないんだよ。先頃、アタル3（第3次開墾運動）、開墾運動50周年で記念の集まりがあって、それが終わって2、3日になろうとしているんだ。

さあ、そして先ほどの続きだがね、社会主義時代の国民、その時代の産物ともいえる私は、人民革命党に2、3度、入党しようとしたんだが、私を党員にしなかったんだ。それはなぜなんだろうと、今振り返ると、仏典を読む道に入って、こうやって仏典を読んでわかってきたことは、私たちが言うところの運命として、党に入ってはならない者だったんだろうよ。こうやって向こう側で運命が私を入らせないように、このように引っ張っていたんだと、私は今、仏教の道に入って、悟りが近づいた今になって、こうやって振り返って理解している、このように思っているんだよ。そういうことだったんだろうとね。ああ、そうとはいえ、そのときというのは、民主主義者というのか、思想、特にこの仏教、智慧をもつ人びとというのは、その時代、集会など

でまったく正直に話すことはできず、目の敵にされ、迫害される、そんなふうだったんだよ。その時代というのは、私の故郷でも仏教をひどく迫害する、一般にいろんな経典を読むことはなく、占いや精霊を呼び出すなど、さまざまなことをおこなってはならない、仏教を信仰する家があってはならない、こういう時代だったんだ。特に1970年ごろというのはね、私は人民革命党の補助員であり、モンゴル革命青年同盟のソムの委員長、ネグデルの農業技師だった。私はというと、その時代、1964から1969年までそういう長として働いたり、兵役についたりしていたんだ。そうして2、3度入党しようとしたんだが、まったく私を党員として入党させない。私はだいたい鋭く、荒々しい性格の者だよ、生まれつきね。正直でないものを見過ごすことができない、物事を正しく、正当な道でおこなおうとする、経典を読むとしても、依頼したその人の徳になるようにと思って読むんだ。もしも何か違ったように読んだとしても、向こう側にある私の心は、この経典がこの人にとって正しく反映されるようにという思いで、念じながらそれを読んでいるんだよ。こういう私の思想というのが、その時代の偉い人たちの気に入らなかつたんだろう、だから党に入らせなかつたんだろうよ。

さあ、こうして私は人生で2度、人民革命党から、ウブルハンガイ県の党委員会から、被害にあつたんだ。1969年、私は農牧上級学校（現在の農牧大学）に専門を向上させるために入学した、それ以前は農業技術士の専門だった。そのとき、62年にドルノドの農業専門学校を卒業して、農業技術士の専門でドルノド県のマタド郡で働いていた。そして、その秋にウブルハンガイ県に戻ってきて、ウブルハンガイ県の土地でアルヴェイの平原を最初に開墾して、農業をおこなった、こういう最初の農業者なんだよ。こうして69年に私は上級学校に行った。そして、1969年に農牧上級学校に行つて勉強しようとしたところ、10月にウブルハンガイ県の党委員会の第一書記長、ラムフーという人だったよ、その当時。ラムフーのサインのある電報が農牧上級学校の校長ジャミヤンジャヴ先生だった、そのジャミヤンジャヴ校長の秘書のところに電報がきた。法的機関が取り調べているので、その学生をこちらに戻すように、と書いてある。「さあ、君、行きたまえ、14日以内にこれを解決してくるように」という。さあ、こうして14日以内に解決しようと、大学生になるといって、たくさんスーツや洋服を買っていたのを売り払って、帰るための資金にして戻ってきたんだよ。その時代というのは60トゥグルグ以上だったんだよ、ウブルハンガイとウランバートルのあいだ〔の交通費〕というのは。こうして戻ってきて、アイマグの党委員会の支局の会議にかけられ、学校をやめさせられたんだよ。そうして、私をウブルハンガイ県の灌漑へ、当時というのは、ゴビといえば井戸の掘削、水のある地点の電気による探査などがおこなわれていた。そして私は作られた井戸の管理を一緒にまかされた。その仕事だけをおこない、それに熟練したんだ。ロシア人とも親しくなつた、その時代というのはゴビにロシア語を話す人間はいなかつたんだよ。とにかく彼が簡単な言葉を話すと、ま

あそれを少しは理解していたんだろう。こうして私をその灌漑施設に力づくで配属した、その当時このようにされていたんだよ、命令を出して、入らせたんだよ。こうして69年に農牧上級学校からこうやって、上級専門クラスをこうやってぶち壊されてしまったんだよ。1つ目はこのような大きな被害を受けた。

さあ、こうして私は県の党委員会によって農牧上級学校から退学させられ、その灌漑施設で働いていて、その次の春から人びとと一緒に働くようになった。そして70年の春に戻ってきた。ここに功労農業技師アヨールという、私の昔の知り合いの人がいたんだ。このアヨールに頼んで、今でいう裏口のようなものだよ、こうやって私は、第2部局というのがあって、その部局で保存庫の主任として働くことになり、そうしていると、75年の春「ホジルト温泉療養所が専門家を探している」という。国営農場の党委員長レンツェンという人がいた、日和見のレンツェンという人がいた、もう亡くなったよ。彼が県の党委員会の第2書記長だったとき、ローホーズの問題に連座して、机から手紙が出てきたとしてね、かわいそうに、そうしてハラホリン国営農場長としてここに赴任させられてきたんだよ。そのレンツェン農場長が私を呼んで、「君はホジルトに行きなさい。専門の人を見つけてくれというんだ、君は適任だ」という。こうして私はホジルト温泉療養所に75年に行って、78年までホジルト温泉療養所で、65度の熱湯で5メートルの噴水を接続して、ガラスの温室を作って、そこでトマト、キュウリを栽培していたんだ、白衣を着てね。党中央委員会委員長ドゥゲルスレン氏、県の党中央委員会委員長グンチンという人がいた。ああ、そしてウランバートル市の党委員会の第1書記長アルタンゲレルなど、こういう大臣や長たちがホジルトに療養にきていたんだ。そのとき私は医者のような白衣を着て、そして真っ赤なトマトやキュウリを持って、こうしてホテルに届ける、そういう仕事をしていた。こうしていると農牧省大臣、その当時誰だったか、副大臣がやってきて療養するのに出会った。それらの野菜を持って入っていくと、その人が私を捕まえて、私のことを、こんな優れた人がこんなところで仕事をしているなんてどういうことなのか、というんだ。当時、中央委員会第4回総会がおこなわれて、食料プログラムというのが向上させられたんだよ。家畜の育成、肉を少なくして野菜などをたくさん栽培する。こうして国の分野保護者だといって、私を、ウブルハンガイ県トゥグルグ郡、トクトーン長という県の農牧業長がいた、今は亡くなってしまったよ。そのトクトーン長たちが私を連れて行って、引っ張ってくれて、ウブルハンガイ県トゥグルグ郡、今のマザル組合といわれている。最近マザルの2つの組合ができたんだよ、それで最近それらの人びとがここにやってきたよ、この前の50周年でね。わがウブルハンガイ県の開墾運動50周年を記念したんだよ、この前、県中心地でね。それから2、3日がたつ。彼らがやってきたんだよ、そのために。

こうして、私はマザルに赴任して、栽培の仕事をした、78年に行ったんだよ。そう

して78年からそこで85年まで働いていて、85年に食料の目標プログラムというそういうものを作り上げた。いろいろな公的機関が野菜などさまざまなものを栽培しているとき、私は1200人服役していた刑務所、ハラホリン刑務所に、私は85年9月に刑務所の農業士として赴任した。こうしてたった1個のジャガイモを植えて食べることすら知らない1200人の服役者のいるハラホリン刑務所にやってきたんだ。今でもそこはあるよ、でも私が定年になったあと、私のやっていたものは壊され、捨てられてしまったんだよ、だが、その痕跡はある。ガラスの温室を作って刑務所に野菜を供給するようになって、田舎に小麦も植えたし、野菜も植えた。こうして働いていて、93年に定年になった。定年後は個人的に野菜を栽培して、こうしているんだ。そして70歳になってから、この寺院で学び、それ以後は僧として生きている。さあ、おおまかな私の経歴はこんなふうなものだよ。今、仏教の道に入って4年、経典を読んでいる。そして、今は占いもする。そういう人がいるだろう、ダシツェレンなどをリーダーにする、あの年いろいろやっていただろう。彼らと一緒に何かをしたいと思っているんだ。でも、そういうチャンスがないからね、こうして過ぎていっているよ。ああ、人びとは私にいろいろ占わせるけど、とにかく嘘は言っていないようだよ。さあ、1つ目にはこういうことをしている。2つ目はというと、私はどんな本でも手に取ってすぐに読むことができる。経典はそのままだね〔チベット語で〕。それで翻訳などもやってみようとしているが、60、70歳を過ぎてくると人は力が落ちてくるものだよ。そのせいで経典のいい翻訳はできないんだ。だが、まあ先生方が翻訳して出ているいい本が世の中には多くなった。それらを見て覚えて、私は今ではツァガン・ダリ・エヘ（幸運長寿、無病息災、世界の8つの危険を防ぐために読む経典）、ノゴーン・ダリ・エヘ（病気や災難、貧困などが解消され、よい行為がより広がるように読む経典）、ヒーモリーン・サン（運気の向上、大願成就のために読む経典）、アヤン・ザミン・ユール（旅の無事を祈る祝詞）などの重要な儀式の経典は、直接モンゴル語で読んで、そのあとすぐにチベット語で読んであげるようになっているよ。

D：へえ、そうですか。

B：これをあなたはこうしなさいとね。私はこのことについてソニンバヤル師のところに行っただ、ソニンバヤル師に行って説明した。そして「私はこのように僧になろうとしていて、こうやっています、先生、私はどうしたらいいですか、こうするのが正しいのでしょうか、間違っていますか」と言ったところ、「おお、それは正しいことだよ、最も正しい、ただ怠けてはいけないよ、疲れたと思ってはいけないよ。最初にモンゴル語で読んだならば、そのあとで必ずチベット語で読んであげるようにしなさい」とこのように私におっしゃったんだよ。そうして私はこうやって最初にモンゴル語、そのあとチベット語で経典を読むようになったんだ。この法要でも私はそうしているよ。

D：へえそうですか。

B：今あなたたちがこうやって入ってきて、アヤン・ザミン・ユールを読んでもらおうというのならばそうするよ。それだけではなく、私は英語でヒーモリーン・サンを読むことができるんだからね。

D：へえ。

B：そうだよ、人に翻訳させて、こうやってヒーモリーン・サンを英語に訳して、そして興味のある人や、読ませたいという人が来たならば、私は英語で読んであげるんだ。それを英語を話す人のところで読んでみて、間違っていないか、発音はどうか、どの字をどう発音するかなどを教えてください、そうしてこうやって人びとに読んであげているんだ。だが、このところ英語で読ませるといふ人がやってこないから、英語の経典を忘れかけているんだよ。そんなこんなだね。このように仏教の道を追求しているんだよ。さあ、何か尋ねたい、話したいことはあるかね。それを話さない。私は自分について、今、簡単だけれど話したからね。

2 幼少期の生活

D：あなたは幼少期をどこで過ごされましたか？

B：私の幼少時代。私は、1945年にね、ウブルハンガイ県のボグド郡に最初の小学校が設立された。私はボグド郡の最初の小学校の生徒になった者だよ。そして、私と一緒に、今は母子のための研究所の研究者、8カ国語を話す、42冊の医学の本を書いたジャンチヴィーン・ラドナーバザルという私の同級生がいるよ、今も元気だ。保健に関して国際的な仕事をしている。そして、その他に、ツェデンバル書記長やバトムンフ書記長の主治医をしていた、第2病院を指導する医師だったグンテヴィーン・ガイタヴというのもいた、今も元気だ。ああ、その上にモンゴル農牧省の最初の森林エンジニアを務めていた、サンチロヴという人も今も元気である。昨日も電話してきたよ。パローンバヤン・オラーンに行ってきた、県都にいるとね。この前ウランバートルで会ったよ。あそこ、ドラゴン（長距離バスの駅）でウブルハンガイに行こうとしていた。すると私がそこにいるのがどうやってわかったのか、電話してきて、それでそこで会ったんだ。長年会っていなかったんだ、そういうサンチロヴのように同級生たちは今も元気で暮らしている、そういう友人たちがいるよ。

そうして1945年から1949年まで、ボグド郡の小学校で学び、卒業した。そして49年から田舎に出てね、その時代というのは、ウブルハンガイというのは、郵便の車が49年からやってくるようになったんだよ。その時は郵便の車はなく、ウルトゥ（ウマの乗り継ぎ駅）というのがあったといわれていた時代だ。そしてその時代、うちのボグド郡というのはウブルハンガイ県の県都から210kmの距離、そして210kmというと30kmに1つのウルトゥがあった。7つのウルトゥをウマを乗り継いで子どもたちは

学校に行くものだった。

私はそのころ小さな子どもだった、そもウマで駆け回っていた。そしてちょうど学校に入るとき、そういう運命だったのだろうか。人の家で働いてね、いくらのお金を得ようと、その時代というのは、お金というのは希少なものだった。人の家で1週間働いてヒツジを放牧して1日に1トゥグルグを賃金としてくれたんだ。そして7日、14日働いて、10何トゥグルグになったら、ウブルハンガイへのそのウルトウの費用や、学校での本や学用品にしようと思って働いていたとき、ウマに引きずられて、はいていた靴が鐘にひっかかって足に傷を負い、膿んでしまったんだ。こうして怪我をしてしまって、学校に行くことができなかった、こうしてウブルハンガイの10年制学校に行くことができず、取り残されてしまったんだよ。ああ、このガイタヴやサンチロヴたちはみんな行ってしまった。それで私は草原に出たんだよ。そして49から51年までの3年間、私は草原の民だったんだ。うちの家は貧しかった、その時代というのはネグデルというのもまだできていなかった。だから私は裕福な家のヤクやウシを放牧して、ボグド山の尾根で3年間、人のウシを放牧して冬を過ごしたんだ、その時代というのは生活において人に使われるという、人の家の飯を食うという、そういうものが存在していたんだよ。そして、私は700頭のヤクとウシを放牧した、母と一緒にね。ボグド山の尾根というところも丸くなっている〔家畜が落ちるかもしれないので危険である〕んだよ、どれほど大変だったか。私には本当に映画の写真のような写真がみんなあるよ。それで今年になって、故郷へ行ってみよう、死ぬ前に行こうと思って行ったんだ、遠く家があった場所にね。そして本堂のところから貴重な物を持ってきたんだ。その仏の写真がある、それを県の博物館に持って行った。昔はそんなものを気にもかけず、知らなかった人たちが今は手のひらを返したように「へえ、本当だ、本当に貴重なものだ、それをそこに行って見てみたい、今もあるかどうか」と興味を示してね、県の博物館の貴重資料になっているんだよ。そういう写真を撮ったんだよ、私はね。

今、私はというと詩を、生涯で4、5冊の本を書いた者だよ。最初の本は1997年だったか、ツェグメディーン・ガイタヴという政府から表彰されている詩人、ツェグメディーン・ガイタヴと私というのは同郷で、同じクラスだった、そして、ガイタヴの70歳の記念というのを10年前にやったんだよ。今年は80歳のお祝いをしたよ、それで私は70歳のときに招待されて行ったんだ。そのときに1冊の小さな詩集、最初の本を書いて行った、『草原で一晩過ごした月のように』という題名のね。今年80歳のときもまた招待されて最近行ってきたよ、9月19日に招待されて故郷に行って、その家のあったところに像などが建てられていた。モンゴルの作家たちが県の作家たちと共同してこうやって最近80歳記念を祝って、映画を作ってね、ドキュメンタリーを作ったんだ。さあ、そのために、また1冊の小さな本を書いたんだよ、それも主にはガイ

タヴの書いたもので、中に少しだけ自分の書いたものがある。

さあ、次の本はというと1990、違う2000何年だったのだろうか、ハラホリンの50周年になったんだよ。その50周年に『満月』という名前の本を書いた。『満月』。ここには「オマイン・アムの伝説」が入っている。そして、このオルホン川の広い谷、ここにある国营農場。なぜこのオルホン川の谷に国营農場が建設されるようになったのかという理由を14世紀の歴史から導き出した簡単な歴史を述べた。そしてハラホリンの国营農場が50年でどのように発展したのかという歴史を述べ、その上に3章の文章がある。最初の章は私の詩、そして次にはハラホリンの歴史、このオルホン川の略史。そして3番目はというと「ウブルハンガイの農業の歴史についての論文」というテーマで3章に分かれている、こういう小さな『満月』という本、とてもかわいらしい本になったよ。

そして、次の本はというと、一昨年だった。『歴史的遺跡のあるオルホン川の谷』という本を書いた。『歴史的遺跡のあるオルホン川の谷』だよ。ああ、それをモンゴル人民革命党の本部で印刷させて、1,000部印刷させるために渡したんだ。すると、132万トゥグルグを持ってきて、本を受け取りなさいと、こういうんだ。1,320,000トゥグルグなんて、年金の84,000トゥグルグをもらっている年寄りが、どうやって1,320,000トゥグルグを支払えるというんだ。そこでいろんな人たちに頼み込んだ、特に国会議員の8人には寄付を頼んだんだ。ルンデージャンツァンのところには行かなかった、それは間違いだったよ、間違いだった。最も重要な、会って頼むべき人に会わなかったんだよ、今振り返って考えてみて、とても後悔している。その他の民主党系の議員たち、私は民主党を支持している者だから、彼ら4人に頼んだんだ、彼らは誰もだめだとはいわなかったよ。その次にモンゴル人民革命党から選出されたチンゾリクや誰や3人とは会ったよ、寄付をあげるといっていた。選挙の後に、選挙の後に、と。そして選挙の後になって、私は彼らにその寄付をもらおうとしていて、できないでいるうちに、7月の騒動、7月の騒動ですべてなくなってしまった、モンゴル人民革命党の建物は焼けてしまった。3冊だけ、頼み込んでもらっていたんだよ、「3冊もらいたい」といってね。その1冊を私は作家連盟に見せた、作家連盟で印刷する場合、支援は5,000、10,000トゥグルグあるかどうか。1冊は、私は故郷へ持って行った、ナイガル〔知人の名前〕にまで見せて頼み込んで、国会議員に見せるといってまた1冊、2冊目を持って行った。最後の3冊目はこの中でいろいろの人に渡っていた。先生が持って行ったんだ、後になって編集するためにね。ナイガルも見せていたよ。

こうして残りは見つからなくなってしまった、なくなってしまったんだよ。ああ、1冊は手元にあるよ。モンゴル作家連盟にも渡したんだよ。モンゴル作家連盟は去年の冬、80周年を記念したんだよ。そして、80周年に私は招待されてモンゴル作家連盟のメンバーになって、私に「天の血筋」というそういう勲章をくれたんだ。さあそれ

で、この本はというと『オルホンの歴史的遺跡のある谷』というもので、ハル・バルガス、フシュー・ツァイダム、北に行つてアルハンガイのホトントのほうにあるドイティーン・トルゴイ。このオルホン川の谷にある。オラーン・ハドニー・アゴイといつて、そのドイティーン・トルゴイ、オラーン・ハドニー・アゴイといつてまったく研究されていない場所、そこに行つて写真を撮り、自ら歴史を研究してみた。そして、このオルホン川の谷というところにはどんな歴史文化があるのか、すべてを著述しようとして努力したんだよ。とてもよくできた本にしあげたんだよ。こうして私には1冊だけ残っている。『満月』という1冊の本になったんだ。ああ、そうしてこの前、私は開墾運動の50周年にあつて、4冊目の本を、ガイタヴの80歳記念と関連させて、『アルツボグドの息子、アルヴァイ平原の農業技師』という、自らを賞する本を書いた。この前の月曜日、印刷が仕上がったんだ。「娘さんたちに見本を1冊渡しました。あなたはそれを見て校正をするならして、また持ってきてください。そして私たちは何冊印刷するのか、どのくらいの額になるのかをお知らせします」ということなんだよ。昨日娘が来るはずだったんだよ、ウランバートルから、でも来なかった、今日やってくるだろうよ。さあ、このようなことなんだよ。

こうして、私はこのエルデネゾー寺院のことも書き入れた。本堂のことも書き入れた。オルホンの谷の本にね。そして、このエルデネゾーにはこういうことがあったんだと突き止めたんだ。このエルデネゾーには、またこのオルホンの谷には転生者がいたんだよ。さあ、その転生者とはというと、最初、アルハンガイ県のルン郡と、その当時呼ばれていたんだよ、地方の行政単位としては。アルハンガイ県ルン郡。このルン郡の土地にエルデネ・オールという山、この北側では窪地といわれている。そのこちら側にエルデネ・オールというところがある、もとはルン・トルゴイと呼ばれていた。トルゴイ（丘）がオール（山）になり、オール（山）がトルゴイ（丘）になり、最近地方ではこうやって呼び名が変わっているようだね。最近、この春、このルン・トルゴイ、今ではルン・ハイルハン（山への尊称）に仏塔が建設された、地元の人びとがすばらしい仏塔を作った、今年これをまつたんだ。さあ、なぜ私がエルデネ・オールと強調して話しているのかというと、エルデネ・オールに第7世ツォルジトン（座主）ダグヴァダルジャーという転生者のホトクトが生まれたんだ、このエルデネ・オールにね。ここに第7世ツォルジトンが生まれたんだ、いいかね。さあ、この歴史を見てみると、1700、1500年の時代から始まるんだよ、1500年から1700年の時代のことになる。この時代1770年、私の研究によると、ここにハダクで囲んだ場所があるだろう、ここがツォクチン・ホルル〔法要を行う本堂〕、エルデネゾー寺院の主なる信仰、現代的にいうならば議会の建物ということだよ。ツォクチン・ホルルというのは1770年に、この第7世ツォルジトン、ダグヴァダルジャーの時代に建設されたんだよ、作られたんだ、5年の歳月をかけて。70から75年にかけて建てられ、75年から儀式がお

こなわれるようになった。そしてこのツォクチン・ホルルでは108人のツァム（儀礼的舞踊）、モンゴルの他にはない大規模なツァムをおこなっていたんだ。そのツァムというのはアブタイ・サイン・ハンのゲルのあった跡の上でおこなわれ、踊るんだ。1937年に最後のツァムがおこなわれた。今、あそこにあるだろうよ、その記録がある、映画をロシア人が撮っていたそうだ。さあ、ツォクチン・ホルルはこういう起源を持つ、こういう歴史がある。

こうして、この第7世ツォルジトン、ダグヴァダルジャーが亡くなって、次に誰に転生したのかというと、アルハンガイ県のホトント郡の地にフクシン・ゴル（年老いた川）と呼ばれている場所、そこに生まれたんだという。そのゴンチクジャルツァンの経歴や血筋などを、すべて研究して、ラマ・オポーという表題で、この『オルホン川の谷』（『オルホンの歴史的遺跡のある谷』）という本の中に書いたんだ。ああ、そしてわが国の芸術の偉大な創造者、ルンの者だよ、誰かというとチョヴァーミドさん、彼はラマの山、バヤンゴル山にいる。さあ、そしてその最後の転生者ゴンチクジャルツァン様はというと、1937年に連れていかれ、12月3日に銃殺されたんだよ、70何歳のときに。ゴンチクジャルツァン様はここに生まれた方だよ。そして後になってバヤンゴルの、そこはラマ・オポーといってオポーをまつり、信仰してきた場所だ。今、その少しこちら側に小さな仏塔がある。そこには洞窟などゴンチクジャルツァンにゆかりのさまざまな場所がある、ここにはダライ・ラマの絵画もあるんだよ。そこはそう、何を作ろうとしていたんだよ、マンバダツァン（医療を行う寺院）、薬のマンバダツァン、今ウランバートルでナツァクドルジ氏が指導してやっているようなマンバダツァンをここに開いていたんだ。そしてこの中には、今では湖がある。アブタイ・ハンの湖といって。そしてこの北東側の端っこにゼールゲン *zeergene*（マオウの仲間、学名は *Ephedra*）が生えている。この4つの堂塔の平らな所にいろいろな種類の葉に入れる植物などを持ってきて、幼木を植えていたんだよ。だが、この中には、最近の自然環境の変化によって生えなくなってしまっている、私がここに入ってきたときには、赤い野菜・白いジャガイモがあるだろう、赤い花の咲くジャガイモまでがここに生えてきていたんだ。そう、この柵の中にね。その花は悪いものを防いでくれるんだよ。その北東側の角にホニン・ゼールゲン *konin zeergene*（マオウの仲間、学名は *Ephedra Przewalskii*）がある、ゴビに生えるホニン・ゼールゲンは麻薬の中に混ぜる植物だというよ。ゴビに生えるヤマーン・ゼールゲン *yamaan zeergene*（マオウの仲間、学名は *Ephedra monospermaria*）、ホニン・ゼールゲンという草がある。そのホニン・ゼールゲンまでも持ってきて植えていたんだ。とてもおいしい赤いイモ（地下茎）がなるんだよ。この隅にある、そっちの北側の角にね。こういうすばらしい歴史がわがこの辺りにはあるんだよ。これらを研究してこうやって世の中に出す、これらを引き出す、そういう人はいなくなってしまったんだよ。そういうものにいろいろな人たちがお金

を捨てているよ、プロジェクトだ、何だ、と関係した人たちはね。だが本当に心から何かをしようとする人間は少なくなってしまったんだよ。私は、まあね、考え方が違う人間だからね。今でも自分だけで思っているだけじゃなく、批判する。もしかすると排除されてしまうかもしれない時代になっているよ。だが、とにかくできることならばこの堂塔を再建できるならば、とね。歴史の上に何か形を残して死にたいものだと思っているよ。ああ、そういう感じだね。

D：小学校では寮に暮らしていましたか？

B：ああ、寮にいたよ。そして1945年というところ、5つの壁のあるゲルというのはなかったんだよ。4つの壁のあるゲルだったよ。2つのゲルを建てていた。1つのゲルは台所といって食事を作る。1つのゲルには子どもたちが暮らしている。そして厚手の敷物を敷いて、その上に1枚の敷き布団。その時代というのは布団などはなかったんだよ。羊毛を内側に張ったデールをかぶって寝るんだ。そして内側に羊毛のついたズボンをはいていた。そのズボンというのにはノミがつくんだ。デールにもノミがつく。そこでその毛の張られたズボンを外で凍らせて干しておいて、デールだけをかぶって1枚の大きな敷き布団の上にみんな寝転がって眠るんだ。日中になると敷き布団をたたんで、そして南側に置いてね。半分のノートをくれるんだ、その当時は、49年というところノートは手に入らなかった、鉛筆やペンはなかった。そしてボグド山の尾根に生えているタヴィラン（タビルガナ *tavilgana*、シモツゲの仲間、学名は *Spiraea*）という、こういう真ん中に穴のあいているこういう長い植物があるんだ、今もこのボグドの向こう側に生えている、タヴィランと呼ばれている。そのタヴィランを拾い集めて、そしてそれで鉛、うちのこのあたりというのは石がたくさんあるんだよ。その石炭が地下にある場所に、その石墨は当然あるんだ。その石墨を取ってきて、一部を溶かしていたんだ。溶かした所にそのタヴィランの木の真ん中の穴部分に流しこむんだ。そして、それを削って、こうやって鉛筆を作ってしまう。それ以外にも…、うちのソムでは地震がおきて、57年に地震がおきてなくなってしまったんだ。今ではソム・センターは廃墟になってしまっているよ。その当時というのは泥や土で作った建物だったんだからね。そして、その山の水が洪水となって流れるそのオラーン・エレク（赤い崖という意味の地名）のあたりというのは、鉄丹の土というものがあってね、その赤い鉄丹を溶かして使うんだ、例の昔でいう小さな仏具の器だろうか、今この仏具でロウソクを灯す、芯の穴のない器、このくらいの大きさの器だよ、その廃墟というのは近いよ、30km、その山の南側斜面にあるんだよ。そしてその廃墟からそれらを見つけたんだよ。とてもたくさん、そういう茶器、その底を取ってこうやってブリキでこうやって脚を取り付けてね、ラツ（封蠟）のようなものがあると、そのラツを溶かして、それでくっつけたんだ。そうして、赤い鉄丹から作ったインクを入れるインク入れにした。そしてタヴィランの枝にペン先を糸でくくる。糸でこうやってくりつけ

るんだ、鉄のペンを。先がすぼまった胴体がふくらんだ形で星の模様のついたペンという、昔、そういう鉄のペンがあったんだよ。そういうペンを持ってきて、こうやって糸でくくりつける、そして例の鉄丹に浸して書くんた。そうやって書いていたんだ。ラドナーバザル、ガイタヴたちは今ウランバートルにいるが、彼らの所に行ってこうやって聞いてみたら、まさに同じことを話すだろうよ。

あばたのパボーという私たちの先生がいたんだよ、僧だった人だというよ。そして、私の名前はラマの戒律、毎日読む、ラマの戒律の中に、バドマーレグゼンと呼ばれているものがある。訳すと花の根源ということで、蓮華の花という意味だよ。そのアルツ山脈というのは180kmの長い山脈なんだよ、バガボグドの南側にこうやって、ゴビ・アルタイの間へこうやってアルツ山脈とって、アルツボグドの南側の狭間ではとって天気予報でも使われているだろう。そのアルツ山脈というのは南側に、そのシャル・ホルス（黄色い竹）というウルシュー・バクシが作られた寺院があるんだよ。この寺の僧たちを捕まえて行ったが、逃げてそこに隠れていたんだというよ。こうして祝福を与えて、最後に祝福を与えて名前をつけた子どもが私なんだというよ。そうやって私にバドマーレグゼンという名前をくれたんだ。そうして私は49年にね、うちの人たちはみんなレグゼンとは呼ばない、言うのがむずかしかったんだろう、みんなバドマーと、両親も兄弟たちも呼んでいたんだ。おい、バドマー、バドマーと、いつもバドマーと言われていた。そして学校に入学したところ、その名前でバドマーレグゼンと書いたんだよ。そうすると、そのあばたのパボーという先生が、彼は僧だった人だ、僧になってモンゴル文字などを学び、後になって学校の先生になった。昔のモンゴル文字を知っているけれど、新しい文字を書く教師になった人だよ。そして、パボー先生が「だめだ、これは僧の戒律の名前だ、これはだめだ」と思ったんだろうか、レグゼンと名前を書いてしまった、こうしてバダムレグゼンになった。バダムレグゼンというのはこのパボー先生がくれた名前だ、このレグゼンのまま生きているよ。それ以後の書類すべて、軍隊の登録などもすべて、卒業証書もみんな、国民パスポートまでもレグゼンで書かれるようになってしまった。もともとはというと、ウルシュー・バクシのくれた名前はバドマーレグゼンという僧の階位の名前をくれたんだ。それをどうやって知ったのかというと、70いくつかになって、こうやって僧になって、僧の戒律を受けただろう。私に僧の戒律をくれた師はというと、今バヤンホンゴルにいるんだ。バヤンホンゴルのエルデネ何とか、その郡中心に行ってしまったんだ、ここにいたんだけれども、行ってしまった、プレヴダワーという高位の僧だよ。ガンダン寺にある仏教大学の教師だった。国立中央図書館で15年、中央委員会の何かで働いていたんだという、プレヴダワーという、今はバヤンホンゴルにいる。そのプレヴダワー先生が私に仏法の戒律を与えてくれた。そのときに「おお、もともとバドマーレグゼンという仏法の戒律名をもった人だね。まあいいよ、1つの戒律をもら

っているけれども、まあ名前をつけるきまりだからね」と。そしてこういう四角に書いたものの上に賽を投げて、どの上に止まるか、それで名付けるものなんだよ。それによってバダムドルジという名前、戒律名をバダムドルジ、こう名付けてもらったんだよ。まあバダムという名前は私にずっとついてくるものだったんだろうね。

D：小学校ではどんな勉強をしましたか？

B：ああ、小学校ではね、その時代というのは、モンゴル語、3年生から始まってモンゴル文字を教えていたよ、ウイグル式モンゴル文字。そして理科。今もこういう授業を教えているだろうよ。歴史を教えていた、匈奴や何かと、そういうものを教えていたよ。そして私たちというのは、3、4年生になるときは何人かの先生が教えるようになっていたよ。アルハンガイ県のサムボーという先生、アルハンガイ県のハイルハン郡の人だった、サムボー先生。ああ、そして後になって、私が4年生を卒業するとき、同郷の人で、テムチギーン・ゴンチクスレンという人が、後になって、軍隊の検察官などになった、人民革命党を捜査すると言っていた、党の検察で働いていたゴンチクスレンというその先生が、49年、私が4年生を卒業するとき、教師として働いていた。今、思い出してみると、私が勉強する趣向というのは、文学、この方面に興味を持つ子どもだった。私はというと、詩などはすぐに暗記してしまう。その子ウマがどうしたとか、すべて、ダシゼヴェグの、センゲーの作品のすべて、今でも私の記憶からなくなることはないんだよ。いつも彼らの詩を読むんだ。いつも子ウマが…などの詩。こうして中学に入ることになると、今度は「セクス・ツァガン・ボグド」、 「朝鮮の運命」などという、とても美しい詩があるだろう。これらの詩を読む、暗唱する。国営農場で農業技師として働いているときまでも、私は芸術を好んだ。国営農場で詩や歌のコンクールをするというと、そこでガルヴァーの作った「スフバートル兄へ」というパルチザンについての美しい詩がある、それを読んで、まるで情景が見えるようだと言われて、表彰されたものだよ。今でもその詩は、人が学んだものというのはいつまでも忘れることはないよ、死ぬまで一緒というように消え去ることはないんだよ、まったくね。記憶が弱くなった、忘れっぽくなったといっても、学んだものというのはいつまでも消え去るということはない。何であってでも脳の中に取りつづけるものなんだよ。そういうことで私は歴史に興味を持つ、文学に非常に興味を持つ。ああ、映画や文学、舞台もみる。そして詩はというとこうやって書くこともする。そして新聞や雑誌、ラジオなどに文章を書いていたよ。最近では批評文などを書こうとしているよ。何かいいことを見つけて書こうとしてもそれが見つからなくなっているんだよ。いつも何かを批判する、間違っていることを見つけ出してそれを世に出したくなっているんだ。今ではそんなふうになってしまっている、それらを書く人と人に嫌がられるだろうよ。

この博物館について、見つけて読んでみなさい、2007年の「ジンダー」紙の第7号

に載っているよ。「エルデネゾー寺院は存在すべきかどうか。エルデネゾー寺院は存在すべきか、あるいは博物館であるべきか」というタイトルだよ。大きな批評文を書いて、そのために裁判や何やということになってね、名誉回復しろとってね。いろんなことをやったんだろうよ、その人はね。今年、3体の金の仏像を盗んで貨車と取り替えて2年6ヶ月刑務所に入ったとか。そういうことらしいがね。

D：あなたの食事などはどんなふうでしたか、小学校にいるとき、何を食べていましたか？

B：ああ、まあね、そのころというのは、子どものための学校の燃料、食事代とって、少し裕福な人びとに割りふっていたんだよ。それで彼らは生徒たちの食事代を持ってくる、食料を持ってくるんだよ、家畜や肉をね。燃料も持ってくる。うちのゴビのあたりというところ、まあザクzag（サクサウルの仲間、学名は *Haloxylon ammodendron*）がたくさん生えているからね。そしてゴビの人たちは抱えられないほどたくさんのザクをもってきて、それを山積みにしてね、この建物くらいの高さにザクを山積みして、置いていたんだよ。

D：食事はどんな食事だったんですか。野菜や乳製品などはありましたか？

B：おお、その時代に野菜なんてあるものかい。野菜というと、その時代知りもしないよ。うちのボグド山の尾根には、食事に入れるいい野菜が生えるんだよ。野生のネギなどがたくさんあるよ。モンゴルでは珍しいビタミンAの含まれた野生のネギがどこにあるかというところ、わがボグドの地にあるんだ。ズーンボグド、バロンボグドに生えるものなんだよ。ほとんどが野生のネギ、人びとはそれを何袋も学校に持ってくるんだよ。野生のネギを使った食事、ポーズや麺の入った汁など、野生のネギを入れるんだ。そしてその時代というのは、ゴビの白いカモシカ、黒い尾のカモシカなどがたくさんいて、禁猟などはなかった。そしてボグド山の尾根というのは野生のヤギや野生ヒツジがいる。その時代、それらの野生ヤギ、ヒツジの猟を行ってその肉を山積みにはしていたよ、頭部は別にしてね、学校に持ってくるんだ、子どもたちの食事用にね。それは、それは、おいしいスープ、忘れられないくらいおいしい食事が出たものだよ、その時代。それらを屠って、ウシを屠って、ヤクを屠って、その時代、食料というのは十分な良い時代だったんだよ、言葉もないくらいだよ。そして他にもアーロールやエーズギー、ツァガン・トス。その時代というのはネグデルなんかはなかった。みんな個人の経営体だったから、自由だったんだよ。

3 僧侶たちの運命

D：その時代、転生者などはいなかったんでしょうね？

B：おお、そういうものは、いてはならないよ。僧たちはみんな罪を負って、10年の刑などを受けて、その後、還俗してしまった、そういう僧たちだよ。だが、一部には取

り残された僧たちもいた。私の故郷にはたくさんいたよ。今、私は、これこれ、こういう僧があそこにいたと、名前をあげることができるよ。その時代に私の知っていたのは、わが一族の1人、父の実兄でセンゲラヴダンという非常に知識のある僧がいた、センゲラヴダンという。ラヴジェンというと、どんな位だったのかわからないが、そういう人がいたんだよ。彼はインドなどにも行っていたんだという、とても博識な人だった。そしてこの老人は隠れ潜んでいて、捕まらずに残されたんだと話していたよ、父がね。時々うちに来るんだ。自分の家はなく、子どももいない、その時代僧たちはそんなふうになっていた。そして兄弟たち、故郷の兄弟たちと暮らして、そうして亡くなっていったんだ。

さあ、その他にバルハーン・ヴァーンチクという老人がいた。さっきのゴンチクスレン先生の兄にあたる人だったよ。テムチギーン・ヴァーンチクという人だった、あだなはというとバルハーンという。テムチギーン・ヴァーンチクというとても優れた老人だったよ、その人は。この老人は今でいう本当の民主主義者だったんだ。そしてその時代という、1951年にモンゴル人民共和国の小国会とって選挙が行われた。それで、うちの10年制の建物を3年6ヶ月で作った突撃建設者ゲスレンギーン・シャルというウブスハンガイ県のゴチン・オス郡出身の人が〔立候補して〕いた。私はというと51年という学校をやめてしまって、田舎で2年暮らしていたときだったよ。その時代、10世帯の宣伝員というのがあった。その選挙でゲスレンギーン・シャルが立候補して、私はその10世帯の宣伝員をして、党の宣伝員をして回っていたんだよ。それでよく知っているんだ。で、そこに行くと、ヴァーンチクさんにはたくさん犬がいて吠えて、それに噛まれそうになってねえ、そして、〔ヴァーンチクさんの家で〕その選挙、憲法の2つをこうやって話したんだよ。すると彼はそれをさげぎってこういうことを言うんだ。人民国会の議員というのは無知だろう、何も知らないだろうとこう言っていたんだ、このヴァーンチクさんは。子どもだと思って私たちを下に見てそう言ったんだらう。その後、その人は言葉が過ぎて、最後には党員たちにまでそういうことを言って、不適切な言動を行ったという罪に問われて10年の判決を受けて、刑務所に入って戻ってきたんだよ、ヴァーンチクさんは。こういう例があった。

たくさん僧がいたよ、わが故郷には。多くの僧侶たちが大きな寺院にいたんだというよ。そしてそれらの多くは無実の罪を着せられて殺されてしまったんだよ。最後にウルシュー・バクシ、さっき話しただろう、こうして連れて行かれ、連れて行かれていなくなってしまったんだよ。こうしてまあ、残った者たちはというと、さあ待てよ、ここの扉の所に座っている、このナツァクドルジはというと、父親はオヤングの寺院にいたというよ。そして私がここに入ったあと、亡くなった。この寺の統括役をしているんだよ、ナツァクドルジという人がいる。そのナツァクドルジの父はバルチン・オンザド（読経を導く役僧）とってオヤングにいた、オンザドをしていた人

だよ。このナツァクトルジの妻の父はわがボグド出身の人だった、僧侶だよ。えらい僧侶だった。ゴンガー・ゲツェル（僧の階位名）といって、ゲツェルという階位を持つ人だった。ゴンガー・ゲツェル。彼らはというと10年の刑を受けた人たちだよ。その兄はロボン（導師）・センゲといって、このハラホリンにずっといて、亡くなったよ。ロボンはわがホトクトの寺院の導師だった。センゲといって、わがボグド郡の最初の郡長だよ、そのセンゲ導師は。彼らはこうやって残されたんだよ。逮捕されずに残されて、顔を変えて、モンゴル人民革命党の忠誠者として、還俗してね。少なくとも郡長まで務めていた。だからなのだろうか、わがホトクトの寺院の経典などは、このナツァクトルジの所にある、17箱の経典がある。それからホトクトの寺院のマンダラを捧げる珊瑚や真珠の鐘なども彼の所にある。そこに大事に保管されている。このロボン・センゲ、ゴンガー・ゲツェルという兄弟の2人はそれらを惜しんで、そのボグドのドラーンハイルハン山という大きな洞窟がある。今年も80周年記念で作家たちを案内してきたところだ。その洞窟に経典などを2つに分けてフェルトにくるんで、ゴンガーが刑務所に行く前に持ってきて隠したんだ。そして牢で8年7ヶ月刑期を過ごして戻ってきて、その後、何年になってか、行って見てみると、外側は蛾か何かにか食べられてしまっていたが、内側は無事で、経典などはそのままの姿だったという。そして後になって、センゲさんがハラホリンにやってきた、ここで小麦工場で働いていた。小麦や飼料を運んでいるとき、ここらではこの34番基地とっていただろう。ここにこうやって人に運ばせて、そして保管していたんだそうだ。この統括役になった理由もまたそういうことに関係するんだらうよ。

この寺院の管長というのは、シャンハのバローン・フレイ寺院の出身の人ではなく、ダワー・ゲレン（修道僧）という人の息子、ヒシクトという人だよ、わがこの本堂の管長は。ダワーギーン・ヒシクトという人、父はダワー・ゲレンという人だった。こうしてこの師はこれ〔古い経典が隠されていること〕を知って、この堂塔を設立するときに、この古い経典、政治、仏教の古い歴史書などが必要だといって、そういう物が無い堂塔を建設してどうするとか、そうだろう？ これら経典はというと、みんな博物館にあって、国家の資料として国の管轄下に入ってしまったんだよ、すべて国の物。1冊の経典もここから持ち出す権利はない、国家財産だったよ、その当時。そこで、このこと〔古い経典が隠されていること〕を知った師がナツァクトルジを連れてきて、統括役に任命したんだよ。私はこれらを、歴史書などを研究する過程で知ったんだ。それだけではない、マンダラを捧げるときの珊瑚や真珠の鐘までもあるし、一部の経典はここにあるようだよ。私などはよくは知らないがね。本物の仏教大学の学生、上級の学生が学ぶチョイルという名の経典などもあると言われているよ。私はその箱を開けてみたわけじゃないけれど、17箱の経典があるんだよ。

D: その時代、無実の罪に問われたことについて、あなたが子どものとき、一般に僧た

ちをああした、こうしたと人びとは話していましたか？

B：ああ、いっぱい話していたよ。小さい頃のことというのは忘れられないものだよ。こうやって、ああやって戻ってきた、こうした、ああした、こうしていたなどと話されていたよ。例えば1つの例をあげるとすると、ウルシュー・バクシを捕まえて連れて行った年、7月に捕まえて連れていたんだというよ。バクシがいた家の、隠れていた家の人というのは辮髪のセンゲドルジという、わがボグドに辮髪のセンゲドルジさんという人がいた、もう亡くなったよ。そのセンゲドルジさんの子どもたち、その親族は今もボグドにいるよ、この前ガイタヴの80歳記念で行ったときも、辮髪のセンゲドルジと話していた。彼らの所に黄色い竹（葦）の指輪があったんだというよ。辮髪のセンゲドルジさんの黄色い竹という指輪が。

それで、7月に、2頭のウマに乗った銃を持つ人たちがやってきて、連行していったんだという。辮髪のセンゲドルジさんの所にいたバクシが捕まったあと、10日くらいがすぎただろうか、その年はとても雨の多い年だったとボグドの人たちは話していた。ずっと雨が続いて、このあたりで洪水がおきて、家も家畜も、木も石もみんな流されて、たくさんの家や家畜が洪水にみまわれた、大雨の年と名付けられたくらいだ。そんなふうだったんだよ。それはなぜなのかというと、ゴビのたった1人のホトクトがこんなふうに乗って無実の罪を着せられたから、その土地の神様、仏様がこういう荒々しい所行をしたんだろう、そう年配の人たちは話していたよ、僧だった人たちだよ。ああ、それは本当だったんだらうと、今、私は理解しているんだ。

その上、こう話されていた。ウルシュー・バクシの前身は、わが故郷に2回生まれた人なんだというよ。前身はというと、今年、私はそこに行って今うちにある写真を撮ってきたんだ。その時代に描いていた作品を調査して、写真を撮ったんだ。そして、その人が信仰していた海拔3000何メートルの頂上に到達して、国旗を立てたんだ、写真を持っているよ、登ってきたんだよ、今年、74歳の人間がボグド山の山頂に登ってきたというのは普通のことではないよ。私はこれを仏の正しい道に入った聖僧、聖僧の威光が私に乗り移った結果だと私はこのように理解しているよ。私の家に行って話すことはたくさんあるよ。すべての写真を撮ってある、そして写真を印刷してある。うちの息子はアリオンボルトとって、TB9でマーケティング部長をしているんだよ。アリオンボルトは2人いるが、B.アリオンボルトというマーケティング部長の方だ。アリオンボルトがそのカメラを持って行ったよ、ディスクにコピーするといってね、もうしただろう。でも私は全部印刷させたんだよ、全部ある。

ところで、その前身はツェレンヴァーンチクという人だったんだという。そのツェレンヴァーンチク様の仏を私は見つけたんだ。そしてツェレンヴァーンチクという人が石で作った、何の石かはわからないが、龍を作って、そのオラードウシの山脈の上に持って行って置かせたんだ、ヤクやウシに積んで運ばせたんだ。そのオラード

ウシ山脈はボグド山の山頂、海拔3796メートル。そこから296メートルこちら側に、この上に寺院を建設したならば、それはすばらしい堂塔、寺院ができるだろう、そういう平地がある。そのオラードウシ山脈の上に持って行って置くようにと、運ばせたんだよ。そのオラードウシ山脈の上にこのツェレンヴァーンチクの、最後のウルシユー・バクシが信仰していたオボーが今もある。

さあ、そして私はそのオラードウシ山脈、そのオボーに行ってまつりの儀式をおこなったんだ。内務省の4人の大佐と一緒に登った。その1人の大佐はというと、バローンバヤン・オランの出身の人だよ。このツェレンヴァーンチクの、先代の土地の人、その血統の人が同行しているんだ。そこの人たちというのはツェレンヴァーンチクを仏さまのようにして、銀の枠組みをもつ小さな首飾り、そういう仏像を作っていて、その大佐の首にもそれがあつたよ。こうしてその龍の石の所に行ったんだよ。その龍はこんなふう大きく作られていて、これを運ぼうとすると、こちら側のプフ山脈という高い山脈がある、そこをヤクカウシが運ぶ以外に方法はない。そのの上からヤクカウシを暴走させて、石を落とすためにね。高い山からこうやって飛び落として、こうやって下の谷に止まったんだろう。その止まった場所はそのままだよ。それはまるで化石のようになった龍、足、前、側面には模様があり、腹部の側面にはうろこというんだらうか、手の側などはそのままの形で残っている。いったいどうやって作って、どうやってそこに置いたのだから、非常に興味深いよ。そしてどんな石で作ったのだから。化石化した龍のようになっているんだよ、一見するとね。だが化石化した龍ではない、作られたことははっきりしている。そしてその龍を運ばせて、そこに飛んで落としたということは真実なんだ。その龍は今もそこにあるよ。ああ、それを修復して、ハタグなどを結び、お金やアーロールなど乳製品を供えてね、この歴史を消し去ってしまうところだったんだからね。全部修復をして、お金を集めて、ガラスケースの中にまつて、横の下側には四角の平らな石を持ってきて、それに五徳のような脚のある平らな机のようなものを作らせて、そこにお供えを置くようにする。こうしてその四方には木を植えて、それにハタグを張り巡らせて囲おう。こんなふうには保護しようとするとき会を結成したんだ。都合のいいことにウブルハンガイ県の自然環境を所管する長はバヤスガランとって、わがボグド出身なんだよ。彼はそう、フレー・ハドの温泉で内務省の人たちと休暇をとみにしてね。ちょうどいい人たちが出会ったものだよ。

それで、その自然環境担当のバヤスガランと内務省の4人の大佐、私たちは全員で、こうやってウマで旅をしたんだ。うちの弟妹たちがその南側の谷に暮らしているから、私はウマの料金等は支払わなかったよ。1頭のウマを借りるのに20,000トゥグルグかかるんだよ。それにタルバガンのポートク（はいだ毛皮の中に焼いた石と肉を詰め、全体を丸焼きにした料理）を作らせると20,000、いや15,000トゥグルグ、作って持つ

てきてくれるんだ。こういうところにもビジネス，市場経済というのは広まっているんだよ。8つのゲルを建てていたよ，そのバロンバヤン・オラーンの人だという。トイヴという名前の人だったよ，その人がなかなか快適な，ツーリストなんかという名前だったかね，宿泊所というようなものになっているんだが，それは正しいことだよ，こうやって人びとに自分の故郷を見せて，こうやっているのはとてもよいことだよ。そうして「今，私たちでこの土地の同好の会を結成しよう，バヤスガラン長，あなたがいるんだから，今すぐここを保護地としてください。」ということになった。後になって，8月ごろに郡の役所で会って，細かい話をしたんだよ。こうして保護地にしたんだよ。ボグドの寺院や本堂までも盗掘者が掘り返しているんだよ。そこからは堂塔のあれが出てきているよ，水道のボイラーがね。ひどくたたき壊してしまっているよ，鐘までもたたき壊されてしまっている。オチル（仏具，金剛杵ヴァジュラ）は今うちの家にある。大きいよ，とても大きくて，そうこれくらいのもんだよ。それから，このくらいの粘土などで作られた，それはとてもすばらしい作りなんだよ，そんな仏像，粘土のね。それら粘土や塗料などはみんなうちの土地から取れるものなんだよ。この堂塔の。1770年に本堂を建設するときはどうやって塗料を作っていたのか，その技術を今，復元することはできないんだ。ただそこにだけある。今国連（ユネスコ）にこの寺院についての報告を出しているんだよ。国連からはすべてを確認したけれども，塗料のことはわからず進んでいないんだよ。どうやって塗料を作ったのか，とてもおもしろいだろう。それは漆だといわれているんだよ。これをどうやって作り出したのか，その時代にどうやって作ったのかということは謎なんだよ。それ以外の塗料や土はこのあたりに全部ある。わが故郷にあるものでその寺はすべて作られていたんだよ。

D：あなたが小さい頃，僧たちをこうやって捕まえた，寺院をこうやって壊した，こんな人がこのようにやってきて壊したという，そういうことが話されていませんか？

ああ，話されていたよ。そうわがホトクトの寺の東側に，アイラグ（馬乳酒の意味）の丘（峠）と言われている所がある，東側だ。そのアイラグの丘の上に大きな，今で言うZIS5（旧ソ連製の大型トラック）のような大きさだったんだろう。そういう木の荷台のある，四角い，上には幌のついている，そういう大きな黒い車がやってきたんだという。そして寺の僧侶たちを，4，5人の銃を持った人たちがやってきて，寺にいた僧侶たちすべてを捕まえて，去って行ったんだというよ。そう語られていた。ああ，そのアイラグの丘の上というのは，こちら側からはモリ・チョロー（ウマ石という意味）と呼ばれている。峠といわれている，アイラグの丘はね。向こう側からはアイラグの丘，こちらからはモリ・チョローの峠といわれているんだ。その峠のちょうど道の横に，このくらいの，この半分くらいの石というのがあるんだよ，そこには大きなウマの足跡，小さな子ウマの足跡の2つがある。この上をこうやって通って，そ

それが今化石のようになって残っているものだよ。猪なんかの足跡もわかるんだよ。そういう2つの足跡がある場所だ。

そこに彼らを、そのあたりに捕まえて連れてきたんだといわれているよ。ひどいことには、高位の僧たちは逃げてしまっていて、小さな男の子たち、中下位の僧たちが「どこに行ったらいいんだろう」ととどまっている間に捕まってしまったといわれているんだ。それは本当にそうだったんだろうよ。そして、そのあたりをどうやって通っていったのかということが、また不思議なことなんだよ。そのアイラグの丘をどうやって超えたのか、信じられないよ、車が越えたとはね。そこは車どころか、ウマで通るのも困難な場所なんだよ、そこを車が通ったんだという。今では馬力のある車やバイクがあらちちらを通って、道をつけてしまったがね。だが、そのあたりは地震で土地が崩れてしまっているというよ、1957年の地震でね。

D：あなたが小さい頃、こうやって捕まったあと、戻ってきた僧たちは普通の人の格好をしていましたか？

B：ああ、普通の姿だったよ。そういう1人の老人がいた、ペルレーグンテヴという。ペルレーグンテヴさんは捕まって、そのあと戻ってきたんだという。10年の刑を受けて、刑期を終えて戻ってきたんだ。この西側に、バローンズーン・ゴヨーという場所があるんだよ。ダラントゥルーニー川の東側だ、ズーンゴヨーという場所もあった、バローンゴヨー、ズーンゴヨー。ズーンゴヨーにそのペルレーグンテヴさんという1頭のラクダをもつ老人がいた、ゴヨー〔ゴビに生える植物〕が生えていた、そういう場所だった。そうして、あとになってね、どうなったのかだれも知らないんだ、そのラクダはメスだったという、人がオールガでつかまえて、連れて行ってしまったと聞いたよ。そうして戻ってこなかったんだろう。ペルレーグンテヴさんはそうしてどこで亡くなったのか、わからない。私はその時代学校に入るといって、故郷から出てしまっていたからね。私は69年に農牧上級学校（大学）に行って、無実の罪を着せられて戻ってきて、そうして県都に行き、そしてハラホリンに、北側に暮らすようになってしまった者だからね、それ以後どこにも行かなかったよ。ただ78年にトゥグルグに、マザル地帯という、その中心に行って、そこで暮らしていて、そのあとこちらのハラホリンに戻ってきたんだ。それ以後、ずっとハラホリンに暮らしている、そういう人間なんだ。

D：その時代、それで普通の僧たちは？

B：年をとった人たちはそうしてどうなったのか、知らないよ、私が小さい頃知っていたことというのはそういうことだった。

D：普通の僧たちは、そして妻子を持つようになったんですか、一部は妻子を持たずにいたんでしょうか、どうだったんですか？

B：おお、私の知っている僧たちは、妻子を持った人はほとんどいなかった、ヴァーン

チクさんにもいなかった。だいたいは弟妹たちと一緒に暮らしていた。そして彼らはみんなヴァーンチクさんの名前を名字にしていた。デムチクという人がいたよ、兄の。デムチキーン・ヴァーンチク、デムチキーン誰々と、たくさんいたよ、あとになってヴァーンチクという名字をみんなが名乗っていたよ。

それからベルレーさんの弟という妻はいなかった、そうだった。それ以外に逮捕された僧たちでは、ああ、バザルーフ先生は妻子を持っていた。ああ、他にも妻子のある人はいたよ。サヤンニャンボーという人、とても高位の僧だったという。それなのに、後になって党の長、ずっと党の長を務めていて、後になってボグドで僧になったんだ、サヤンニャンボーという人だ、今、息子はボグドの僧になっているよ。アマルトクトヒーン・サヤンニャンボーという人がいたよ。ホブド郡から始まって党の長を務めて、サヤンニャンボーさんは何年党の長をしていたんだろう。42年といったかな。最初の党の長をしていたんだよ。そして後になってボグドで僧になって、そうして亡くなった。その後、息子はドゥゲルとって、ボグドで僧をしている、ドゥゲルを見つけるのは簡単だよ、ボグドでただ1人の僧だからね、後になって妻をもった。バボー先生は僧で後になって妻を持ったんだよ、また。さあ、他にうちのあたりでというと、ガルサンダルギアという僧だった老人がいたね。偉い僧、ホトクトの寺にいたというよ。このガルサンダルギアという人は私の妻の兄にあたる人だよ。この人はあの人たちの兄にあたる人だよ、私の話しているラドナーバザルのね。ラドナーバザルの兄だ。センゲトゥヴという国家計画委員長だった、ラクチャー長の次席をしていた、今も元気だよ94歳になっているだろうか、今はバヤンホシヨーに住んでいるよ。ハニン・マテリアルの辺りのアパートに住んでいる。禿げのセンゲトゥヴさん、実の兄はという禿げのセンゲトゥヴさんという人がいた、ラドナーバザルの兄ガルサンジャムバーと〔もう1人の兄か?〕。この僧は妻子もなく、本当の僧そのまま生きた人だよ、そして後になって、64年、69年に私が農牧上級学校にいたとき、野菜の栽培係として働いていたよ。私の野菜畑で働く人の中にはいい僧たちがいたよ。ああ、それからアジンムフという先生がいた、ああ、あの人、彼らも僧だったのかな、後になって経典を学んだのだろうか。ノゴーン・ダンガルという老人がいた。このハラホリンで妻子を持っていた。奥さんは亡くなって、子どもたちはここに今も暮らしている。ノゴーン・バンザル〔ダンガル?〕さんという人がいたよ。ギャナバサルという人もいた。何人かの僧たちがいたんだよ。彼らは経典を読んでいたよ、行くと経典を読んでいた。私はその経典を取り上げて、高僧から与えられた経典を道に投げ捨て、取り上げた経典を破りすててね、「あんたたち、野菜に水をやれ、そんなにすごいものだったら、雨を降らせてみろ」と罵倒していたんだよ。今思うと、そんな風にするものではなく、それは何の経典なのか、どんな歴史のある本なのか、内容を話させて、チベット語の1つや2つ、文法などを習っておくべきだったんだよ。今になって自分

で勉強しようとするのとどれほど大変か、後悔しているんだよ。一部のそういう、いい僧たちがいたんだよ、彼らのことを忘れてしまっていたよ。私の今度出来上がってくる本の中に、それらはみんなあるよ。写真付きで出ている。写真を見つけて、その本の中に書き入れたんだよ。

- D：昔僧だった人びとは秘密で経典を読んだり、法要などを行っていたんでしょうか？
- B：ああ、彼らはというと少なくとも法要を行っていたよ。行ってみるとね、そのガルサンセンゲー兄の小さなゲルの中でね。そしてそのガルサンセンゲー兄というのはズボンをはかない人だったんだよ。そのスカートのような、僧が着る、何といったっけ、ドンゴグ、そういうものを着ているんだ、ずっとね。そして経典を読んでいる、そういう人だった。
- D：地元の人びとは秘密で訪れて、経典を読ませたり、物事を尋ねたりなどしていたんでしょうか？
- B：もちろんそうしていたよ。うちかというとボグドの郡の中心地にあったんだ、ダルハン（鍛冶屋）のラーゲリ（共同生活所）とって、何人かの僧たちがいたよ、うちのボグドには。そこにドゥゲヤという僧がいた、人の運勢をみる人だった。ヘンティドルジさんという1人の老人もいた。うちのヴァーンチク兄、おお、ヴァーンチク兄を忘れるところだった。ヴァーンチク兄はウルシュー・バクシの仏教の先生だったんだよ。ああ、チョイセンゲーという老人もいた。トラクターの運転手だったボディゲレルの父親のチョイセンゲー。とても優れた僧だった。私はチョイセンゲーさんの所に、ゴチン・オス（郡）、トゥグルグ（郡）にいるときにバイクで訪ねて行って、2、3日泊まったよ。耳が聞こえなくてね、大変だよ、それで紙に書いてくれるんだ、新しい字でね。ヤンビーダルジル（経典の1つ）という本を読んでもください、ああ、私が書きます、こういう感じでね。今、うちの納屋の中にあるよ、78年にチョイセンゲーさんが読んでくれて、私が書き留めたものだよ、ははは、ヤンビーダルジル。
- D：チベット語ですか、モンゴル語ですか？
- B：チベット語で読んでくれるんだよ、もちろん。私はそれをキリル文字でノートにこうやって書き取るんだ。私はだいたいその時代、僧たちに読んでもらって、自分はチベット語は知らないからね、いつも読んでもらってキリルで書き取ってね、それを暗記していたんだ。ツァガンシュヘルト（仏陀の著作、さまざまな外からの悪い物から身を守る経典）、アリオン・サン（死の穢れ、すべての穢れを清める経典）、ヒーモリーン・サンなどかというと、私は自分でキリル文字で書き取ったんだ、そして覚えて読んでいたんだ。

4 社会主義時代の占星術

占いはというと、私が13歳のとき、それもまたウルシュー・バクシの本当の占い師、

占星術師だったんだよ、黄色いアディヤという僧はね。やんちゃな者はいろんな物に首を突っ込むというように、私は動き続けているんだよ。49年に私は13歳のとき、その人から占いを習ったんだ。小学校を卒業して、田舎に出たんだよ、夏にそっちの方にね。そしてうちはそのバヤンツァイルのドゥルルジ（山や丘の突起の鞍部）と呼ばれている所にあった、かなり多くの家々がそこで夏営していたんだ。すると、あるとき雨が降り始めて、空が真っ黒になってかなり雲行きが怪しくなった。私はヒツジの放牧に出ていたんだ。ショボー・バースト〔地名〕というその南東の岩の所だ。狼がたくさんいる所なんだよ。「おまえ、雨の中で狼に人の家畜をとられちゃいけないよ。バドマー、よくみはっているんだよ」といつも母が私に注意していたんだよ。バルジン夫人とって、うちの北側に国家優秀遊牧民になった有名な女性がいた。その女性はとても優秀な遊牧民だったんだよ。「さあ、バドマー、お前は草原で寝てしまって家畜をなくしてはいけないよ。この呪文を覚えなさい、お前は物覚えがいい子どもだから。これは狼の口が動かなくなる呪文だよ」といって、私に呪文を教えてくれたんだ、そのバルジン夫人が。そしてそれをいつも唱えていたんだよ。そして、その日、こうして放牧にでていると、空が暗くなってね、昼になっているのもわからないくらい暗くなった。家畜を家の方に集めて連れて行こうとしていたんだ。すぐにとにかく集めて連れて行こうとしていた。うちの北側にアルタンテヴシ〔地名〕という埋葬をする窪地があった。そこに連れて行くぞと子どもたちを脅すときに使うくらいで、死者を置く所なんだから、気味が悪いなんてもんじゃない、本来ならば近寄らないんだよ。だがそのとき、一部の家畜がそこに行ったように思ったんだ。家から近かったから、戻ってくるだろうと思って、そのままにして戻って、家に戻ってくると、雨が降ってきた。すると、犬が吠えてね、西の方からウマに乗った長い合羽を着た、茶色い帽子をかぶった老人が西の方からやってきていた。その人がバルジン夫人の所にやってきた。私は知りたがりだったから、誰が来たのか、走って見に行っただ。すると、硬貨を置いて、占いをしているんだ。「何て不思議なことだろう、ここから遠くない場所に狼がやってきているぞ」とその人は言うんだ。そのバルジン夫人はお茶をやかんに注いでいた。私はというとはこんな薄い白いシャツ、下は短いズボン姿だった。その時代、裸でも走ったもんだよ、私たちというのは。家の中では年配の人のいうことを聞きなさい、年配の人たちの前後を走るな、出て行け、と追い出されるものだったよ。それで、ゲルの中でその四角い机の後ろに立って見ていると、バルジン夫人は柄杓を取って私に投げつけて、「このバドマー、出て行きなさい」というんだ。失神しそうになるよ、両親や大人たちのことを、私たち子どもたちはとても恐れていたからね。放牧に出て寝ているもんならば、見つけられたら蹴られ殴られていたよ。そういうしつけが行き届いていた時代だよ、私たちはね。そして、さあ、出て行けと言われたが、そこにまだとどまっていると、その家のナサントクトフという娘がいてね、私と一緒に

に学校を卒業した子だよ、その子が使っていたんだらうか、木の棒があった。それで殴って追い出そうとされたんだよ。それで走って外に出てみると、10頭くらいのヒツジやヤギの中に、1頭の動物が動いている、私は狼というのを見たことがなかったんだよ。ウマに乗って追い払おうとすると、こちらに襲いかかろうとするんだ。それでヒツジたちを何とかまとめて連れてきた。声を出そうにも恐ろしくて声が出ない。ふう、ひいというだけだよ、声が出ない、涙で顔がぐちゃぐちゃになって、嘔吐しそうになった。狼を初めて見たんだからね、狼と蛇の2つは恐ろしい動物だよ、声が出ない。そうしていると、おい、こら一っというので、振り返ってみるとバルジン夫人が横にやってきている。狼は睨みつけるようにして2回振り返ると去って行った。家畜の所に行きなさい、おまえは何をしているんだ、みんな狼にやられてしまったんじゃないのかといわれた。そうして家畜を集めてみると、1頭もやられていない、全部のヒツジに狼の涎がついているだけなんだ。それは顎が動かない狼だったんだらうよ。それがなぜ動かなかったのか、本当にその人が教えてくれた呪文によって動かなかったのかもしれないし、あるいは突然くぼみに寝転んでいたら、家畜がやってきて驚いて顎が動かなくなったのかもしれない。非常に飢えた野生の動物は突然家畜がやってくると、突然それを見ると顎が動かなくなるというんだ。だから動かなかったのかもしれないね。2つ考えられる、そうだったんだらう。そして、それを予言したアディヤさんは本当の占い師だと思ったんだ。

うちの母には9個の硬貨があったんだ。うちの父はというと家畜を追い立てて連れて行く人だった、トーヴァルチン(家畜を追って連れて行く人)だったんだよ。37年間家畜を追って、亡くなったんだよ。その両親も占わせるんだ、いろいろな占い師にね、硬貨を使う人も使わない人もいた。それで私は母に言ったんだ「お母さん、その9つの硬貨を私にください。私はアディヤさんに占いを教わりたいんだ」とね、「おお、そうしなさい。アディヤさんは本当の占い師だよ。そうしたらいいよ」といつてくれた。そして硬貨を持って、バルジン夫人の所に行った。でもそれをいえずにいたんだ、恥ずかしがり屋だったからね。「奥さん、奥さん、アディヤさんに硬貨の占いを教えてもらいたいんだ、どうしよう、話してくれませんか」といったんだ。「おお、そうしなさい、バダムは物覚えのいい子どもだから、きっと覚えられるよ。ねえ、アディヤ、うちのこの子、バダムにその占いを教えてやってよ、ねえ」と。だが渋っているんだ。「さあねえ、師と弟子になるといっても、好きなときに好きになっていいもんじゃあないよ」というんだ。そういわれて私はじっと我慢して、小さな頭を机にこすりつけたよ、こういうとき、私はいつも机をこすっていたんだ。さあ、どうしよう、教えてもらえないんだ、どうしようとね。「さあ、お前、教えてもらおうというならば、師弟の関係になって、良い日に礼に従った贈り物を持って教えてもらうものだよ」というんだ。「ああ、そうしたら私はどうしたらいいんでしょうか、アディヤさん」と

いうと、「自分で考えなさい、どうやって教えてもらうかをね」というんだ。「お金はあります」といって例の硬貨を見せた。「それはお前にとって必要だろうよ。しかし、他に、師匠になってもらうんだから、師匠に贈り物を持ってきて教えを請うものだろうよ」というんだ。師弟の関係になってから、それを教えるという。こうして母の所に走って行き、こう言われたと話した。すると母は木箱の中を探してね、すると古いサムバイ（薄くて安い絹織物）を取り出した、その上、10トゥグルグをね、昔の10トゥグルグ札だ。「さあ、この10トゥグルグとこの布を持ってアディヤさんの所に行きなさい、お前は学べるよ、できる子だよ。さあ」というんだ。こうして喜びいさんでもどって、ハダグの上に10トゥグルグをのせて、こうやって渡したんだよ、正座してね。大喜びだったよ。そして頭の上に、懐から出した数珠で、祝福を与えられたんだ。「さあ、座りなさい、お前はどのくらい記憶力がいいんだい」というんだよ。「私は物事を簡単に覚えることができます」と返事をした。「ああ、それでは硬貨を出しなさい」といって、例の硬貨を取り出させて机に置かせ、寺、モーロンフ、ザスラン、などと9つの名前を教えてくれた。「さあ、この9つの名前を覚えたかい」3回いわされているあいだに覚えたよ。「さあ、ではそれを筆頭にする硬貨が出るんだよ」といって、筆頭になる硬貨は、最初のこれはここに、これが筆頭だよという。こうやって硬貨をどうやって見てすぐ理解するか、どうするのかを私に教えてくれた。私に教えてくれたあと、先生は何かを手に握りしめたんだ、そして、学んだならば、私の手の中にあるものをあててみなさい、私は何かをつかんでいるからという。何かを手に握って、私に占わせたんだ。私はまったく初めて学んでいるものだから、どうやってそんな簡単にあてることができるだろうか。まったく解くことができなかったんだよ、それでしかたなくあてずっぽうに言おうとした。「感情で当てるのではない、その硬貨の上にある、それを読み取って解き明かすんだよ、違うものだよ」といって、こうやって、こうやって解け、今でいう技術を教えてくれたんだよ。そして「では、人に物を握らせて、占ってきなさい、それを解きあかすことができれば、お前は占い師になれるんだ。」こうして、私は子どもたち、友だちの所に行き、物を握らせて、最初は外れて、外れて、そして近づいて、また外れて、近づいて。最後には人が無くした家畜などを占ってね。

こうやって私は13歳のときにアディヤさんから教えてもらって占いをしていたんだよ。こうやってずっと占い師をしているんだよ。後になって社会主義、共産主義時代というのは、長や何かの役目につくために、その硬貨を母の所に置いて行ったんだ。64年に故郷に残して行ったんだ、母にね。64年じゃない、嘘をいったよ、61年に家に戻ったんだ、ボグドから、私はブルド郡で農業技師をして戻ったんだ。その家に戻ったとき、母は私に硬貨を出してくれたんだ。そして、私は秘密にしてね、常に秘密で占っていた。特に青年同盟長などをしているときなどは、ひた隠しにしていたよ。こ

うして、90年の民主化になって、僧や宗教などが出てくるようになって、私は定年になった、そして野菜を栽培した。国営農場の野菜畑で、国の功労技師だった、今は亡くなっただろうよ、国営農場にいたツェレンナドミド長が私にニンニクを栽培してくれと言ってね、うちの国営農場では何年もやってみたけれどニンニクを栽培できなかった。お前ならできる、ゴビヤハンガイで野菜を栽培していた者なんだ、ニンニクを植えてみてくれという。そこで、私は0.5ヘクタールの畑でニンニクを栽培した。そして、そのころ、飛行機が行方不明になったとあって、百万トゥグルグの賞金がかけてあるとあってね、嘘か本当か、そんな賞金をかけて探しはじめているというんだ。私にはだいたいのがわかっていたんだよ。すると国営農場長だったツェレンナドミドさんは私を3回試したんだ。1回目は私が自転車で走っていると、おおい、おおい、そこの若いの、という。こっちに來いというので、行ってみた。どうしたかという、その時代というのは国営農場の農地の私有化とか何とかいって、みんな私有化されていた時代だったんだよ。それで私有化で得た2歳ウマとその母ウマがいなくなった、群の所に行ったんだろうかというが、群には戻っていない。さあ、お前は占いをするだろう、占ってみろというんだ。ああ、これは私を試しているんだなあ、まあとにかく占ってみよう、占ってみよう、群にいるという。ああ、私をただ試したんでしょ、いなくなったのならば、群にいるものでしょよ。あなたはこうしてください、私と違って自転車に乗るような人じゃない、長なんだから。69（旧ソ連製ジープ）やいろいろな車を持っているんだから、それに乗って、ウマの群れの所に行ってみなさい、そこにありますよ。こういってね、そうやって話は終わったんだよ。

次はというと、畑というのはこのあたりの南側にあったんだよ、うちのこのあたりにね、うちは郡の中心地に近い所にある。うちはここで長年暮らしているよ。そしてそのとき、畑の柵の中の栽培用の小屋で野菜を根分けしていたんだ。すると野菜の見張りをしているツェンドという人がいた。その人が、おおい、うちの会計士たちは県都へ報告を出しに行ったんだ、昨日出発したんだがまだ着いていない。夜にたくさん雪が降った、まだ着いていないんだ、あなた、占ってみてくださいよ、事故にあったんじゃないだろうか、と言うんだ。おお、そうしよう、占ってみよう。私が占ってみるから、そのあいだにもう一度あちらに電話してください、こう言ったんだ。そして占ってみると、もう到着していると出た。私を試しているんですか、彼らはもう到着していますよと言った。いや、さっきかけたときには着いていなかったんだ、じゃあ電話してみようと言った、到着していたんだろう、こちらには何の連絡もない。それで行って聞いたところ、おおバダムレグゼン、彼らは到着していたよ、さっき着いたと聞いていたといわれた。これが2回目だよ。

3回目はというと、ある日、物置にしている貨車の所で野菜畑で働く者たちが食事をしようとしていたんだ、すると農場長がやってくる。時々一緒に食事をしたものだ

よ。そして長や私たちは例の飛行機についていろいろ話をして、畑の労働者たちは私にいろいろ占わせて、手に何かを握ったり、一部は握らなかったり、女たちはいろんなことを相談して、そうしていたんだ、長もそこにいた。そして、おお、例の飛行機を占わせるのを忘れていた。その飛行機がどこにあるか占えたら、お前を本当に会社の、当時は会社になっていたんだよ、会社の占い師にするぞ、というんだ。例のダシツェレン・オチルバトの占い師にしたようにね。そういっていたんだ。そういえば、あなたはこの前、2回も私を試しましたよね、でも2回とも私にはわかっていましたよ。そのウマたちは群の所に行っていたこと。その長たちは到着したということ。さあ3回目だ、今度当てたならば、あなたはいったことをちゃんとおこなってくださいよ、約束は果たしてくださいよ、と。嘘をいわないでくださいよ。会社の占い師にするなんてね。〔約束を果たすかどうか〕見せてもらいますよ、といったんだ。それで私は占っていったんだ、おお、見つからない、生きているものは何もないとね。とてもたくさんの氷や水のある険しい山の場所、どこなのかはわからない。わかるものなら何という山にあるといたいよ、でも知らないものは仕方がない。山がちな所のように、こちら側には誰もいない。近いうちに見つかる。そうしたところ、本当に何という山だったのだろうか、私はこうやって占ったんだよ。その後、私は長から遠ざかって、いくらかの給料を与えて会社の占い師にしようといっていたのに。ああ、お遊びをしかけて笑い者にしていなくなったよ。そんなことがあった。こうやって90年に、いや90年じゃない、70歳になって、2004年というね、99年に私は僧になったんだよ、5年目を迎えていることになるね。

D：あなたに占いを教えたアディヤという人は僧だったんですか？

B：僧だったよ。僧であったとき、そのウルシュー・バクシの占い師だったというよ。そのチョイセンゲー、ヤムビーダルジルの2人はというウルシュー・バクシの占い師だったんだという、後の時代のね。

D：あなたの家ではあなたが小さい頃、仏教を信じていましたか？

B：うちでは信仰といってもそんなたいしたことはなかった、しかし母の信仰していたノゴーン・ダリ・エヘ（緑ターラー仏）という仏画はあった、小さなね。そして、私はそのノゴーン・ダリ・エヘ、それによってひどい目にあっただよ、それをもちだして、4つに折り畳んで、そのかわりに元帥の写真を入れたんだ、チョイバルサン元帥。

D：額縁にですか？

B：額縁に。チョイバルサンの、その時代将軍、例の元帥の服装をしたとても素晴らしい写真があったんだ。

D：あなたの硬貨は今、本堂にあるんですか？

B：硬貨、ああここにあるよ。

D：ああ、そうですか、それで？

B：それで、私はその母の、その先生が教えてくれた硬貨を何年も保管していた。いけないことというのはとても不思議なものだね。去年、私はあそこに行ったんだ、中国へね。オタイグムベン、それから北京、フフホトと行って戻ってきたんだ。戻ってきてウランバートルで少し遊んでいて、明日になって戻ろうとしていたところ、その4区の終点の所に私の1人の弟（もしくは妹）の家がある。家に行ってみると、収入や何や、いろいろなことがうまく行かないという、それでそのヤンビーダルジルを読んでやり、経典をあげてやってね、その後、戻ろうとして夜になってしまったので、ミクロバスに乗ったんだ。それでそのカギタバコ入れの袋を膝において、こうやって置いて、細かいお金がなかったから、5000トゥグルグを払ったんだ、車掌にね。それなのにおつりをくれないんだ、それでののしりながら言ったんだ。そのために忘れてしまったんだ。降りるときにそのカギタバコ入れの袋、占いの貨幣、お金とパスポートは別で5000トゥグルグ、いや10,000トゥグルグ入っていて、その5000を払って、後の5000トゥグルグの入ったそのカギタバコ入れの袋、貨幣をこうやってなくなってしまった。

D：あなたはそのダリ・エヘを、お母さんのダリ・エヘを取って、チョイバルサン元帥の写真を入れたといいましたよね。

B：そうだよ、それによってとても不吉なことになった。仏の罰があたるものだ。仏の。

D：どこに置いたんですか？

B：木箱の上に折り畳んでおいたんだよ。

D：ああ、木箱の上に？

B：木箱の上にそのままそれを取り出して、伸ばして置いたりせずに、4つ折にして、紙を折ってそのまま置いたんだ。小さな子どものすることだよ。その時代というのは無宗教の宣伝が広まっていた、それはそれは強いものだったんだよ。それ〔このエピソード〕というのは50何年だったのだろうか、49年に学校を卒業して出たんだから、50年だっただろう。そうしてひどい目にあったんだよ。そのせいで19歳になった娘を失った。こうやって考えてみると、仏のあれだよ、仏のお守りを粗末にした、まさにそれによって罰を受けているんだ、今もそれから逃れられないんだよ。恐ろしい、仏のそれは恐ろしいものなんだよ。うちの長女に大きくなった息子がいる、その子は精神病だ。今21歳になる、いい青年だよ。5、6年生まではまったく普通だった子が、6年生になる年に突然いなくなったんだ。ウランバートルでマンホールに入ってね、1ヶ月探しまわって見つけて連れ戻した。すると精神に障害がおこって、それで疾患を負ったんだという。今は時には普通、時には病気なんだよ。

5 文化躍進運動

D：その時代、家々では仏を秘密で信仰していたんですか、一般的にわかるようにまつって信仰していたんでしょうか？

B：おお、どうやってわかるようにまつるものかい。特に文化躍進運動の時代というのは、特に仏教の経典などいうまでもなく、アルヒを蒸溜する樽まで罪に問われていたというんだから、考えてみたまえ。それで蒸溜をすることもできず、樽を壊していたんだよ。うちのボグド郡はというと、郡のネグデル長シャラヴチョクドンという、北朝鮮で大使館の書記をしていて戻ってきたというよ、党の推挙で行った人、後になってボグドから国会議員になった人だよ。そのシャラヴチョクドンが蒸溜する樽を壊させていたリーダーなんだよ。それで私は、その木の樽を壊させるというのならば、あなた方はベルゼンテン（堅い水を通さない布）で蒸溜の容器を作ればいいといって、そのやり方を人びとに教えてあげていたんだよ、ベルゼンテンで作らせて、秘密でアルヒを蒸溜していたんだよ、青年同盟の長だったときにね。そのシャラヴチョクドンと私はというと絶対にそりが合わないんだ。それはというと、私を党に入らせなかった、党のメンバーにしなかったというのはシャラヴチョクドンが私を邪魔したんだよ、党委員会のメンバー、郡、ネグデル長だったんだからね。ああ、党の人たちはまた別だよ、同盟委員会の長にはしてくれたんだからね。

D：あなたはなぜ党に入ろうとそう望んでいたんですか、当時？

B：党に入る興味があったんだ、少しでも党の仕事をしているんだから、入党したいという考えだった。残念なことに取らなかった。それはまた理由があったんだろうよ。今思うと入らなくてよかったと思っているよ。まあね、もし入党していたとしてもそこから出てしまった人というのはいっぱいいるからね。そんなことになっただろうよ。

D：小さい頃、あなたは仏教を信じて、拝んでいましたか？

B：おお、私はとても信仰心があったよ。だからその経典などをキリル文字で書いて…。

D：それは若いときですか？

B：もちろん若いときだ。

D：どのくらいですか？

B：30何歳だっただろうよ。30何歳だった。64年に私はというと青年同盟長だった、ボグド郡の同盟委員長といって6年務めたんだよ。

D：ああ、同盟委員長だったとき、あなたはそのチベット語の経典を読ませて？

B：それはそれより後だよ、その時代は北側の、そのヴァーンチク兄にヒーモリーン・サン、マンハンなど簡単な…。

D：なぜあなたはその時代に興味をもったのですか？

B：後の経典は別として、私は70年以降、ソイゾン・ドゴ（人名）から教わり始めて、書いたり読んだりするようになったんだ。

D：あなたはなぜ興味をもったのですか？ 経典に。

B：それはまあ、うちの先祖にそういう僧侶だった者たちがいたから、もともとそうなることになっていただろう。私はそう考えているよ。私の父は、そのウルシュー・バクシの所に行き、子どもを名付けてもらってきた、これがまず第1、第2にはウルシュー・バクシの乗るウマをね、とても不思議な人だったんだよ、うちの父はというと、すばらしい側対歩のウマを好んでね、今でいう趣味のようなものだよ、今でいうそういう趣味を持った人だった。そして、ウルシュー・バクシのお乗りになっていた、白檀の机に乗っているかのように〔すばらしい乗り心地の〕、淡黄色のウマがいたんだという。その淡黄色のウマはというと、50頭の子ヒツジを持つヒツジ、10頭の子ウシを持つヤクと交換して得ていたというんだ。そういう変人だったんだろう、たった1頭のウマを50頭の子ヒツジと取り替えていたんだからね。その時代というのは、家畜が非常にたくさんいて、ただだったんだろうよ。10頭の子ウシを持つメスのヤク。そして、ウルシュー・バクシのそのヤクを、私の祖父にあたる人がいた、ツェムベルという人がヤクの放牧をしていたんだというよ、家畜のね。そして従者、マイダル仏の儀式のときに、マイダルのウマ、額の白いウマが儀式に使われていたんだよ、その額の白いウマというのは、僧たちは手綱を持つことはなく、一般の人が手綱を持って歩かせるという、そういうきまりだったんだというよ。そのとき、私の祖父が、ツェムベルという人が、頭の大きいツェムベルという人は、僧ではなく一般人だったんだ。それでマイダル仏の儀式が行われるときには、マイダルのウマを必ず、そのツェムベルが手綱を持って連れてくると決まっていたんだというよ。

そしてまた、その上に不思議な話がある。不思議といっても、本当のことだよ、今年、そこに行って写真なんかを取ったんだ。というのは私のその伯父、伯父じゃない、その祖父はというと、殺されたんだというよ、呪詛されてね。そこにはあの人の家があったね、このエルデネゾーにある大きな建物、堂塔の仏像などを修理した人、レンツェンドルジという人がいた、一緒に働いていたシャラザやその他の人びとがいつも話していたよ、芸術のレンツェンドルジという人をね。子どもたちは今このハラホリンにいるよ。そのレンツェンドルジさんの親戚の人たちがいたんだ、兄の家の者だろうか、2人の僧がいたんだ、インドに行った。インドに行って、7年間勉強し、そして学校を卒業して戻ってきたんだという、故郷に戻ってきた、その師が送ったんだというよ。彼らの師というのはウルシュー・バクシの下の階級の、何とかいう堂塔の指導者だったんだよ。そしてその2人の僧は7年たって戻ってきた。戻ってきてどうしたかというと、その堂塔の今でいうオンザト（読経を導く役の僧）というんだらうか、2人ともそういう立場の僧になったんだというよ。その僧たち、2人の僧の学んだ経典と、わがウルシュー・バクシの経典の2つは、いつも対立したんだというよ。一方はゾド、ルージンという経典（苦しみを和らげるための経典）を学んできた2人、バ

クシはというと法要で今読んでいるチョイルという名の経典、今私たちが読んでいる経典の側の人だったんだからね、私たちの大部分はボグドの弟子、ホトクトたちというのはツォクチン・ホルルだよ。さあ、こうやっているうちに、2人の師は弟子たちを高位の僧にしてね、寺院の、座を争うというような状態になったんだ。こうやってお互いに黒（シャマニズム）だ黄（仏教）だといって、今もそういうことがいわれているだろう、寺の中がそんなふうになったんだよ。こんなことになって、ウルシュー・バクシはその下の師に対して、少しこういうことをしたんだろう、ちょっと制限をかけた、いいかえれば正しい道に戻そうと、圧力をかけたんだろうよ、そうすると、そちら側の師の僧は完全に反旗を翻して、呪いというのか、そういう悪の側の経典を持ち出して、その2人の弟子に呪詛を行わせたんだよ。すると、うちのホトクトの寺院の周りには狂犬や、狼などが走り込んできて、ウルシュー・バクシのゲルの屋根に爪を立てて、もぎ取って壊し、また、側にいる僧たちにさまざまなことで危害が加えられ、危険が降り掛かってきたんだという。こうして、彼らはわかったんだというよ、その僧がこういう呪詛を行っているんだということを。そうしてその2人の僧を捕まえて、彼らを西の、今私が話している、そのペルレーグンテヴ、さっき話しただろう、例のメスラクダもっている、その家の向こう側にくぼんだ場所がある。そこに連れて行き、刑罰のための箱に閉じ込めて、例の頭だけ出す穴がある刑罰を行う箱、2つの箱に2人の弟子を詰め込んで、隙間には砂を詰め、身動きできないようにして「さあ、いえ、誰にどんな呪詛をしたのか、お前は何をしたんだ？」と尋問した。そういう刑罰をおこなっているときに、例のマイダル仏の儀式が行われる時期になって、明日それがおこなわれるということになり、うちのその祖父を呼んだんだという。そして翌日、マイダル仏が降臨するという。その前夜、やってきて泊まるものだったというよ。さあ、ツェムベルがやってくる。1頭の黒いウマに乗ってやってくるから、柵を見なさい。ウルシュー・バクシの所の隣に住んでいたんだというよ。ウルシュー・バクシの所は西側にゲルの跡地など、先日写真を撮ってきたよ。記念にお供えを置いたよ。その祖父の家は東側にあって、そこにはこういう2つの高い土壁があって、東側にはそのツェムベルおじいさんのゲルの跡地がある、今もそのままあったよ。

そして、その正面には黒いウマがつけられていて、バクシは弟子たちに説法していたよ。そして翌朝になって、マイダル仏の儀式が行われる日になった。そのウルシュー・バクシの従者、マイダルのウマの轡を取る役のツェムベルは亡くなってしまっていたんだ、死んでいたんだという。家で死んでいたんだよ。呪詛だよ、その2人の恐ろしい弟子たちの。それで、その2人を箱詰めしたまま尋問したんだという。彼らは1人は罪を認め、1人は認めなかったというが、処刑されたんだ。その場所にはその木の箱、彼らの骨がある、今でもあるんだよ。彼らをそこで処刑したんだ。ああ、その2人の魂はというと、耳のない尾のない2頭の狼になって、戻ってきた。

その寺にマーニトさんという人がいたよ。それ以後、マーニトさんがオマー・ホム・バザル・パニ・ホム・パドという経文を石の上に彫って、碑を創作したんだ。経文が書いてあるよ。そのマーニトさんの碑のある丘の東側にボルガスト火山がある。そこには経典にある「ボーヴォン・チョロー」というまた伝説がある。ここには石で作った物があるが、そこには木で作られた、そういう男性器の形をした物があったんだ。それを1947年、私がボグドの小学校で学んでいるときに、ハルラーニー・トゴーチという人がいた。今もボグドに住んでいるよ、70歳を越えた老人だ。他にスレンガーという人もいた、そのスレンガーはヤクにぶつかられて、ずっと前に亡くなったよ。その2人が例の性器の形のオリヤス *Ulias* の木（ヤマナラシの仲間、学名は *Populus*）を切り倒して、下部を一方に、上部をもう一方に、ヤクの上の鞍に結びつけて、持ってきて、ボグドの学校の燃料にするために薪にしてしまったんだよ。おお、本当に、その時代、私は子どもだったから、何もわからなかったけれど。今歴史がわかるようになって、さっき突然思い出したよ。そういう2つの丸いクルミのようなものだったよ、オリヤス、それを切り倒して小学校の燃料に使ってしまった。今思うとそういうことだったんだろうよ。

そうして、そのボルガスト火山にその尾のない2頭の狼となって戻ってきたんだというよ。そしてその頃、寺の僧たちがほとんど性病にかかってしまったんだ、若い僧たちは寺の外に、女たちを連れて行って、そのボルガスト火山の所でいろんなことをしていたんだというよ。するとその2頭の狼がやってきてその女たちを食べるんだ、そういう恐ろしいことがおこったんだ。そこで、火で浄めのお祓いをして、そのオリヤスで性器の形のものを作り、そこでまじないをして、その2頭の恐ろしい魔王を滅ぼしたんだというよ、その2頭の狼はそれほど恐ろしい存在だったんだよ。その恐ろしい時代の始まりが、祖父ツェムベルが彼らの呪詛で死んだことだったんだよ。

D：その2人が呪詛したんですね。

B：そうだ。それを今年、去年、故郷へ行ったときに、1人の親戚の80歳を越したお姉さんがいる、そのお姉さんがそうやって〔祖父は〕亡くなったんだそうだと話していたんだよ。それを私は心中で詳しく調査してみたら、きっと明らかになるものだと思ったんだ。それで今年になって、故郷へ戻ったとき、それを調べるために何日間かを費やした。私は聖なる僧のそこに行って、そこからバローンボグド、バローンボグドからズーンボグドに入って、バイクやウマで旅をしたんだよ。そして、その歴史を調査したんだ、著書の中に書こうとして調査したんだ、写真なども撮って来たよ。それで、その歴史などかなり多くのことを知って戻ってきたんだ。それらを話す、知識のある兄弟たちは亡くなってしまった。いい時代になってきた今、たった1人年を取ったお姉さんが残っているよ。彼女はそうやって話していたんだ、それで、こんな、こんなことだった、こうしたんだという、これをあなたは聞きましたか、これを知っ

ている人は今この土地に誰がいるのか、教えてください、と私は行ってね。今年、私は子どもと一緒に故郷を訪れて泊まって、いろいろ調査をしたんだよ、たくさん話をしてね。ほとんど私たちの世代はいなくなってしまって、歴史を知る人はほとんどいなくなってしまった。高齢の人たちはなくなってしまっているんだ。

D：信仰に対して少し寛容になったというのは、いったいどの時代からでしょうか、昔、社会主義の時？

B：おお、それはあれからだよ、民主化の、90年以後、寛容になったんだよ。それ以前というのはまったく閉ざされていたんだ。特にゴビの方というと、そういう知識のある僧はいなくなった。経典を持つ、仏教を信仰する家もなくなった。文化躍進運動の時代、すべてを持って行って、さあお前は仏を持っているか、経典を持っているか、と行ってね。特に党のメンバー、同盟のメンバーはというと、それを最も調べて、弾圧していたんだよ。なぜかというと、私は自分が青年同盟長をしていたから、このことを詳しく知っているんだよ。

D：仏教の信仰物があれば、これを没収しますか？

B：ああ、まあそれを没収しなくても、私の場合は、あなた方、こんなふうに出してはいけないよ、といていたよ。ツァガン・サルの日や、縁起のいい日などには出して拝みなさい。その他のときは常に隠していなさい。隠すときにはこうやって木箱の中に入れて、上から服を置いて、こんなふうにはしてはいけないよ。木箱の中に隠し部屋のようなものを作りなさい、あいだに横板を入れて、2つに仕切るんだ。このくらの木、それで上に仏や経典などを入れて、下側にその他の物を入れなさい。それで仏をまつりに行くときなどは、こうやって天窓も積んで、ラクダの上にその仏の入った木箱などを持って行きなさい。次のラクダの上に子どもや何かを乗せて持っていくものだったんだよ、わがゴビの者たちというのは、そうやって移動していたんだよ。その伝統はそのままにしなさい。私はアルヒを蒸溜する樽を壊せというときに、ベルゼンテンで樽を作るアイデアを出していたというくらいの者だったんだからね、私はボグドで多くの人にベルゼンテンの樽を作って、蒸溜をさせていたんだよ、工場だね。うちかというとボグドでヤクを飼っていた。そして工場で搾乳する。その時代というのはみんなネグデルに渡してしまった、ネグデルの家畜だよ。個人形態の家畜というのは、ゴビでは何頭まで、ハンガイでは何頭までと決められていたんだからね。それ以上になって家畜は社会の物として持って行かれる。そうだったんだよ。公務員たちというのは、家畜を持つことはできない。乳が配給される、肉も配給される、税も割り当てられる。私はというと、同盟長だったときに、公務員だといって、家畜を持ってなかったんだよ。ある年に1頭のウマ、父がウマを数えられて私の所にやってきた、私はどうしたんですか、このウマはどうしたんですかと、その家畜頭数調査の結果をもみ消すようにまでしていたんだ。大変な時期だったよ、そんなふうだったんだ。

6 民主化後の宗教実践

D：今、あなたは仏教がどのように、どんなふうに使われていると考えていますか？

B：おお、今はとてもいい時代だよ、その点ではね。今年の秋に国会で仏教について取り上げて話し合われようとしていた。バドラー議員などがいろいろな人から意見を募集したんだ。それに私は意見を送ったよ。それから新聞にも送ったんだよ。それは載らなかったがね。だが、この秋の国会では、宗教問題について話し合われなかった、こうして過ぎ去ってしまった。それで、この前、私はウランバートルに治療をしようと思ったんだ、でも〔その宗教に関する仕事は〕できなかった。1週間、いろいろな所で検査やその結果を診断させようとして、診断が出たあと、12日間入院して、出てきてからこちらに急いで戻らなくてはならなくなって、ばたばたして、できなかった。本来、私はこの宗教を秩序のあるものにしたんだよ。チョイ師の所に一度行ってみようかと思っている。今はこういう分け隔てのない宗教の統一された機関というのはないんだよ、モンゴルには。宗教のそういう統一された機関はない。あなたはなぜそんなことをいうんですか、といわれれば、これはこういうことなんだよ。この堂塔を建設させようと私は県の県知事の所に走って行って、意見を述べようとしたんだけど、県知事はいないという。そのときというのは、県知事はエルデネビレク知事だった。今は大使か何かになってしまっているよ、ロシアで。テムベレリン・エルデネビレク。そのエルデネビレクの所に行ってみたところ、そいつはというとその他5人と一緒にアルヒを飲んでいるんだよ。それで私はウブルハンガイから直接省に行って、省に行ったところ、建設させないという、それで、私はそれを不服として「ジンダー」紙に投稿した者なんだよ。さあ、このように動いてみて、宗教の機関はいつどこにあるんだろうと、こうなったんだ。だが、まったく存在しないんだよ。チョイジャムツはどんな僧か。ガンダン寺の、モンゴルの宗教界の中心ガンダン寺のハムバ（管長）というだけであって、モンゴルの仏教の統一センターの、いいかえれば会長ではない。そういうものはないんだよ。さあ、そういう宗教の統一した機関というものもない。それを作り、故郷の代表である国会議員たちが言っているように、すべての郡に1つの寺、すべての県は堂塔のある1つの寺院を持つようにすべきだと考えている。

さあ、この上に話すとすると、少しは知識のある人びとが信者たちの資金で裕福になって、それで何とか基金だの何とか導師などという名前でもいろんな宗教家が出てきている。本当に心を砕く人というのは、宗教の教義、言い換えれば宗教の専門の教育を受けた人であって、そういう人が大勢いるんだよ。そう理解したんだ。こうして、私はどこに行ったかという、ソニンバヤル師の所に行った。そこに行くと、私は例の本、それによって最初知り合ったんだよ。その『満月』という本を1冊、黄色いハタグに包んで行って、初めてソニンバヤル師と会って、師弟になったという、こうい

ういきさつがある。次にはどうしたかという、L.フレルバートル、優れた学者だよ、モンゴルを引っぱっているただ1人のチベット語の翻訳家というフレルバートルさんだよ。家にまで行ったんだよ、「モスクワ」地区にあるんだよ。家に行って、棟の玄関で同じようにハダグを捧げて会って、こういうことをしています、こういう経典を研究して、こうやって私はウルシュー・バクシについて調べようとしていて、こういう人びとがたくさんいますということなどを話した。この人を、こういうホトクトたちを今明らかにしよう、13人のホトクト。わがウルシュー・バクシは13人のホトクトの1人なんだよ。2つの印璽を持つウルシュー・バクシというのは、ダライ・ラマから授けられた印と、ボグドハーンの印をもつ、印璽をもつ方と呼ばれているんだ。2つの印をもつ（共載、チンギス・ハーン一族の系譜で、かつダライ・ラマの系譜であること）僧というのは、わがゴビのその方なんだよ。ウルシュー・バクシなんだ。これを今、世に出そうとしている人はモンゴル国にはいないんだよ。私はというと、力が及ばないんだ、チベット語など、宗教の知識が不足していて、これを今どうしようかと思っている。どうやって研究したらいいのか、これをあなた方のような人びとが研究して世に出してください、私はいろいろ調べて、それを提供することはできるから、そう思ったんだよ。すると、あの人、ディラヴ・ホトクトについて書いた、その本を私に下さった。今も持っているよ。ソニンバヤル師もまた1冊の本を下さった。ドンドゴビのホトクトたちについて。清朝に支配されていた時代のモンゴル支配、清朝支配によるモンゴルという。そして、これを読んでみなさい、ディラヴ・ホトクトについて。あなたはこれを読んで、同じような形式でその師について調査をしなければならぬというんだ。そして私はそれ以後、一昨年、1人の親戚の年老いた兄がなくなって、その葬儀に行って、親戚の姉と会って、話を聞き出したというのがそれなんだ。そして今年、フレルバートル師がされたようなこういう調査をしなければならぬ。少なくとも、その寺の所に行き、ゲルの跡を見た。本堂は掘り返されていた、こういうものを見つけたと話しているのはそういうことなんだ。こういうことなんだよ。

D：今ホトクトや転生者などを明らかにさせていますよね、わが国では？

B：そうだ。

D：あなたはそれを明らかにするのは適正だと考えていますか？

B：おお、これは適正なことだよ。現代の科学ではこのように話されているんだよ。魂というものはある、そうだろう、魂があるのだから、仏はいる、証明されているんだよ。どんな名前だっただろうか、大きな世界的な特別の科学、魂研究という大きな科学が開かれて世に出てきたんだよ。そこではこう定義されているんだよ。魂というものは存在する、魂というものは、魂と思考力、魂には思考力がある。人がこうやって生きていて、生きていながら、人は運命があるといわれている。生きていながら、人の魂は威光と運命の2つで成り立っている。死んでしまうと、魂は体から抜け出る

んだ。魂がどうなるかという、思考力は魂の中に存在するんだという。男性の魂は蛇の頭をした、こういう人の頭の形をして蛇の尾をした精子の形をしている。女性の魂は頭の形をしたこういう卵子の形だという。こうしてその精子の中に魂と思考力は一緒にあるんだ。それで男女の精子と卵子が一緒になって子どもができあがる。その子どもを作り上げる、最初の受精卵の中に思考力が宿っている。これをどうやって証明していたかという、世界で有名なモーツァルトというのは、4歳の子どものときにどうやって世界のクラシック音楽を書くことができたんだろうか。4歳の子どものときにどうやって。これを研究したんだよ。この魂の研究ではね、現代の世界的な研究者がね。そのモーツァルトの父は偉大な音楽家だった。母もまた音楽家、声楽家だった。この世界的なレベルでこの子どもはこうやって作られ、その2人の魂がこうやってそこに入ったんだよ。モーツァルトの魂にどうやって入ったのかという、父は音楽を創作し、奏でている、母もまた歌を歌っている。その子どもはその魂と思考力の2つがあったからこそ、それを聞いていたんだよ。受精卵のときからそれをこうやって聞いていたから、4歳のときにこの素晴らしい、世界でも有名な音楽を創ることができたんだという。

さあ、このように偉大な研究者たちはみんなこうやって研究し、その成果を出したんだよ。こういうことだと、研究を世に出してきたんだ。これは真実だろうよ。こう考えると、この転生者というのは、みんなそういう人びとだということになるよ。その魂が出て、ある場所のどこかにたどり着くんだ。昔のホトクトたちは、こういう伝説、歴史をこうやって聞いて学んでいたんだ。小さい子どものころに、年配の人びとが話していたんだ。1人の転生者についてとても素晴らしい話があった。それはこのゴビのドクシン(凶暴な)ホトクト・ダンザンラヴジャーの転生者だったんだよ。それは5世のときに無実の罪に問われた人なんだ。そして6世の転生者はというと、これなのか、7世の転生者、8世の転生者というのが、そのダンザンラヴジャーの7か8世の転生者というのが、このわが故郷の、そのツェレンヴァーンチク・グーシ(僧の学位の1つ)、ウルシュー・バクシの2人だと考えられているんだよ。その7世、8世の転生者は常に自ら明らかになったものなんだよ。なぜかという、第8代ボクド・ハーンと清朝皇帝の2人は、ダンサンラヴジャーが5世の時に罪を着せて、処刑してね、砂の上でむち打ちにして消し去って、再度転生を認めないと、こうやって捨て去ってしまったんだよ。こうして次の転生はというと、みんな自ら自分で明らかにして[誰かに承認されるわけではない]いたものなんだよ。その6世の転生のことを私に話してくれていたんだと、今、私は思っているんだ。とても美しい伝説だったよ。それは私にとって、まさに6世の伝説だった。それを話していたことを思い出したよ。そうして、そのころに私が思うことといたら、いつもそういう後の転生者のことだったよ。彼らの生まれる場所は、いつもひどく貧しく、財産もなにもない、夫のいな

い孤独なそういう女性の所に行って、生まれてくるものなんだよ。常にそうやって生まれている。そうして、その6世の転生者はというと、ゲルに生まれたんだ。その7世はというとそうやって生まれて、ツェレンヴァーンチクという人はわが寺院で5歳のときに転生が明らかになって、南へ送られて、それはどこなのか、インドだったろうか。そして10歳になって、わがホトクトの寺院というのはずっと後に建設されたんだというよ、ボグドの寺は。私には設立の年月の記録がある。そしてそこにそのツェレンヴァーンチクの転生を明らかにさせて、そこに配したんだよ。その人は長生きはしなかったんだという、それで亡くなって、次の化身はというとウルシュー・バクシというのは、ウブルハンガイ県のボグド郡の第2バグ、フルフレーの谷に生まれた人なんだよ、わが故郷の地に生まれた方なんだ。フルフレーの谷に生まれたゲルの跡が今もあるよ。

D：するとウルシュー・バクシというのはノヨン・ホトクトの、次の、次の化身？

B：そうそう、そういうことなんだというよ。

D：その伝説というのはどういう意味の伝説なのでしょう？

B：それは言い伝えのようなものだよ。6世の化身について私だけが知っているだろう。これは6世の化身についてなのか、7世の化身なのかはわからないんだよ、推測しているんだ。それはというとこれはこうしたものだ、それはこうやって5世を認めないといって、こうやって捨て去ったなどと、私は6世なのだろうかと考えていると、ゴビの地に巡り会わせただ。

ゴビに、その旗というのは、今で言うバグ。バグ長たちというのはザンギと呼ばれていたんだよ。ザンギのツェデヴという人がいた、そのツェデヴの使用人、20歳を越えたくらいの若い女性、孤児でヒツジを放牧するそういう使用人の娘がいた。そして、その女性が妊娠し、1人の男の子を産んだ。さあ、その息子が3歳のとき、小さいときにその若い母が亡くなってしまった。そして、その3歳の子どもがそのツェデヴの所に残されたんだ。こうやってツェデヴに残され、3歳の子どもなのにヒツジの放牧をしていたんだという。さあ、こうやってヒツジを放牧していたところ、ある日、狼がやってきて、その聖なるものに捧げたヒツジ（首などに絹布を結んで聖別した）を取って行ってしまったんだよ、狼が走ってきてね。こうして、その聖なるものに捧げたヒツジをその子は狼に獲られてしまって、夜になって怯えながら戻ってきたんだろうよ。すると、そのツェデヴの妻はというと、非常に厳しく気性の荒い人で、その子をいつも叱り飛ばし、殴ったりしていたんだという、非常に意地の悪い、子どもを生まない人だった、そういう性悪な女だったんだよ。今でいうと夫人とでもいうんだろうか、その人を。その子の母が20歳を越えたくらいというんだから、その夫人はというと40歳にはなっていただろうよ、髪を真ん中からわけて結び上げた夫人と呼ぶべき人だっただろう。そしてその子どもがこうやって夜に戻ってきた、ツェデヴはラクダ

などを集めてくるといって出て行ってしまっていたんだよ。その子が戻ってきて、狼に食べられてしまった、何もできなかった、どうしようもなかったと言ったという。すると、その夫人はというと、子どもを叱り飛ばし、ヒツジやヤギの乾燥した糞を投げつけて、春だったという、そして「ヒツジを支払え、それができないんだったらうちから出て行け、仏に捧げたヒツジを連れていってどうしたんだい、狼に与えてしまうなんて、何ということをしたんだ、この下僕め」と。こうして子どもは出て行かされたんだろう、目に乾燥した糞が入って涙がこぼれ、目から涙を流してそうやって出て行ったんだ。こうして夜になった。ツェデヴがラクダを集めて戻ってきて、食事をしようとしていたという。その時代の家々は蓋のない五徳のかまどだったんだよ、食事をかまどの上で作っていた。そしてその時代というのは扉などはなく、垂れ下がった覆いだった、その垂れ下がった覆いのフェルトの右側が開いたように思った。そして何だろうと見てみると、その子どもが例の狼を捕まえてきている。「さあ、これ、これがヒツジを持って行った奴です」という。

D：ええっ、3歳の子どもが？

B：そうだ。するとそのツェデヴはというと、これは普通ではない子どもだということ薄々感じていたんだ。そしてツェデヴは特に気性も荒くないどちらかというと温厚な人だった。ツェデヴはこれは普通に人間ではないなあ、その力を見せている、さあ、この子をどうしたものだろうかと思った。その夫人はというと灰をまき散らしてその子を追い払って、お前はうちに2度と顔を見せるな、足を踏み入れるなという。これは化け物だよ、不吉だ、こういう奴だよ、母親もいなくなってしまって、いったい何の役にたつものか。さあ、出て行けと灰を投げつけて、灰を人に投げつけるなんて、最もひどいことをしたんだよ。そうしてその子は泣きながら去って行った。こうやって歩いて行ったところ、その子はというと、春は放牧に行くための内側に毛のついたデールを作ってもらっていたんだ。それを着て、モンゴル靴を履いていただろう。そして風のあたらない暖かい場所に行こうと、ゴビのザク、トーロイの木（ゴビに生えるポプラの一種、胡楊）がびっしり生えている茂みの中に入ってそこで眠ろうとしていて、その茂みの木の根元の所に行くと、人が1人座っていたんだという、バダルチン（托鉢僧）だった。ああ、そのバダルチンはこんにはとか、何かいいながら、夕方、夜近くなってこんな子どもが近づいてきたので、気味悪く思っていたんだよ。亡霊か何かだろうか、なぜこんな所にいるんだろう、子どもらしい、白いデールを着てモンゴル靴を履いている、まさに子ども、男の子だ。なぜこんな夕暮れに子どもが歩いているんだろうと、恐ろしさと驚きが入り交じっていたんだ。そして挨拶をしたという。すると私はこうやってツェデヴという人のヒツジを放牧している、そしてこうやって今日こんなことがあって、狼がやってきて、ヒツジをとられて、それで狼を捕まえたけれど、聖なるものに捧げたヒツジを狼に食べられたとって追い出さ

れて、こうして眠る所もなくなって、行く家もなく、両親もなく、こうして暖かい所を求めてやってきたんです、という。「それじゃあ、今から私たちは2人で生きていこう、どこに行くときも2人で行こう、お前は私の子どもになって、2人で一緒に托鉢をして生きて行こう」「あなたはどこから来てどこに行くんですか?」「おお、私はこっちの方に、エルデネゾー寺院に行つて、托鉢をし、経典を学んで、こうやってまた戻つて寺院の近くに行こうと思つて歩いているんだよ」「あなたはどこの寺の何と言ふ人ですか?」「私はトソン・ノヨン・ホタク寺の、ほぼ僧だった人間だよ、それで今はこうやって…」それはというと、そのさつき話した人だよ。ツェレンヴァーンチク。ツェレンヴァーンチクの寺の人ということだったんだ。その時代そのように言われていたんだよ。つまりそのツェレンヴァーンチクの時代にツェレンヴァーンチクの伝説が生まれたと私は推測しているんだよ。

それでこっちに向かっている僧だよ、と話した。さあではこれから2人でこうしよう、とにかくこうやってここでお互いに体を寄せ合つて眠ろう。こうしてそのバダルチンは、「私のこの托鉢の荷の中にわずか1杯だけの米がある、私は雪か水を探してこよう、お前は木から枝を取つて、そのあたりの木を折つて火をくべていなさい」といって、火打石を渡して、水を取りに行くといつて出かけたんだよ。こんな小さい皿のようなものだよ、その当時、そういうかまどがあつたんだよ、そしてそれに水を入れるために持つて出かけたんだ。そして、水を汲んで戻つてきたところ、その子どもは何もしておらず、木や枝を折つて薪を作ることもせず、ただ座っているんだという。「何をしているんだ、この木を折つて火をつけなさい」といっただろう、火をおこさないなんて、何をしているんだ、お前は」とすると「いえ、別にただ…」とそういつているだけだった。そこでバダルチンは、自分で木から枝を折ろうとしたんだ。「おおい、待つて、待つて、あなたは何て困つた人だろう、待つてください」とその子は言つて、顔色を変えて泣きそうになつて、手の指を引っぱり、木を折らせようとしなかつたという。さあ、こうして折るのをやめたそうだ。そうして、落ちてゐる1本の木を見つけて、火打石で火をつけようとしたけれども、まったく火がつかないという。前にこうやって火をつけようとしたら簡単についていたのに、そのときはどうやってもできない、つかないんだよ。それで諦めたんだ。さあ、これはやつてはいけないことなんだろうと思ひ、じゃあどうしようか、どうしたらいいんだろうか、こうやって、空腹のまま寝るしかないのだろうかと考えていた。するとその子は「もう一度行つて、水、雪を、もう少しそれをここに集めて、きれいな場所に。もう一度ここに集めて持つてきてください」といって、その荷の上に持つて来た水をそれに置かせて、そしてもう一度取りに行かせたんだ。そして行つて戻つてきてみると、なんと、デルス *ders* (イネ科の仲間、学名は *Achenatherum splendens*) を燃やして、ご飯を炊き上げて、こうしているんだという。椀などに盛つて用意されていた。どうやってそうしたのかはわ

からない。ベレース（蒸し米，砂糖入り）という私たち僧侶が食べるご飯がこうやって用意されていた。デルスがいっぱい燃やしてあったという。いや，デルスなどまったくないこの場所でどうやってそれを見つけたのか，不思議なことだと驚いたんだというよ。そして食べてみると，非常においしいご飯だったという。そしてそのバダルチンはというと，僧，バダルチンとはいえ，悪い僧ではなかった。だから向こうからこうやって出会ったんだろうよ。こうしてこの子は普通の子どもではない。最初はデルスだと思ったものはお香になっていたという。これはある方の生まれ変わりだろう，いったい誰の生まれ変わりなんだろうと，そのバダルチン（托鉢僧）は信じて理解したんだという。そしてその子どもの言うとおりにしていたという。はい，わが子よ，わが子よ，と。そしてそのご飯を食べてしまって，眠ることになった。ああ，ノミがいるだろうよ，まあ仕方ない，2人でこうやって抱き合って眠ろう，寒くないならばどうだっていいだろう。2人でこうやって眠ろうと言った。そして一度，目が覚めてみると熱気で非常に暑いくらいなんだという。これはどうしたことだろうと思って見てみると，ミンクの毛皮を被っている，ミンクの毛皮はとても暖かく，暑がって2人ともはねのけていたんだ。ああ，私は何てすばらしい生まれ変わりとお出会ったんだろう。さあ，この子を失ってはいけない，ずっとついて行こうと思ったんだ。そして，朝起きてみると，その子どもはデールを被っていて，ミンクの毛皮などは消えてしまっていた。なくなっていたんだという。そして，さあ起きよう，明るくなった，家々の近くに行こうと起き上がったんだという。そして歩いていくと，こんな大きいトルコ石が地面から突き出ているという，球のように丸い，緑のトルコ石。おお，何て大きな宝石を見つけたんだ，何て美しいんだといって，バダルチンは縫い目の裂けた古びたモンゴル靴で蹴り飛ばして，そうやってそれを取ろうとして，荷に入れようとしてね，欲という感情，それはあるものだろうよ。するとその子どもが，「おおい，待って，待ってください。あなたはいつもしてはいけないことをしようとする，何て困った人なんだ，やめなさい」と，こういうんだよ。それでバダルチンは取るのをやめたんだ，その子どもの言葉に従って。どういうことなんだろうと，驚いていたんだという。木の枝は折らせない，2番目にはその石。そうやって歩いてきたところ，ある集落の端に入ったんだという。その集落の端にある家に立ち寄ろう，と。そして少しの塩や何か托鉢をしてそこからもらうことにしよう，荷の中に入れようとバダルチンはそういったんだ。こうして，ある家に立ち寄った。すると，1人の女性が鶏を焼いていたんだという。するとその子どもは顔色を変えた，恐ろしい顔になったという。「行こう，行こう」という。バダルチンはゴンチクという人だった，そうゴンチクという名前だったんだよ，そのバダルチンは。ゴンチクさん，行こう，行こうと。こうやってね。さあ，こうしてその家を出たんだよ，2人は。その子どものいうことに従って出て行ったんだ。すると，出ようとしていると外から黒い犬が走り込んで

て、その鶏肉を食べてしまったんだという。するとその女性は怒って、呪いながらハサミをつかんで犬を追いかけたんだという、それを後ろから見ていると、後ろ脚を強打して折ってしまったんだという。脚を折られてその犬はキャンキャン鳴きながら、すみかの方へといなくなってしまうという。そして、その子どもはというと、大泣きして、とても奇妙な様子になった。とにかくすぐに行こう、こんな所から、私たちはすぐに行きましょうと、こうして出発したんだ。さあ、こうやって3番目はどういう意味があったんだろうか。

そして、その2人は谷を下って、こうやって平地に出る丘の斜面の所にやってきた。「さあ、大きな平地に出たら私たちは2人とも凍え死んでしまうよ。このあたりでとにかく夜を過ごそう」とね。こうして、崖になった所を見つけて、枯れ草がボール状になったものが風に吹きとばされて集められた、そういう崖の下で眠ろうとしていたんだ。だが例のミンクの毛皮の外套を被っていれば凍えることはない、さあ眠ろうと話していた。こうして気がつく朝になっていたという。そしてさあ、出発しようとしたところ、その丘の上にたくさんのテントや馬車が集まっているという。ああ、ここにはたくさんの人びとがいたんだなあ。夜にやってきて泊まったんだろう。昨日の夜、私たち2人が来たときには見かけなかった、気づかなかったんだろうか。すると、その子は「さあ、これは大変なことになる。彼らに知られてはいけない。さあ私を丘の上に乗せてください」という。こうして峡谷を登って、山を越えて、上の方を歩き、峠を越えて、「急いでください、逃げましょう、彼らに知られてはならない。もしも知られて捕まったならば、あなたは私と一緒にいたということで大変なことになる」と、その子はこういうんだよ。そして、その子どもを枯れ草で隠して、そして上へ上へと必死になって山を越え、峠の上に出たとき、騒ぐ声が出て、たくさんのウマに乗った人びとがやってきて、そのゴンチクを捕まえて、ウマに乗せ、2本の足をくりつけて、そして丘の上にいる人びとの所に連れて行ったんだという。こうして、非常に大きな天幕の中に連れて行かれると、その中には高位の太った僧が座っている。そのゴンチクを連れてきた僧たちは一番下の方に座っていた。その僧は「さあ、例のパダルチンを捕らえて連れてきました、もう少しのところで逃げられるところでした。丘の上、山の上から見つけて来ました」と言ったんだという。その僧は「さあ、そこに座りなさい」と座らせたという。他の人びとは天幕から出て行った。そして、どこの何という者なのか、どこに行つて、何を見たのかと尋ねられた。南側に行ったことを話し、その子どもと一緒にだったことは話してはならないといわれたので、それは話さなかったんだという。すると、1ヶ月歩く場所をあなたはわがホトクトと一緒にしたね、3歳の、こういうデール、衣服をまとった、顔はこういう、と、まさにその子のことを述べたんだという。1ヶ月歩く場所をあなたは一緒に連れていました、その子どもをどうしたのか。どこに捨ててきたんだ、どこに迷わせたんだ、どうしたんだ、と。

人殺しをしたとして、ひどい目にあわせようとしたんだ。だが、バダルチンはその子が話してはならないと言ったから、話さずにいた。「私は知りません、私はそれを見たこともない、私と一緒にいったなどと、そんなことは知りません。そういうホトクト、生まれ変わり、そういう方が、私のような運に見放された人間にどうやって見えるんでしょう」と答えた。すると、「嘘をつくな、お前、お前は振り返って話し、手や指を動かしていただろう、嘘をつくんじゃない。お前はその子をどこで殺して捨ててきたんだ、どうした」といって、最後には人殺しの罪で処刑するといわれたんだ。解放しようとはしない。

こうして夜になった。ゴンチクは用を足そうとしたという。そしてこういった「さあ、私は一度外に出て用を足したいんです。こんな徒歩で何もないバダルチンがこんなたくさんのウマに乗った人びとから逃げるなどとはできないでしょう。私は服の中に用を足すようなことはしたくない、外に出て用を足してもどってきます」と。すると出る、という。こうして出たところ、例の子どもが外にやってくる。そして、「さあ、あなたは用を足して、中に戻りなさい。そして戻るときに、例の子どもがやってきたと言ってください。師の子どもがやって来たと言ってください、私は後から入ります」という。こうして少し離れた所で用を足し、戻って入ってきて、さあ、先生と言った。ああん、と言ったとき、その子どもがやってきた、入って来たと言ったゴンチクが言った。彼の後ろから子どもが入って来た、ほぼ同時に入って来たという。姿が見えたり見えなかったりそんなふうに姿を現したんだという。すると、その高位の僧がそれを見て「ああ、師匠」と飛び上がり、その子の前に言って、頭を地面にこすりつけて転がると失神してしまった。するとそのゴンチクは「さあ、みなさん、来てください、外に誰かいるならば、入ってきてください、先生が気を失っています。」すると、人びとが入って来て、そうして水などを口に含めて体をさすったりしたところ、気がついたんだらう、気がついたんだ。その子どもはその寺の本当のホトクトで、ゴビに転生したんだ。そこにいるということがわかって、探しだしてそれを認定しようとしていた人びとだったんだよ。そして彼らは経典の力で呼び起こそうとしたんだ、狼が走って来てその聖なるヒツジをとった理由は、その力が遣わしたものだらうと私は考えているんだよ、そうだらう。それを遣わして、そこから追い出させる口実を作ったんだよ。そして、こちらにやって来て、その寺の僧たちと出会わせただよ。なんてすばらしい巡り合わせだらうか。こうやって見つけて連れていき、認定したんだよ。そして認定するときにはそのゴンチクは右腕として、高位の僧になった、このホトクト・ツェレンヴァーンチクのね。そしてどうしたかという、ゴンチクはその3回の出来事について尋ねたいと思っていたんだよ。そして尋ねると、さあ、お前と私の2人が最初に会った所で、木で火を起こそうとしたのにそれをやめさせた理由。それは地に住む主の目をつぶそうとしていたということなんだよ。第1番目はそうい

うことだった。そして第2番目にある石にであって、それを取ろうとしたのをやめさせたのはなぜか。ああ、それは地下世界の堂塔の屋根を蹴っ飛ばそうとしていたからだよ。それで私はやめさせたんだよ。さあ3番目は、ある家にはいつて鶏の肉を焼いていた。犬が入って来てこうしていたのはどういう理由だったのか。その鶏というのはその家の子どもだったんだよ。以前子どもが妖術によっていなくなってしまった、鶏にされていた、その子どもを捕まえて食べようと、焼いて食べようとして殺して焼いていたんだ。それでその犬はというとその(焼いていた)女性の母親だったんだよ。そして母が実の子どもの肉を食べようとしていると知って、取って逃げようとしているときに、母親の足を強打して折ってしまったんだよ。そんな家に私たち2人はいいわけがないだろう。こういうことだったんだ。

こうしてみると、ラヴジャーはこの5世以後、常に自ら明らかにさせて、こうやって明らかになっていたんだよ。そして、この6世は、このツェレンヴァーンチクというのはこのようにして認定されたんだ。そして7世はというと、この前の方がこのように認定されたことから、わが故郷に生まれ、ウルシュー・バクシ、ソノムツェレンという名前で転生したんだ。そういうことなんだと私は考えているんだよ。そしてそれを研究しようとしたが、今年はできなかった。来年、ハマル寺に行く。ハマル寺に行ってね、テムチク寺に行く。このハマル寺、テムチク寺に行ったら、必ずこれらの証拠が見つかる、私はそう思っているんだ。

D: ああ、5世のノヨン・ホトクト?

B: 5世はボグド、清朝が消し去ってしまったんだ。5世の書かれた書を私はもっているよ。なぜこのように移動することになったのかというと、わがこのエルデネゾーに原因があるんだよ、それはね、移動する理由は。これはというとこのオメイン谷のボーヴの石、ああその上にオムの字〔チベット仏教でもっともよく唱えられている真言のオム・マニ・ペメ・フムの最初の言葉〕、その黒い頭部にこれらを作らせた人なんだよ、このラヴジャーは、5世だったときにね。そしてトゥヴフンの寺に行った。トゥヴフンに行っって13日、14日だろうか、半月くらいだろうか、ご病気になってそこで過ごしているときに、その女性器の形をした物、そのトゥヴフンの峠の上にある仏、ダル・エヘの木、その最初のホトクトが作られていたすべての物を見て行く間に、「ウレムジーン・チャナル」の歌がひらめいたんだという。ロヴサンダンザンという僧、4人の女性と一緒に6人でやってきたんだ、うちのこのエルデネゾー寺院に。やってきて、そこから108の姿のツァムを踊らせて、最初のダンシク・ナーダムを行わせて、側対歩のウマの競馬をさせていたんだ、今そこに記念石がある、競馬を行った場所にね。ここで、モンゴルでダンシク・ナーダムというものは最初ダンザンラヴジャーが始めさせ、それ以後ダンシク・ナーダム、今のハラホリンで4年に1度、競馬が行われているんだよ。これはこういう起源があるものだよ。ダンザンラヴジャーはこうして、

「ウレムジーン・チャナル」という歌は、そこから最初できたものなんだよ。そしてその4人の女性はというと、みんな妻ではなく、女性の僧、修道女たちだったんだ。〔ダンザンラヴジャーは〕その「ウレムジーン・チャナル」をひらめき、僧の葡萄酒、アイラグの入った大きな容器を〔不思議な力で〕置かせる、そういう人だったんだというよ。酒を飲む、だがそれで酔っぱらうということはない。なぜかという、それを聖水に変える、そういう力をもったそういうホトクトだったんだよ。そうして8代ボグドハーンというと、聖水を変化させる、アルヒを変化させて聖水にする、そういう力はなかったんだ。そういう点で負けていたんだ、そしてそれがもとになって、お互いに険悪になり、憎み合う仲となったことから、5世のときに清朝皇帝と一緒にあって、罪を被せたんだ。

そして、ここからこうやってトゥヅフに行って、トゥヅフからホジルトに行ったんだよ。ホジルトに行って、ホジルトからバルジドマーという女性を、本当の心の連れ合いとして得て、このホジルトからバルジドマーという女性を連れてきたんだよ。後になって、8世ボグドハーンの時代に、年寄りのくせに若い女を連れ込んでいるのだ、酔っぱらいだの、狂人だのと、いろいろなあだながつけられているとき、そのバルジドマーをダ・フレー（首都）に行かせようとしたところ、〔ボグドハーンは〕入らせない、トーラ川の岸辺から故郷へと戻らせたんだというよ。そのバルジドマーに捧げる歌が最近出ただろう。最近出たんだよ。つまりこれは全部本当のことなんだよ。そしてその先、ウブルハンガイから先へ行き、タラクトへと入った。フレムトにはいり、フレムトからドンドゴビに行き、こうしてドンドゴビのオンギ寺に行って、そこから故郷へ戻ろうとしているときに、本当に不浄になってしまったんだよ。そのバルジドマーを連れてきた、このことからおこったのだろうか、私の推測だよ、誰にもわからないんだから。なぜそんな力のある人が突然不浄になるのか、とても不思議なことだろう。そしてアルヒを飲むと酔っぱらうようになり、随行していた僧ロヴサンダンザンを刺してしまったんだよ。ロヴサンダンザンはなくなってしまった。このことについては2人の研究者が2通りのことを書いている。ダムディンスレン氏の書いたのは、わがこのエルデネゾーが6年間、干害になり、ネズミに食い荒らされ、7世の座主ダグヴァダルジャーの時代には経典の上をネズミが走り回っていたというんだ。その南側のシャル・ホンホル（黄色い窪地という意味の地名）では女性の病気、はしかが発生して、多くの女性たちが出産できなくなった、子どもが早世してしまうという恐ろしい災難が起こった。そこで8世ボグドハーンがやってきて、これを、ボーヴ石を作り、そこにオムの字を置き、8世ボグドハーンがこれをおこなわせたんだという。だが、そのネズミはいなくならず、災難も取まらない、こうしてどうしようもなくなったときに、ダンザンラヴジャーを招いたんだ。ダンザンラヴジャーはここにやってきて108のツァムを踊らせ、ナーダムを行わせ、雨を降らせて、ああ、そのウルシュー・

バクシが捕まったときの水害のようになった。そしてすべてのネズミが水に流されて、いなくなってしまった。こうしていい時代がまた戻って来たんだよ。こうやって戻る時、そこでそのように不浄になって酔っぱらい、横にいた僧を殺したとアルタンゲレルは書いているんだ。そのラヴジャーの研究者。ああ、ダムディンスレン氏はというと、その災害について、褐色のウマ、茶色いウマに乗った人がエルデネゾーの横を通っていた。おお、このエルデネゾーの中には魔物がいる、これを捕まえて消すようにと横を歩いていた僧ロヴサンダンザンに命令し、ロヴサンダンザンはそれを捕まえてオスウシにつき殺させたという。そのオスウシにつき殺させるとはどんなことだったんだろうねえ。そのことから刀で突き殺したと、それを8世ボグドハーンは、ラヴジャーは退廃した、乱れた、経典を忘れたとって、このように人を殺したと、清朝皇帝に進言したところ、その時代というのは首を切って処刑することなどはなく、砂地で手足を引っばって縛り付け、ゴビで手足を延ばさせて縛り付けて、そこに鷺などがやってきて生きたまま内蔵をえぐり、そうやって渴き死なせたのだというよ。

D：ホトクトの寺院というのは今のどの県、どの郡にあるのですか？

B：うちのかい？ うちのホトクトの寺かい？ ボグド郡だ。

D：ウブルハンガイの？

B：そう、ウブルハンガイのボグド郡。おととしの夏、テムチク寺から大勢の僧たちがやってきたんだ、テムチク寺というのはバヤンホンゴルの。ウムヌゴビのハンホンゴルだったか、ハンボグドだったか、そこにあるんだよ。そこから12人の僧が来たというよ。やってきてそこで儀式をおこない、灯明などを灯した。ハタグを置いてね、ウルシュー・バクシのゲルの跡で行ったんだよ。その本堂でそうしたんだよ。こうやってみると、やはりこのラヴジャーの後の生まれ変わりなんだとこう私は考えているんだよ。

D：ノヨン・ホトクトであって、その後ツェレンヴァーンチクになって、ウルシュー・バクシ？

B：するとこの6世はというとテムチク寺で認定されたんだろう。7世はというとうちのこの、7、8世はここで認定されたのだろうと私はこのように推測しているんだ、私のような推測好きはね。だからこのテムチク寺に行ってみたいものだよ。ああ、ハマル寺にも行きたいというのは、そのことを確証したいからだよ、ハマル寺にはバートルなど、アルタンゲレルなど、私の知り合いの人びとがいるからね、そのフレルバートルさんに、彼らと会って、この歴史家と話して、こうやって研究してみたら、いろいろなことが出てくるだろう。私が行くことだけが残されているよ。だがね、行くとするといつも自費になるんだよ、年金の9万2400トゥグルグをもらっているにすぎず、できもしないのに本などを創作していたりしているからね、趣味だよ、私の趣味だからね、まあ仕方ない。人の脳の中にあるものは自ら取り出さないと、死んだら終わっ

てしまうものだから。あるものをこうやって本にして残すことは、後の世代にもとても必要だからね、こういうことなんだ。私はこう考えているんだよ。そうだろう。そうして、こうやっていろいろなことをしている者なんだよ。さあ、こんなところだろうか。

D：ありがとうございました。

Ⅲ ボルジゴンさん

父の名はデムベレル。1941年、ハラホリン生まれ。現在は1,000頭以上の家畜を所有する、裕福な遊牧民。2009年12月のインタビュー時点で68歳。社会主義時代、小麦粉工場の溶接工や国营農場で家畜放牧を担当していた。インタビューの内容は、小学校、軍隊を経て溶接工となり、民主化後に成功している人生全般にわたる。インタビュー時間は約3時間。

B：ボルジゴン

D：ルハグワテムチグ

1 幼少期

D：では、あなたのお名前は何とおっしゃるんですか？ どの出身ですか？

B：私はもともとこの地域の者だよ。もともとここにはシャンハというソム（郡）があったんだ。その地域の者だ。このあたり、この家の近く、10、20キロメートルの範囲の中で生まれ育った者だよ。私はボルジゴンという。

D：何年生まれですか？

B：1941年。

D：それではちょうど戦争が終わったころ。

B：戦争が始まったころだよ。第2次世界大戦が始まったころに生まれたといえるね。

D：そうですね。あなたの生まれた場所はこの辺りなんですか？

B：そうだよ。ずっとハラホリンの周囲に、こうやってうちのソムというのは本当にこのあたり、ここなんだよ。

D：そして、小さいころ過ごされたんですね。ご兄弟はたくさんですか？

B：兄弟はというと、本当の兄弟の中で1人は小さいころに亡くなったんだというよ。いや、2、3人なのかもしれない。とにかく、3人、4人兄弟だったんだけれども、1人の弟（もしくは妹）が1959年に1年生が終わったときに亡くなってしまった。そのあとは3人兄弟になった。うちの2人の妹たちはウランバートルにいるよ、そして私はここに暮らしている。

D：あなたのご両親はどの地方の出身ですか？

B：この土地の者だよ、もともとこの者だ。

D：それでは、あなたは小学校というこのあたりの学校に通ったんですか？

B：そうだよ、この小学校に通った。1949年に入学して、そして53年に小学校を卒業して、そして私は祖父母のところで育ったんだよ。その後、祖父母はかなり高齢になってしまった。70歳を越えただろうか、70歳にはならなかっただろうか、今の私くら

いの年齢にはなっていたらうよ。そういう年齢の人たちだったんだ。2人は私を自分たちの元から行かせたくなく、私はというところに行こうとしていた。そして祖母がちょうどその学校が始まる時に「モゴイトの温泉」に、温泉の水を飲む治療に行ったんだ、14日間行ってしまったんだ、家畜を連れてラクダでね。そのあいだに走って行って、学校に登録をしたんだよ。そして、戻ってきて、8月25日に登録して、学校に通うことしていたんだけど、祖母が帰ってこない。「お祖母さんが帰ってこないならば、おまえは行ってはならない」と禁止されてしまった。そうこうしているうちに9月の何日かになってしまった。こうやって私は学校をやめたんだよ、行き遅れたことから学校を辞めることになったんだ。

D：小学校というのは何年生まででしたか？ 当時は？

B：4年生までだよ。4年生まで学んで、4年生卒という学歴になるんだ。

D：そして、ソム中心地にやってきて、その学校に入るんですか？

B：そうだよ。ここの南シャンハの中心地、このあたりの定住地のシャンハ・ソムというのがね、南のシャンハというところに学校があったんだよ、うちのソムには。その寺院というのはソムの中心地にあった、かなり多くの家々もあったよ。それから私が学校にいたときは、アルテリ（手工業生産組合）という1つの組織があった。一般に主な公的機関というとそのアルテリというものだったよ。そして、そのアルテリは、以前シャンハ寺院にいた僧侶たちに仕事を与えたんだ。そこではいろいろな鉄を使った製品を作る、木工品を作り、靴を作る。モンゴル靴、鞍褥、そしてだいたい日用品なんかを多く作っていたんだよ、アルテリというのはね。一般に国内の生産、今現在わが国で話されているところの、中小の生産工場という、それにあたるよ。物入れの大箱や容器、ゲルの木製部品、フェルトも作る。そういう組織だったんだよ。その後、それを、ああしたんだ、ホジルト・ソムに移転させ、向こう側の「岩のアルテリ」というのと、それとうちのシャンハ・アルテリを統合して拡大させて、そして移転して行ってしまった。でも、そのあともこのソムはまだそのままあったんだよ。そして、56年にこのハラホリン国営農場が設立されて、そして2年たったころだっただろうか。シャンハ・ソムを閉鎖して、ハラホリン国営農場に統合したんだ。こうしてハラホリン・ソムになったんだよ。そういうことだった。そのころ、私たちはまだ小さかった。私は国営農場が設立される時には15歳だった。両親2人の庇護の下にあったよ。両親はもともと田舎で家畜を飼っていた遊牧民だったから、ネグデルの家畜を放牧して、その後は国営農場の家畜を放牧していたんだよ。私はその両親と一緒に暮らしていて、かなり大きくなって兵役に就くことになって、軍隊に行ったんだよ。ウランバートルで第7建設大隊というのがあった、後になって肉・小麦コンビナートの拡張部を建設したんだ。小麦コンビナートのこちら側の一部分があるだろう、その24番の、それを私たちが作ったんだよ。そして肉コンビナートの拡張もまた同時に行っていた、そ

こでも働いたよ。そして、除隊になる前、自動車修理工場で3ヶ月働いて、そして7月に除隊になった。除隊して戻ってきて、ここの、ハラホリンの小麦工場があるだろう、今はもう残骸だけになっている。そこにやってきて働いたんだ。故郷に幸運にも求人があって、その時代というのは選択肢はないからね。軍隊を出たとき、ちょうどその時期だったんだよ。除隊になる若者たちはみんな建築現場で働いていた。とてもたくさんの若者が兵役に就いていたんだ。そして、その建築現場にいた若者たちはそのまま建築業に残る、そういう傾向だったようだ。そして、あちらこちらの建築分野へと就職していたんだ。工場や生産業へと就職していた。そうしていると、主にハラホリン出身の若者たちを募集していると、ここからも人材が送られていったという、私は知らないけどね。ハラホリンというだけで大喜びで故郷へと向かうことになったんだよ。そしてここに戻ってきて、ハラホリンの小麦工場で20何年、22、23年働いたんだよ。こうしてそれで、ああ、そうだ、後になって88年から始まって、工場の補助産業の家畜を担当することになって。まあ工場で働くようなもんだよ、そうだろう。自分もまた両親がね、母は高齢になって、父は亡くなってしまった。こうして何頭かの家畜を見る者もない。こうして工場で働いているのもよくないと思って、母親の傍にしようかとね、家畜を放牧しながらね。こうして田舎に出て、そしてそれ以後、家畜を放牧して、20年くらいになるよ。88年以後。まあねえ、家畜は50頭ほどの小型家畜がいたよ、20頭くらいのウシ、20頭くらいのウマがあったよ、両親の残した家畜。それらを合わせて放牧をしていて、その後補助産業の家畜がなくなり、今は個人の家畜だけが残っているよ。今も飼っているよ、88年からね。去年だか、おとしだか、1,000頭家畜を所有する遊牧民という称号を持ってね。

D：おお、1,000頭。

B：こうして生きているよ。今もね、力や何やは少し衰えてきて、行き渡らなくなっているから、子供たちを頼って生きる以外に私たち2人に何もできはしないからね。子どもたちがソムの中心地にいるのに、私たち2人が家畜のいる田舎に残っていても仕方ないだろう。私たち2人をソム中心地で暮らすようにいうんだよ。そういうわけで、ここに暮らしているんだよ。

D：小さいころ、小学校で学んでいるときは寮に暮らしていたんですか？

B：寮で暮らしていた。知人や親戚がいるならば、その家で暮らすよ。私たちは寮でね。1年、最初の年はおじいさんがいたんだ、私の祖父の弟。そのおじいさんのところに4、5人が下宿していた。そして次の年には、少しいろいろわかってくるようになったから、学校に暮らしてもいいと、できると思ったんだろう、こうして寮に入ったんだよ。3年間寮で暮らしたよ、まあ人の下になることもなく、それで成績も優を取ったりしてね、そういう生徒だったよ。もしもその後いろんな学校に行ったら、何かを得たと思うよ。まあ仕方ないよ、こうやって学校を卒業して…。

D：そのころ、子どもたちは、この辺りの子どもたちを集めて、学校に通わせていたんでしょうか、どこからやって来ていたんですか、子どもたちは？

B：シャンハにかい？

D：ええ。

B：おお、当然そうしていたよ。そのソムの就学年齢のすべての子どもをね。そして、一部はまた学校から逃げるんだよ。

D：映画に描かれているように？

B：映画に出ているように。それは本当の生活なんだよ。そして、逃げ出してしまう、先生は後から追いかける。例のウルトゥ（ウマの乗り継ぎ駅）のウマに乗って行くんだよ。そして回って行って追いかけて、追いかけて、見つけてくるんだ。一部は逃げおおせる。私はそうやって逃げ出したりはしなかったよ。許可を得て休んで家に戻って、そのまま2、3日過ぎてしまうことはあったけれどね。

D：何歳の子どもたちを最初、学校に入学させていたんですか、そのころは？

B：8歳で入学させる。そして12歳で4年生を卒業する。うちのこのあたりでは、中学がないんだよ、ホジルトにはある。大体私たちがそこに通っているときは、7年生までだったよ。そして、そのあとまもなく10年生になったと思う。そこへうちのソムの者たちは行くんだよ、故郷や家から遠くに行くことになる。人びとは、草原で〔集落から〕少し遠く離れて暮らしているから、いったいどこに学校があるものかと、子どもを学校に通わせるのを好まなかった。田舎に連れて出て、子どもに仕事を手伝わせるという、そういう考えがより強かったのかもしれないよ。だから、一般に、シャンハからは、私の世代から、私のクラスからは、多くの子どもたちが次の学校には行かなかった、2、3人の子どもが行ったんだよ。そして他はというとみんな草原に出ってしまったよ、男女関係なくね。

D：その時代、先生たちはどこから、都会からやってきた人だったんですか？ それとも地方出身の人だったんですか？ 先生たちは。

B：ああ、だいたい私よりも少し上の世代の先生は、地方出身の人たちだったといわれているよ。私が通っているころはというと、だいたいはウランバートルからやってきた人たちだっただろう。このホジルトからもやってきて、先生になっていたようだよ。ホジルトは中学があったから、7年生を卒業した生徒で優秀な者を先生にしていたんだよ。そういう子どもたちなどがやってきていた。私が4年生を卒業するときには、ズーンバヤン・オラーン出身の1人の若者が教鞭をとっていた。彼は10年生を卒業して、教師になろうとしていたけれども、遅れてしまったとか、何か支障があったらしく、ここにやって来たんだと、そういう背の高い若者が来て、先生になっていたんだ。その人の前には1人のオプス出身の背の低い色の白い先生がいた。師範学校を卒業したらしかったよ、ウランバートルからやってきていた。そして、その人はまもなく半

年だっただろうか、1年にならないうちだったよ。秋にやって来て10月の末、11月になるかならないか。アイマグの中心地に移動してしまったんだ。人員が減らされたとか何とかかだったんだろうか、アイマグから私たちに手紙を書いてくれてね、私たちはその先生がとても好きだったんだよ。最初はとても厳しくて、怖い感じだった、私たちは4年生だったんだよ、とても厳格なようだったと思い出されるよ、でも慣れてしまうと本当にいい人だったんだ。それで、行かせないってね、私たち子どもたちは周りに群がってつきまとして行かせないってね、そうしていたんだ。その人は人の心をつかむ、人を惹きつけるそういう人だったように思うんだよ。でも、そうして行ってしまったんだよ。今ではどこに行ってしまったのかわからないよ。

D：若い人だったんですか？

B：若いよ。卒業したてで、21、22歳だろうか、そう20歳だっただろうか。15、16歳で8年生を卒業して、大学に行っただろうと思えばね、そうだろう。そのくらいだろうと今では想像しているんだ。そういう人だった、こうして行ってしまった。その後、ホジルトからまた違う人が来て先生をしていた。ホジルトからだいたいやってくるものだったよ。ホジルトは10年制の学校があったからね。一部はまた師範学校に進んでいただろう。うちのソムにはそういう者はいない、やっと3年に1人くらい7年生を卒業してくる、それはとても珍しい、そういうものだったよ。

D：だいたい何人くらいの先生がいたんですか、そのころ？

B：シャンハの小学校には4、5人の先生だよ。4学年に1人ずつの先生、そして時には1つの学年に2クラスなどがあった、そして校長先生が1人、5、6人それ以上はいないよ。

D：4クラス？

B：4クラスそして…。

D：1つのクラスにだいたい何人の生徒がいますか？

B：まあねえ30人くらいの子どもたち。

D：おお、結構いますね。

B：かなり多いよ。そして学年が進んでいくうちにやめたりして、4年生を卒業するころには20人くらいの子どもが卒業する、そういうものだっただろう。

D：男女は？

B：男女はだいたい人数において同じくらいだったよ、特にどっちが多い少ないと違いがわかるようなものではなかったね。

D：男女が同じクラスで一緒に勉強しますか、それとも女の子たちだけのクラスがあったんですか？

B：いいや違うよ。そんな余裕はなかったよ。私が学校で勉強しているときは、うちのクラスは朝早く授業が始まっていたよ、早い授業。そして後になって、また小さな校

舎やなんかが作られたんだ。そしてみんな一緒に次の年からは建物に入ったんだよ。

D：寮では男の子、女の子一緒に暮らすんですか？

B：違う、違う。寮は男女別々だよ。それぞれ1つずつのゲルに暮らすんだ。

D：ゲルに？

B：そうだよ、ゲルに暮らすんだ。そして、ゲルには火をつけたり管理したりする人がいる。そして、その管理人が2、3つのゲルの竈に火をつける、深夜には暖めるために薪をくべて、そしてアイマグの…それはというと暖炉がある。その暖炉に薪を入れて、そして火をおこしているんだよ。

D：1つのゲルに何人の子どもたちがいますか？

B：10人以上、10人を越えるくらいの子どもたちがいたかなあ、当時は。ゲルの中で円になってベッドを置いていたんだよ。私が寮に入るとき、そのときには建物になっていてね、建物になってよりよく学ぶことができたと思うよ。建物の寮に私たちを住まわせていたんだよ。私が1年生に入るときは寮はゲルだった、そして、寮のゲルの中のベッドに座って勉強をする、ベッドの上に座って丸まって座って勉強しているんだ。

D：へええ。

B：ベッドの上では反対を向いて書いていて、振り返って黒板の方を向いてね、そういうものだったよ。1年生のときは。

D：学校もゲルで。

B：そう。クラスもゲル。1年生では、1つのゲルに入りきれなかったよ。そして、2年生に入るときにみんな一緒に建物の校舎に入ったんだよ。寮までも建物になった。そういうことになったんだよ。今となっては建物をどうやって作ったのかということとはよくわからないよ。とにかく建物が作られて、完成していたんだよ。

D：そのときにはモンゴル文字（ウイグル式縦文字）で授業をしていたんですか？ キリル文字ですか？

B：いいや、49年というとキリルになってしまっていた。キリルで授業をするよ。4年生で少しモンゴル文字を教えていたようだよ。そして、私が4年生を卒業するときには、それを教えるのをやめたんだよ。その年は教えなかったんだらう。削られたのかもしれないね。

D：モンゴル文字を？

B：そう。

D：ああ、それでは、そのときには完全にキリルで教えるようになっていたんですね。

B：そう、キリルで教えることが完全に始まっていたんだ。60何年にはとにかくキリルで教えるようになったんだらう、よくわからないよ。その前の時代にはモンゴル文字で教えていたんだらう。7、8歳年上の人たちはモンゴル文字を知っているんだよ。ということは1、2年前からキリルを教えたんだらう。

- D：当時、子どもたちを学校にやるのが、かなり嫌だったようですね、親たちは？
- B：うちのこの辺りはかなり嫌がっていたね。その他の場所がどうだったかは知らないよ。
- D：知り合いの兄も話していました、嫌がっていたとね。
- B：それは家の仕事を手伝わせようとしてね、一番大きな理由はというと。例のネグデルなんかはまだ作られていなくて、そして個人の家畜を持っている。子どもたちをその働き手にしようといっていたんだらう、もっとも大きな理由はそれだよ。
- D：その当時は、どんな授業があったんですか？
- B：4年生まではというと、まあねえ。歴史、地理がある。算数、モンゴル語、文学そういう感じの授業を受けていたよ。地理の授業の中で、世界についての授業というのがあったことを覚えているよ。それ以外には何があったかな。他にもいくつかの授業があったんだ。体育もあった。自転車に乗るという授業もあったね。
- D：モンゴル語、文学というと、だいたいどんな授業だったんでしょうか？
- B：モンゴル語、文学はだいたいあれだよ、物語・伝説とか、そしてその当時というのは今のようにそれほどモンゴル国の作家の作品というのはあまりなかったんだよ。だからそういう物語や伝説、なぞなぞやなんか、そういうようなものを習っていたと思うよ。ああ、今思い出すと、ときどき、教科書にタウヴァーという作家の何だっけ、バーストという作家の作品とか、そういうとても短い子ども用の文章など、そういうものがあったように思うよ。作者の名前や何かが文章の上に書いてあるんだ。こういう人が書いたとかは私にもわかったよ。わかる子どもたちは理解していた。でも、子どもたち全員が、すべてを理解していたかどうかはわからないね。とにかく、先生が質問するときに、真っ先に答えるのはそれで、そういうものが書いてあったね。
- D：その時代、例のスカーフなんかをつけていたんですか？
- B：ああ、もちろんつけていたよ。スカーフをつける。青いダーリムバ（綿）のデールを着るんだよ、男の子は。女の子は、そう緑のデールを着る。いわゆる制服だよ。そしてダーリムバで作ったかばんを背負って、本をそこに詰め込んでもっていくんだよ。
- D：男の子はどんな色のデールを着ますか？
- B：青のダーリムバ。女の子は緑。
- D：ああ、別なんですね。デールや何かは両親が用意してくれるんですか？
- B：そう。そのあそこからは出してくれるものはないよ、シャンハ（郡）から出してくれるものはない。両親が作ってくれるんだ。
- D：食事はどうしていたんですか、両親が用意してくれるんですか、それとも国から？
- B：ああ、食事はくれる。両親から食料をもらう。肉や何かを持ってきていたんだ。一般的に肉をもらうよ。寮の子どもたちの食事とって。小麦粉や麦はどうしていたんだらうか、よくわからない。とにかく肉はもらっていた。それ以外に国からどんな方

策が取られていたのかはわからないね。お金に関してどういうやり方をしていたのかもよくわからない。お金や小麦粉、米なんかをくれていたのだろうか、それともただ小麦粉、米を支給していたのか。それらは今ではわからないよ。

D：1日に3回、食事をくれますか、どうでしたか？

B：くれるよ。朝はお茶、昼は1品食事が出る。夜も何かしらの食事を食べるよ。

D：そしてその食事というのは、どんなものだったんでしょうか、その時代？ 朝食、昼食というと。

B：朝食にはマントウが1つ付いたか何かだったよ。だいたいマントウや何かだね。パンなどというものはなかっただろう。そして米とか。肉の食事としてはあれだよ、ゆでた肉がよく出たよ。キャベツやジャガイモの入った食事もある。キャベツは食べられなかった。ジャガイモは食べるよ。キャベツを残していたよ、子どもたちは、そうやっていたんだよ。1人の少し年配の料理人が作っていたんだけど、キャベツなんかをどうやっていたのか…料理できなかったんだろうと思うよ。だから、野菜を分厚く粗く切ってあって、子どもたちは固くて食べることができなかった。それを残して…。

D：スープの食事はありますか、それとも炒めた料理ですか？

B：スープのあるものだよ。だいたい炒め物なんかは食べないものだろう。寮にかなり多くの子どもたちがいただろう、40、50人くらいの子どもたちがいた。炒め物や何かが出ることは…時にはあっただろうけれど。そのシャンハの、今ある3つの寺院の建物のこちら側に1つ2つ小さいのがあった。その1つが子どもたちの、子どもたちの食事を作る台所になる場所だったんだよ。その南側の平らなところが校舎などだった。そして、そこから行列して戻ってきては食事をして、そしてまた行列して戻っていく。そういう感じだったよ。

D：あなたは学校に入る前に、キャベツやジャガイモを食べたことがありましたか？

B：まったく食べたことがなかったよ。ジャガイモというのがあるらしいというくらいだよ。うちでは伯父と祖母と私の4人が1つのゲルで暮らしていた。その伯父さんが何個かのジャガイモを持ってきていたように思うよ。だけど、どうやって食事を作るのかわからない。食事に入ると悪くないものだと人びとがいうんだってね。そこのアルテリではジャガイモを栽培していたんだ。そのアルテリのジャガイモを持ってきていたんだろう。アルテリはまた少し野菜を栽培していた。1ヘクタールに少し足りないくらいだっただろう。うちのこの柵の大きさくらいの、四角形の場所で野菜を作って、キャベツやジャガイモなんかを栽培していた。そこには中国人が…いたのかもしれないね、今思うと。中国人、モンゴル人、またカザフや何かのいたんだ。昔ここに住み着いた昔からの中国人が10人くらいいたんだろう。土地を耕すことや何かとって、学校の子どもたちを集めるんだよ。今思うと、生徒たちに施しをしようと考えた人だったんだろう。ナムスライさんといって、1人の老人が1人1人の子ど

もに1つずつのイエベン（月餅），かなり大きいんだよ，このくらいのイエベンをくれる。こうやって並んでいて，こうやって分けてくれる，そうやっていたよ。少し仕事をしたその駄賃としてね，その人にとっては徳を積むということだったんだろうね，そうだろう。このイエベンをもらうのがうれしくてね，またそこに行って働くんだよ。

D：ナムスライさんという人は中国人ですか？ モンゴル人ですか？

B：彼はずっとアルテリで働いていた労働者だよ。そのアルテリから出たことがない。そのイエベンは…。

D：あなた方はどんな仕事をしていたんですか？

B：ああ，それはまあねえ。一番大変な仕事にはみんな行かないんだよ，春に畑を耕作する，シャベルで掘り返して根っこや何かを取り除いて，捨てていたんだよ，石を拾っていたんだ。そのくらいのことだよ，私たちの仕事というのは。

D：寮の食事で子どもたちは満腹になりましたか，少し足りないくらいだったんでしょうか。あなたはどうでしたか？

B：だいたい，そうだねときどきは空腹だったね。でも大丈夫なときもある。そして，ソムの中心地に知り合いの家などに寄るんだよ。立ち寄ると，ときどきエーズギー（加熱凝固チーズ）などをくれる，少しアーロール（酸凝固チーズ）もくれる，1つ2つポールツォク（揚げ菓子）もくれる。それをすばやくつまんで，そして行くんだよ。でもいつも尋ねるわけじゃないよ。ときどきそういうことがある，そういう生活だったよ。

D：授業は朝始まりますか，午後から始まりますか。何時から何時まで，どんなふう授業がおこなわれていたんですか？

B：朝9時に始まるよ，そのころはかなり長い時間授業があったんだよ，4時くらいまで授業があった。

D：そうですか，長いですね。

B：そうだね。今思うと，そのシャンハの下の方に「下のセンター」というのがあったんだ。それは本物のバロン・フレ（西の寺院）だというよ。そこには多くの家があり，そして，子どもたちの大部分がそこからやってくる。朝薄暗い中，やってくるんだよ，上の方に向かって，騒ぎながらかたまってね。夕方になって太陽が沈んだころに帰って行ったように思うよ。そうすると，5時近くになっていたに違いないよ，戻るときには。子どもたちだから，道草をして，遊んだり，相撲を取ったり，とてもゆっくり歩いていくに違いないからねえ，彼らは。

D：黒板というと，こういう足のついた黒板でしたか？

B：いいや，違うよ。壁に取り付けた，この写真のようなこういう大きさの黒い色の黒板があったんだ。壁にかかっている。

D：北側の部分ですか，どの部分にですか？

B：どこということではなく、ある片側に向けられている、建物だから、どこにあっても関係ないよ。その光の加減や何かを先生が考えてつけていたんだろう。

D：ゲルではあなた方はこうやって、例のベッドの上に座って？

B：そうだよ、ベッドの上に座って、黒板は北側に。そして、両側からこうやって円になって座っていた、こうやって黒板のほうを見るんだよ。

D：先生はチョークで？

B：先生はチョークで書く。

D：あなた方はノートや紙の、そのころノートや鉛筆というのは十分だったんでしょうか、その時代？

B：そうだね、それほどあふれかえっているというほど十分ではなかっただろうよ。私たちの時代は、でもそれほどいろいろなものを書いてはいないんだよ。新聞の端とかいろいろな印刷物の上に書いていたということがいわれている。私たちはそれほどではなかったよ。だいたいノートや本、紙を与えてくれていた。買っていたということはいくぶん知らないね。先生がくれていたんだろう。そしてノートの上に書く。ペンや鉛筆で、1年生のときは鉛筆で書く。2年生からはインクのペンで書く。インクはこういう液の入った容器、円錐形で下側も丸くなっていて、内側にくぼみのあるガラス容器を見たことがあるかい？ あなた方は？

D：さあ、よく知らないです。

B：そして、こういう丸い、こういう今ここにあるとすると、こうやって下側にこのくらいまでの円錐形で、くぼみがあって、そして、ペン先だけが入るくらい隙間が1つ開いている。そして、それにインクを入れるんだ。それというのは、斜めにしたとしても円錐のあいだからインクがたくさん出てなくなることはない、ひどく左右に振ったりしない限りね。うまくこうやってまわして置くと、その円錐がぐるぐる回るものだった。そういう目的のものだったんだろう。落ちたとしても起き上がって、ほとんどインクが出ることがない。そういう容器があった、そしてそれを布の袋に入れて、こういう取っ手のついた。そして、それを持って登校する。そしてそのインクが終わると、先生がまた袋に入ったインク入れを持っていて、そこから私たちの容器に入れてくれる。そしてまたそれが終わる…。後になって、インクつきの鉛筆というのがあった。それは例の紫色の水に溶かすと、紫色のインクになる。例のインクの紫というだろう、そういうインクになった。そして、それをまたそれぞれが折れたのや何かをくれと頼むし、削る。削ってつくるものだった、そういう感じだったんだよ。

D：そのころ、成績をつけるときは、今の優や不可というような、5や3というようなそんなつけ方をしていましたか？

B：そうだよ。そういう成績だった。5、4、3、2というような。

D：その当時というのは、子どもたちは、年長の人たちが話すとき、年上の人たちをと

でも怖がっていたと聞きました。そうだったんですか、当時は？

B：おお、もちろんそうだよ。そして一般に従順な態度であるように見えることに努力するんだよ。年長の人たちがいるときというのはだいたい大丈夫なんだよ。その視線が外れるとふざけたり、もみあったり、いろいろなことをするんだよ。そりゃあねえ、子どもだからふざけないわけがない。でも、年長者を怖がっていたよ。だいたい年長者は少し行儀の悪い子どもたちをしかりつけるんだ。人の子も自分の子もない「おまえはなんていたずらなんだ！何をしているんだ？ こうするものなのかい。こうしてはならない」というようにいろいろなしつけの言葉…そういうことから恐れるんだよ。子どもだからね、怖がって当然だよ。すべての人がだめだというんだから、子どももね。人がみんなだめだというんだから、子どもであっても、またこれはだめなんだなということを理解するだろうよ、普通。そうだから、子どもたちや若者たちの教育というのはだいたい1つの状態、水準だったよ。人にあつたら挨拶をきちんとする、礼儀正しく社会で生きていく、そういうことを学ぶだろう、学んでいたんだよ。それは、だいたいはいいいことだよ。過剰に教育されて、ありがとうやごめんなさい、というような言葉はないけれども、ちゃんと社会で生きることができたんだから。

D：だいたい、そのごめんなさい、ありがとう、というのはロシアから入ってきたようですね。

B：ああ、外国から入ってきたものだろう。もちろん、うれしい場合にはまた *gyalailaa* (満足ですの意味) とか何かいっていたようだね。

D：ありがとうというのは、最近になっての言葉かもしれませんね、満足ですと昔はいついたんですか？

B：そうだね、満足ですといついたんだろう。満足ですとね、他にはええと何だったっけ。まあよくなりました、よくなりましたなんていうことをいついたんだろう。それというのは、喜んだことを記念する、喜んだことを表明していたんだろうね。また他に *bashiij* という語句がある。そこにはこうしたことを *bashiigaad* (喜んだ) といって、*bashiilaa daa* とか何とかね。それを私はスパシーバという言葉から派生した言葉ではないと考えている。そのように派生して、*basiiba* になって *bashiiba* になって *bashiilaa* になって。

D：あなたの世代ではロシア語を勉強していたんですか、小学校のときに？

B：小学校では習わないよ。中学で勉強する。

D：ロシア人はいたんですか、この辺りに？

B：いや、いないよ。一般的にいないねえ、いなかったよ。でも地図を作る人たちがいたようだよ。ときどきロシア人かなんか鼻の高い人がウマに乗ってね、長い木を持って通っていたようだよ。そういう人を見かけることがあった。私たちがその人に近づくことなんてないよ、失神しそうになっていたよ、ロシア人が通ったりすると。

D：怖がりますか？

B：怖いよ、逃げるね。

D：違う色の人だから？

B：違う色の人だから怖がっていたんだろねえ、彼が私たちを怖がらせることなんかはないんだからね。違う色の人で、また恥ずかしがっていたんだろよ。そうそうロシア人を見かけることはない。

D：ロシア人に対して、だいたい人びとはどんな感じだったんですか、当時は？

B：まあねえ。ロシア人だなあと。それほど悪い感情はなかっただろうよ。大丈夫だよ。だいたいその当時はうまく宣伝をしていたんだ。一般的にわが国はロシアというとい国、いい人びとだと信じていた。頭の中にだいたいそう入力されていたから、それを否定して、嫌悪してみるようなそういうことはなかっただろう。そういう意味からも、だいたいロシア人はいい人だと考えていたんだ。こういう悪いことをしたんだということとか、その時代、働いていた人びとはそういう悪いことをするような人たちではなかったんだろ。人の国にいて、多くの中で働いている人というのは、まっとうに生きるもんだよ。それにそうだね、教養のある研究者たちが来ているんだろ。土地の写真を撮って、それは絵を描いていた人たちだと思うよ。高いところに上っては木を持ち上げたりしてね、そうやっていたんだよ。そうして何人かで働いていたんだよ。そういう光景が今も心に残っているよ。

D：その当時、あなた方はお金を持っていましたか、店から何か物を買う？

B：子どもたちが？

D：ええ。

B：一般にそういうのは珍しいよ。まあ田舎から両親や何かが来る時に、少しね、3、5トゥグルグをくれる。それを、今思うと。命のように大切にするんだよ。そしてときどき飴や果実、後になって干しすももなどが入ってくる。そう、イエベンもある、それらの中から買うんだ。イエベン1つ20ムング。1トゥグルグで5つのイエベンをくれるんだよ。今のこういう小さいイエベン。1トゥグルグで5つ買える、それならまあまあだろう。こうして、そのもらったお金をくずして、40ムングで1回に2個、そうでなければ20ムングで1個、こうやって少しずつ食べるとすると、5トゥグルグではかなりの個数になるよ、そうだろう。

D：40ムングで…。ああ、それで2個買って、なるほど食べるんですね。ばら売りでは1つを20ムングで売っていたんですね。飴や果実なんかはロシア製の物があったんですか？

B：ロシアの物だよ。ロシアの飴で、1kgはそんなにたくさんじゃあなかったように思うよ。kg売りの飴があった。それはというと私たちはいつも好きなように買うことはできない。お客さんが来たとき、くれる場合もある、それ以外でも、食べてもそれで

満腹になることはないよ、お腹をいっぱいにするのであれば、例のイエベンやタンゾール（小麦粉をこねて丸めて焼いたもの）など、そういうものをくれるんだよ。

D：当時はロシア製のモノポリというそういうウオッカがありましたか？ そういうふうによく聞くんですけど。

B：それは私はよく知らないよ。モノポリというものについて人が話していたよ。私がか子どものときあったのかどうか。一般にウオッカを飲んだというと、マナホアルというのを買って飲んだと年配者は話していたよ。最初マナホアルというのが出てきて、そして後になって、ウオッカ。ウオッカをマナホアルと呼んでいた。そうっていたよ。

D：私の聞いたところでは、最初に入ってくるときには身体に、健康に良いとあって、これを置いて、給料としてくれていたと聞きました。そういうことを聞きましたか？

B：ああ、それはああだろう、ウランバートルで給料をもらう職場ではそういうことがあったんだろう。田舎ではそんなことはなかったよ。近くの店にウオッカが入ってくるには来ていたし、それを買って飲む。私が学生のころはだいたい15トゥグルグくらいだったと思うね。

D：かなり高いですね。

B：そうだよ、15トゥグルグ。そして後になって値上げして、値上げして60何年か70年代には27、28トゥグルグになっただろう、そして30になり、そして上がり続けて、今では4万、5万トゥグルグに落ち着いているようだね。

D：あなたが小学校に通うとき、両親はこういうタルニなんかを唱えていなさいとか、魔除けのお守りなどをつけてくれて、送り出していましたか、どうでしたか？

B：いいや、しなかったよ。だいたいそういうことを恐れていたよ。好きなようにそういうことはできなかった。うちの両親は党员だったんだ。立場を考えるとそういうことをしてはならなかったんだよ。党员であるくせに子どもにお守りや何かをつけていると批判されるだろう。処罰されるよ。だから、そういうことはできなかったと思う。

2 社会主義時代の信仰と習慣

D：あなたが勉強しているとき、子どもたちでお守りなど、そういう秘密のものを持っていたりする、そういう子どもたちはいましたか？

B：知らないねえ。まったくそんなものを持っているのは見なかった。当時は寺院などが破壊されてかなりの年月がたった、どこでも僧たちを逮捕して、処刑したり脅したりしていた。そのころというのはかなり恐れていたよ、仏教や宗教的なものをひどく恐れるようになっていた、思うように明らかにそれをするにはできなかったよ、そういう状況ではなかっただろう。

- D：家々では一般に仏、ほかの家に行くとそこに仏や崇拜物を見かけましたか、どうでしたか？
- B：あるよ、仏はあった。家ごとに仏はあった。50、50何年からはまた仏などを隠させる、脅す動きがでてきただろう。そして、一部は隠しただろう。一部はそうしないでいて、そしてどうしたんだろう、なくなっていったんだろう。
- D：仏や崇拜物を持っていたという、灯明25（旧暦の冬の最初の月の新月から数えて25日目に多くの灯明を灯すことで、徳を積むことになるという）とか、ドゥイツェンの日（春の最初の月、新年の1日から15日のあいだ）など、拜んだりしていたんでしょうか？
- B：もちろんそうしていたよ、それはどんな家であっても家の中では王のようなものなんだから〔何をしてもいい〕ね、ドゥイツェンの日なんかには、家々に党の代表者〔宗教関係の行為を禁止して回る係の人〕が座っているわけでもないんだから。とにかくそこでは灯明を灯す。また年配者たちはみんな唱える経典などを知っていて読経をすることができる、だから、それを読経するんだよ。
- D：その時代、僧の服装をした人たちはいたんですか？
- B：いなかったよ、まったくいなかった。僧のデールを着た人はいなかった。
- D：アルテリで働いていた僧たちは、髪のををのばしていたんでしょうか、それとも剃ったままでしたか？
- B：普通に剃っていて、そのままにしていたよ。ハリマク（男性の短髪）なんかにはしない。
- D：一部の人は妻子を持っていたんですか？
- B：ああ、そうだよ、妻子を持つ人は持っていた。そしてだいたいは還俗してしまっていたよ。
- D：そして、仏や崇拜物をおまつりするときは、以前、僧だった人びとを呼んできて、読経させていたんでしょうか、どうだったんでしょうか？
- B：秘密裏に連れてきて読経させる。隠れて連れてきては相談をする。うまくいかないんだけど、私はどうなっているんでしょう、何がおこっているんでしょうなどということを探ねるんだよ、また、尋ねようという人のところに行って、尋ねる。相談する師があって当然だろうよ、そうだろう。それというのも、すべての人を洗脳して、その代わりに新しい脳にするわけではないんだから。みんなの中に信仰や崇拜といったものはずっと存在していたんだよ。
- D：オボーなどをまつるという儀式はおこなわれていましたか、その当時？
- B：その時代はなかったよ。オボーをまつるということはまったくなかった。この90何年から始まったんだよ。ずっと昔はまつっていたんだという、拜んでいたという。そして、その伝統を最近からまた再開したんだよ。それ以外、私の世代というのは、そ

ういう理解はないね。ただ年配者たちは話していたよ、オボーのナーダムに行って相撲を取って優勝した、またとても力強くなったように思うよ、というようなことをね。オボーのナーダムの思い出や昔話はたくさんあるよ。あそこでこうやって競馬をして、優勝した、オボーのナーダムで、というような昔話はたくさんある。ただ、私の世代ではオボーはまったくまつっていなかった。オボーはまつるものだという理解はあった、だが、どうやってまつるのかはまったく知らなかったんだよ。

D：アルテリでは僧たちが働いていて、また中国人も働いていた。ほかにどんな人たちが働いていたんですか？

B：ああ、まあね、女性たちがいたと思う。手縫いでの仕立てや白い靴底の革靴（繊細な作り的高级ブーツ）なんかを作る女性たちがいた。後になって、柔らかい裁縫になっただろう。シャンハのアルテリはだいたい柔らかい裁縫（布などを縫う）ということではなかったようだよ、固い裁縫（皮革などを縫う）、そして、木や鉄。ホジルトに合併した後、ホジルトでは柔らかい物の裁縫があったと思う。

D：別の場所では僧たちのアルテリとって、完全に別だったようですね、そんな感じだったんですか？

B：知らないねえ。そのように公には設立したんだろう、シャンハのアルテリはというと。僧たちのアルテリとして設立して、そして後になって、入る人は入り、働きたいという人が働いて、そうしていたんだろうよ。だいたい最初はというとその僧たちのアルテリだったんだろう。それ以後、私が子どものときというのは、それを僧たちのアルテリとはいわなかった。そのように呼んでいなかった。そうすると、最初設立するときには大勢の僧たちがやってきていたようだから、僧たちのアルテリを設立したんだろう。

D：あなたが小さい頃、だいたい僧というとだいたいこういう人たちだという、そういう想像やなんか、そういうものはありましたか、あなたには？

B：あるよ。あるある、もちろんだよ。知っている。うちの家から上の方というのは、1, 2人の僧がいたんだよ、年とったね、1人は例のボグド・ハーンのを管理していた僧だったということだった。

D：象を？

B：そう。

D：へえ。フレー（今のウランバートル）にいたということですね。

B：そう。ボグド・ハーンのはフレーにいたんだよ。そして、その象などが死んだんだろう、後になって、宗教もなくなってしまったんだろうからね。そしてうちのこのあたりにやってきた人だというよ。それがだいたいどこの地方の出身者だったのかはわからない。私たちはオドゴイと呼んでいた。僧侶だよ。小さなゲルにいてね。3つのハナ（壁）のあるゲルだったよ、3つのハナのね。また妻が1人。妻は別に住んでいる。

また1, 2人子どもがいたでしょうかね。そして彼らを置いて行ってしまうそういう僧だったよ。うちの家ではご近所としてサーハルト関係（ヒツジの搾乳を共同でおこなう）にある人だった。とても優れた人だと信仰のある人びとなどがよくやってくるんだ。田舎だから秘密でね、どこからでも関係なくこっちへ、もともとこちら側の丘を超えてやってくる。あちらこちらからたくさんやってくるんだ。主にこの東から多くやってくる。そんなだったよ。それから、オルホン川の北側に私たちが師と呼んでいた人がいた、また優れた僧だった。ほかにもまた優れた僧はいただろう、どこにだってね。そして、それらはとにかく優れた僧だったんだろうよ。だから牢から逃れられたということだろう。生き延びられたということだろうよ。だいたい非常に優れた学者だったとみんな噂していたんだよ。

D: あなたの家には仏や崇拝物があつたんですか、あなたが小さいとき？

B: ああ、うちにかい…まあねえ、何かいろいろな真鍮の金色のそういう仏像なんかはなかったよ、普通の仏があつたね。何だっけ、2つのこういう描かれた仏があつた。

D: それではあなたの両親は党员だった、でも、信仰はあつたということですよね？

B: あることはあつたよ。だいたい特に隠すというようなことはない、普通にしているようにしてどうしたんだろうね。後になって、人びとがどうかしたのか、また物を入れる大箱の中にしまったんだろうかね。

D: その時代、それでは灯明なんかをあげたりしましたか、家で？

B: ああ、あげるよ、あげる。

D: あげますか？

B: よくあげるよ。

D: 経典などはあつたんですか？

B: うちの父には経典などはなかったよ。ただ最初の…小さい本があつた、弟のところを持って行ったんだろうね。例のモンゴル・ドルジゾドヴ (Sanskrit: Vajracchedika sutra) があつた、それは私がもらったよ。そしてまた Ish Uzuulsen (将来を祈る) という経典といって、またモンゴル語の小さな本、Bogdiin lunden (ボグドの将来を祈るという本)、それも私がもらった。ほかにはそんなにたくさんのはなかっただろう。

D: あなたのお父さんはまた党员だったから、外見はそれほど信仰があるようには見えなかったんですか？

B: 見えなかったよ、秘密だ。

D: 一般に宗教への信仰はあつたんですか？

B: ああ、だいたい持っていたよ、それを。また秘密裏に読経させる、オポーなどの上に行つては経典を読ませるんだよ。また家では「4人の僧の食事、読経させて食事を供する」というものがあつたよ。宗教のそういう…4人の僧に読経させる、そういうことをしていたんだよ。そういうことが一般におこなわれていたんだ。だいたいお

こなわない年はない。ときにはシャンハの寺に行っておこなわせる。4人を集めて、僧を1つのゲルに集めて、読経してもらって、そしてお供え物や何かを整えていた。それもまた秘密でするほかなかったよ、党员だからね。一見革命家だったから。そうして、まあ党员として生きていたんだろうよ。だいたいそういうことだったんだ。

D：指導の仕事はしていたんですか？

B：いいや、遊牧民だよ。除隊になってきて、バグ長、シャンハの組合長や何かの仕事をしていて、自分もそれほど好きではなかったのか、草原に出て、家畜を飼う遊牧民になった。

D：あなたのお母さんはこういうタルニ（呪文）などを教えてくれていましたか？

B：いや、いや。だいたいうちの両親は私に特にこれとって教えてくれなかったよ。私は学校に入る前、5、6歳、6歳頃だっただろうか、祖父のところに行った。そして祖父母がダリ・エヘ（ターラー神、それを敬う経文）を教えてくれて、半分くらい教わっていた。そして全部は覚えられなくて、半分覚えていたもんだよ。タルニの半分。学校に入ると、本当の赤、革命少年になってしまっただけで、それで忘れてしまった。

D：チベット語で覚えたんですか、モンゴル語で覚えたんですか？

B：チベット語。

D：あなたは祖父母ととても近しかったんですか。

B：そう、祖父母の下で育ったんだよ。14歳まで祖父母のところに行った。そして後になって生まれた家に戻って、大人になったということだよ。14、15歳になって生まれた家に戻ったんだよ。

D：祖父母は仏など何かを信仰して、何かをしますか？

B：ああ、あるよ。うちの祖父はまたモンゴル文字を知っていたようだ。教えの本なんかをモンゴル文字で読むんだよ。とてもよく暗記している。経典をそれほど見るわけではない。自分の覚えているものをそのままね。2、3の仏画をもっている。だいたい清朝に仕えていた人だった。僧にはならなかったけれどね。そういう人だったんだよ。辮髪をしていてね、丸く一部の髪を残した辮髪。

D：その前側？

B：そう、前側は髪を剃っていた。剃ったところより後ろは辮髪、3つ編みにして、毛先を革ひもで結んで、その髪を背中側に投げるようにすると振り子のように揺れたものだよ。そういう人だったよ。またかなり長生きしたね。90歳近くになって亡くなったよ。87歳くらいにはなっていただろう。落馬してね。もともとウマがとても好きな人だったというよ。70何歳のときに落馬して怪我をして。そして今思うと、この大腿骨の入るそのくぼんだ骨、そこを骨折したようだった。そして何の治療もできなくてね、ほとんど死にかけてたんだよ。20年近く寝たきりだったよ、でも看護がよかったんだろうね。

D：その時代、病院はどのような、現代のロシア医学が入ってきていましたか、あるいは僧たちがまた人を診ていたのでしょうか、どうだったんですか？

B：医学が入ってきていた、もちろん入っていたよ。ソムの医者として準医師がいた。そしてだいたいはそのソムの医者が来るものだよ。それ以外にはまあチベット医療、伝統医療などを知っている人たちが何人か、そういうことをしていたと思う。それはでも、明らかなものではなく、秘密でするんだよ。もし知れたら民衆を感わしたといわれるからね。そういうことだった。

D：パンなどは後になって入ってきたんですか？

B：そうだよ。パンはまあ50年、50何年になってパンを食べる、知るようになったんだよ。50年代にはソムの中心地や定住地、うちのシャンハなどは比較的規模の小さいところだから、パンなんかを作っていたかどうか、よくわからないよ。菓子類などは作っていたよ、アルテリでね。パンを作っている、アルテリのパンとっていたというようには覚えていないよ。知らないね。ホジルトなどにはパンがあったよ。ホジルトから持ってきていたよ。

D：最初に食べたとき、どうでしたか、珍しかったですか？

B：ああ、とてもおもしろかったね、とてもおいしかった。お菓子ということだよ。今のパンや菓子パンなんだよ。そしてそれを切って分けてくれる。また菓子パンを食べているということだからね。

D：小学校で学んでいるとき、宗教は悪、僧たちは悪であるなどという、そういうことは教えられますか？

B：ああ、もちろんそういわれていたよ。そして、この聖俗封建諸侯の、敵の残党だとか何とかね。ちょっとだめな者をしかりつけるんだよ、長たちは。だいたい仕事をしない、こんな失業者なんか、そういう者たちを叱るんだよ。まあねえ、人によるんだよ、それは。その人自らの姿がどうかでね。ちょっとふさわしくない人が長になるといって、またとても危険だからね、だいたい。いつの時代にもどこでも。経験のある、ふさわしい性質の、また深く物事を考える、そういう人が一般に指導者であるのが私は正しいと思う。その性質がふさわしくない人というとねえ。だいたい政府でも敵に、民衆にも敵となってしまうよ。

D：自分も敵に？

B：自分でも敵にね。その性質がふさわしくない、そういう人というのはとても困ったものなんだよ。物事の最初に叫んで叱りとばしてね。

D：アルテリの僧たち、彼らが僧であったということを知っていたんでしょう、あなたが小さいころというのは？

B：もちろん知っていたよ。

D：それでは彼らのことを、僧だといって嫌っていましたか、その人びとを？

B：いいやそんなことはないよ。まあねえ、彼らというのは同郷の僧たち、兄弟や親戚などで、こうやって一緒に、田舎でもどこでもこうやって暮らしていたんだよ。血族なんだよ、彼らは。そして私などは「ああ、この悪い僧たち、封建領主などめ」というように見ることは私にはできないんだよ。何々さん、誰々さんというようにね。もともと僧だったけれども今は還俗した。そう思っていただけだよ。もともといた兄弟たち、知人、同郷の年配者と見る以外に彼らを階級で見るということはなかった。

D：一部の僧たちは独身を通して、そういう僧たちもいたんでしょうか？

B：ああ、もちろん、たくさんいたよ。妻をもたず、独身を通じた人たちがいたよ。大勢いた。

D：私が聞いたところによると、秘密で読経する、人に知られないようにと真っ暗な深夜などに読んでいたといいます、そうしていたんでしょうか？

B：そう、そう。それは本当だよ。深夜に扉を閉じて、柵の扉に鍵をかけ、ゲルの扉にも鍵をかけて灯明を灯し、そしてお香を焚く。そして読経して座るんだよ、彼らは。そしてその日に何を読むのか、彼らには読むべき定められたものがあつたんだろう。それは毎日読むべきもの、そういう師からもらつたそういう経典があつたようだよ。それを毎日読む。そして、それをすべて読むために、人が行き交わない、人びとの姿が消えた、休息している時間だから、それを読んでいたんだよ。うちのこのシャンハの寺にはその当時僧たちがまた日中の法要として毎日、法要をおこなう、常の法要というものがあつた。それはだいたい途切れることなく読経していたと、寺院を復興するときに、そのように話されていたよ。1つのゲルに入ってしまった、まったく途切れることはなかったとね。それはとても驚くべきことだよ。そして彼らは、その宗教儀礼に使用する道具、仏や崇拜物などを、一般にこうしてたくさん残していたようだ。個人の物もたくさんあつただろう。仏のある家庭はたくさんあつたんだからね、そうだろう。その時の寺の物から取つて残した、繊細な神聖なものを取つて残したようだね。そしてその時に、今こうやって再建するときに、それらをさまざまな方面から持ち寄つて、こうやって仏や崇拜物としてまつることになつたんだ。もちろん失われてしまったものは非常に多く、数知れないよ。

D：あなたが小さい頃、ここの寺院、西のシャンハの寺院の遺構などがあつたんでしょうね、そうでしょう？

B：そうだよ。その下のセンターというのはその下に、今ある寺よりもその下の川の端の平らな場所に西の寺院というのがあつたんだ。それは一番大きな寺だよ。そこはというと、いくつもの堂塔があつたんだよ。今こうやってヒツジの放牧をしているときに見てみると、多くの堂塔の痕跡がある。私が学校にいるとき、その北側には3つの仏塔がこうやって破壊されて捨てられていた、こうやって盛り上がったものなどがあつたんだよ。そしてほかの堂塔はというと、だいたい土台から何もかもがなくなつて

いたんだ。そして、その黄金の真鍮の仏像などがあちらこちらに横たわっている。こうやって手足をもぎ取られた、頭なんかも打ち壊されていた。たくさんあったものだよ、私が小さいころ、学校で学んでいるころには。ここかしこに横たわっていた。今ではまったく破片すらも見かけないね。最近、90何年に大がかりに掘り起こしたらしいよ。そして、さまざまな土で作った仏像、完全な形のものではなかった。ただこういう小さな袋を入れてそれに入れて歩く、小さなものなんかは完全な形で見つかったらしいよ。そういうものは見つかった、どうやって見つけたかという、その堂塔を燃やして、地面を掘ってその残骸をそこへ捨てたんだという。その焼けこげた残骸から人びとが見つけたらしい。そして、行ってそれを見てみると、灰のついた木の焼け残り、そして灰、そして土で作った仏像などは燃えてしまった、そういう泥炭があったらしい。塗料はなくなってしまった、少し大きめのさまざまな仏像は手足、いろんな部位など、こうやって切れ切れになった仏前に捧げる布が、こうやってちぎれた切れ端があるんだ。そしてそのすべてをこうやって引きちぎり、切り刻むようにして火に投げ入れ、穴を掘って、一部はそこに埋めたんだ。一部はこうやって外を飛び落ち、その上に砂がかぶってなくなってしまったようだ。そんなふうだった。一般に大規模な破壊がおこなわれたんだよ。経典はすべて飛び散り、飛び散り、なくなってしまったんだ。

- D：当時子どもが生まれるとき、名前などをつけるときに僧たちに見せる、あるいは名前をもらっていたんでしょうか、どうだったんですか？
- B：ああ、もらうよ。知識のある人のところに行ってもらうんだ。それはまた聖者である昔からの僧であった優れた人からもらうんだよ、人びとが優れているという人からもらうんだ。私の両親はもらっていた…たぶんそうだっただろう。またそれも好きなように自分たちで与えるものではないよ…。だいたい何々さんから名前をもらおう、誰々さんからお香を焚いて祈祷をしてもらって、そうしてもらおう。その人がもし時間があればやってきて、お香を焚いて祈祷をして、名前を与え、そして帰っていく。もしも来ることができないようならば、その人のゲルでお香を焚き、名前をもらって帰る。そうしていたよ。
- D：人が亡くなったというと、また、葬いの儀礼のアルタン・サヴ（直訳すれば、金の容器という意味）を開く（死亡の理由や埋葬方法などの助言を受けることをアルタン・サヴを開くという）など、そういうことがおこなわれていたんですか？
- B：そうしていた。おこなわれていたよ。秘密でね、おこなっていた。そういう習慣は捨てなかったよ。アルタン・サヴを開く、そして方向を定める、葬りに出立する日時などはそういう人を訪ねて聞くんだ。そしてシャンハへ行くんだよ。この地方の者は、オルホン川の北側に仏画家という1、2人の僧から聞いていたんだろう。そして時にはシャンハへ行く。そうしていた。だいたいそのアルタン・サヴを開く、そのさまざま

まなことがおこると、普通の人間が考えて、あそこに葬ってしまうというようなことはありえないよ。必ず、そうした方がいい、その人のところに行ったほうがいい。必ずうかがいをたてて、その答えを得る、そういうものだったようだ。どうだったのかよくはわからないよ、でも人びとは好きなように葬儀などをしてはいなかっただろう。一般にアルタン・サヴを開かせるといっていたよ。そうしたんだと話していた。開く人びとをそこから、大きな寺院から探してきて、昔はそういう人がたくさんいたんだから。そうだろう。一部はできないというけれども、だいたい多くはそうできていたんだよ。その習慣は途切れてはいなかっただろうね。

D：人を葬るとき、その墓になる土地をこうやって掘って埋葬していたんですか、一般に昔はどうしていたんですか。それとも直に遺体を置いていたんですか？

B：風葬だよ。だいたい土地を掘ることはない。直に置くんだよ。そうするもんだ。

D：いつからこのように（土葬）するようになったんでしょうか？

B：だいたい50年代末、60年代の初めごろから始まったんだろう。50何年からだいたい、このあたりにも、また人を葬るための場所があった。そこにいくつかの穴を掘らせて、亡くなった人を埋葬するように、とされていた。でもほとんどはそこに埋葬しなかった。その穴は今でもそこにあるよ。だいたい、50何年から始まった仕事だよ。それ以前はそうだね…私が学校に通っているときには、草原にそのまま置いていたよ。私は53年に卒業した。小学校を。その当時はだいたい風葬だった、それ以後まもなく、ソム中心地などの人びとは土葬するようになった。草原部に、遠く離して、人から離れているものならば、直に置いていた（風葬）よ。そうだっただろうと私は思っている。

D：その時代というのは、何年だったか、チョイバルサン元帥がツァガン・サル（旧正月）のはじめに亡くなったのは、何年だったんですっけ？

B：それは53年だったか、52年だったか53年だったか。ちょうどツァガン・サルのときか、大晦日に亡くなったんだろう。

D：そのようですね。

B：大晦日に亡くなった。私はツァガン・サルになるといって、家に戻っていた。私のクラスの先生が後からやってきて、私を連れ戻しに来たんだ。ツァガン・サルはおこなわないという、そういう話が出ていた。ツァガン・サルになってすぐあとに、私を連れにきたんだらうか、先生は。ちょうどツァガン・サルの日には連れて行かなかったよ。ツァガン・サルの後、行ったんだらう。そしてバグの会議をおこなって、その道中バグの会議をおこなっているといっって、そこに立ち寄って、先生たちが私たちを連れて、戻ったことを覚えているよ。

D：あなたは家に戻ってしまっていた、そうしたら、先生が後から連れに来た？

B：そう。先生が後から連れにきたんだ。

D：ツァガン・サルは一般におこなわせないといっって。

B：そう。そしてすべての家々でツァガン・サルをおこなわせないとってね。そして、そのときには元帥は亡くなっていたんだろう。その間、先生が連れに来るときには、私はすでに正月の行事を済ませていて、さまざまな家に挨拶に行ってしまった、全部終わっていたようだね。なぜなら、ツァガン・サルをおこなわず、私を連れていってしまったというならば、かなり記憶に残っているはずだよ。それは残っていないんだ。ただ先生について行ったということを知っている。だから特にどうということなく過ぎていったに違いないね。

D：小さいころ、ツァガン・サルになるのはうれしいことでしたか？

B：うれしかったよ。そしてツァガン・サルを指折り数えて待つんだよ、日を数えて待つんだ。そう総じてうれしいものだよ。今でもいいものだよ。今になってもツァガン・サルはいいものだよ。そうだろう。モンゴルの伝統的な民族の祭り、ナーダムよりも上の祭りだろうね、そうだろう。ナーダムはまあねえ、さまざまなときにおこなわれていた。もちろん、喜び楽しむものだったよ。でも、これのようにこうやって大昔から定められた月日でおこなわれてきた祭りは1つだけなんだからね。昔はというと、ナーダムは、昔は七旗のダンシク・ナーダムがおこなわれていた。それは何月の何日という定まったものではなく、季節の状況を見て夏の盛りの良い時期や、主に秋におこなわれていた。また清朝皇帝の支配下の政権でのナーダムというのもそうやっていた。ああ、旗のナーダムというのも人びとの仕事のない時期を考えて、またおこなわれていた。とするとどれもツァガン・サルのように大昔から伝統として受け継いできたものではないんだよ。ツァガン・サルは昔から、ツァガン・サルは何年から始まっておこなわせたんだろう。チンギスが一番初めにそうしたので、それ以前は秋におこなっていたといわれているよ。秋におこなっているときにもまた新年の挨拶をし、ツァガン・サルがおこなわれていたんだ。その後、春の初めの月の新月の日におこなうとチンギスが最初に始めたのではないだろうかとは私は思っているよ。それ以前は秋など、さまざまな時期にそれなりにおこなっていたんだろう。そして後になってチンギスが春の初めの月の新月の日をツァガン・サルとして、このときにおこなうようにと定めたのではないかと私は思っているんだよ。そうだろう。それ以後どうあれ800年これをおこなっている。そうだろう。そうすると一般に最も大きな祭り、これは新しい年を迎える喜び、前年の成果を記念し、兄弟がともに会い、両親を訪ねて挨拶をおこなう、敬意を表するんだよ。だいたい挨拶をおこなうというのは相手を尊敬するということだよ、そうだろう。

D：ヨールカ（新年のお祭り）というそういう祭りはいつから入ってきたんでしょうか？

B：それもまた50何年に入ってきたようだよ。私が学校にいるとき、またヨールカをおこなっていた。先生たちが冬のおじいさんになって、何人かの子どもたちが例の動物、熊になって、何人かの子どもたちが熊やうさぎなど、十二支になるんだよ。そうやっ

ておこなっていた。山から杉の木を持ってきて、若い杉の木を切ってきてね。それを飾っておこなうんだよ。50何年から始まった。このあたりではそうやって始まった。

3 第2次世界大戦後の生活

D：戦時中は、戦争をしているときは、戦争をしているということを小さいときにわかっていたか、大人たちは話していましたか？

B：私は41年に生まれたから、45年には4歳の子どもだよ、何もわかりはしないよ。でも、その独立を勝ち取ったモンゴルのすべての民衆が署名をしたと、書いたといっただよ、45年に、そうだろう。それをうっすらと覚えている。人びとを集めて、私はこの子よりも、その男の子よりも小さかったんだよ。この子は今6歳、これよりも小さかった。そして人びとを集めてそうしたんだ、女性たちは指にインクをつけて、それでこうやって紙に押させていたのを覚えている。私はそれを見てとても驚いていたんだよ。真似をして押そうとしていたらしい。見ていたんだろうね、それを同じように押そうとしている人なんかを見ていたことが頭に浮かぶよ。だいたいまあ、物は不足していたよ、47、48、49年まで、そして50年代近くまで物は少なかったんだよ。飲食物、小麦粉や米なんかは今と比べると同じではないよ、不足していた。小麦粉を買うというと、袋買いをする人は珍しかった。5、10kgを買えたんだ。一般に5、10kg、袋ごと売るようなそんな大量の小麦粉は組合にもなかったんだ。すべての世帯が小麦粉を袋ごと買うというようなことはできなかった。それで5kgの小麦粉、少し余裕のある人は10kg。それと米を1、2、3kg。砂糖はほとんど使わない、甘くおいしいものはいつも買うことはできないんだよ。ツァーガン・サルのパープに入れて使うんだ。普通するときにはパープもそれほど作ることはなかった。余裕のある人びとは作っていたんだろう。余裕のない者はパープを作ることはできなかったよ。家畜はというとだいたいどの家庭でも少なかった。今と同じように世帯ごとに10頭のヒツジなんてことはいわないよ、200、300頭なんてこともいわない。10、20頭の家畜だったよ。それはやっと生活できるくらいだった。その上に税金というものがある。隠すなんてありはしない、羊毛や剛毛、角や蹄、毛、皮、全部番号がついていたんだよ、その時代は。それを納めようと大変な苦勞になる。全部取られるんだ。1歳のヒツジやウシからも取るんだ。ヤギのすべての皮、1歳ヤギの皮まで徴収する。すべての家畜から取れるものを、ほとんど全部取り上げるんだ。そしてああ、私は覚えているよ。最初の5カ年計画というものだったようだ。こうだったんだ、家畜を所有している人は一時期こういう目にあった。ああ、それは計画ではなかったか、党の政策がおこなわれたんだ。最初、羊毛やカシミアの徴収に所有家畜が少ない者はとても苦しんでいたんだよ。その上肉を取るんだよ、また。あなたの家は何頭のヒツジがいるから何kgのヒツジ肉を、何頭のウシがいるから何kgのウシの肉を、頭数で定めた数値があった。頭数を掛

けてその量の肉を徴収する。羊毛やカシミアも同じだ。そうするとそれを納めきれない。そうやって納めきれないでいると、それに罰則を科す、できなければ。そして罰則としてまたその分徴収をする。こうしていて問題がおこってくると、再度また法律を新しくして、実施し始める。すると、どうなったかという、家畜を所有している人民は家畜の頭数統計をして、こうやっていくつかに分けて、2、3に分けてグループを定める。最も多いグループは1人から以前は1kgの羊毛を取っていたのを2kgにする。中間は減らす。その下のグループは少し減らすんだ。そして家畜をそうやって定める。そうなるとその多くの家畜を所有している人たちというのは…もともと困難な状況の上に徴収が増え、そうして圧迫されていくんだ。こうやってほとんどがネグデルに入るという理由はそういうことであつたんだよ、そういうことから入っていたんだ、主に家畜を持っていた人びとはね。なぜかというとその公的な規則に抵抗できなくなった。そして罪のある家畜（聖俗封建層や裕福な人の所有財産に対して罪が着せられた。後述）、罪のある家畜から…。そういう言葉さえできてきたんだよ「罪のある家畜から逃れよう。ネグデルに入ろう」そういう文句までがでてきたんだ。そうだった。最初はこうだったんだ、最初の5カ年計画はこういうものだったんだよ。今年わが家では5頭のメスヒツジがいる。そして1頭のヒツジを例としよう。5頭のメスヒツジは春、子どもを産む、5頭の子ヒツジが生まれる、そうだろう。こうやって10頭のヒツジを持つことになる。そうすると10頭のヒツジの。前年、秋が近づくときに、秋を迎える9月1日に家畜の頭数計算がおこなわれていたんだ。そうして数上あつた家畜を翌年に割り当てを取るときには子畜の分も一緒に取るんだ。こうやって少ない家畜を持っていた世帯は、こうやってどうしようもなくなってしまったんだよ。それ以外にある程度多くの家畜を所有していた、余裕のあつた人たちというのは、またそれに耐えることができる。そして耐えて、その家畜のすべてを納めていると、貧しい者たちは巻き添えになることから「この金持ち連中、どうしたってだめだ。これらを何とかしろ。こうやってグループを定めて、そして罪のある家畜にしまえ」とね。そして罪ある家畜になって、それらから脱するために、ネグデル化運動を拡大させて、政府から、党政府からネグデル化運動が拡大されてね。そうして、入るものは入る、入らないものは…。だいたい自発的な考えをもとにというスローガンだったんだよ。でも自発的な考えをもとにしていたら加入しないから、強制していたんだ。それは例の家畜の、家畜から取れる利益を徴収するという活動上、だいたい羊毛の上でまさにおこなわれたんだ。例をあげるならば、わが家、本当に生きた例としてわが家がある。祖母はかなり多数の家畜を持っていた家なんだよ、それが納める羊毛が不足したとする。割り当てられた羊毛はどうやっても到達できやしない。こうやって、裁判にかけられる。裁判所が呼び出して、そして判決を受ける。そして罰金を払い、そしてさらにその不足した羊毛を出せというんだ。それを払うことになった。こうやっ

て何とかそれを納めるようにする。そして3頭の種馬があった、そこから1頭を羊毛代として払ったんだ。

D：ああ、換算してですね。

B：換算しているんじゃないよ。その羊毛としてウマを、10kg羊毛が不足したとして1頭のメスウマ、太ったよいメスウマ、10kgの羊毛分として引き渡す。そこでオールガ（馬取り竿）を持って行き、1頭のメスウマを捕まえて渡す。こうやっていて1頭の種馬の群れすべてをなくしたんだ。こういう例がある。そして、例の罪のある家畜となるわけだ。わがシャンハにはまたネグデルを作ってくれないんだよ。それで祖母はというと、さあこれらを政府に渡そう、ただで、もうやめよう、とにかく早く政府に渡してしまって、苦しむのはやめようといってね。そうしているとシャンハにネグデルが作られた、そして、ホジルトにも作られるという。ではホジルトに行ってみよう、そのネグデルに入ろう。こうしてホジルトに行ってみたところ、そのソム行政は許可をくれないんだよ。そういう大変な目があった。そして後になってからネグデルが作られて、56年にネグデルが作られて何頭かの家畜を渡して一息ついたんだよ。そういうことが起こった。その最初5カ年計画では、今いない家畜の税がいくらだと、そうやって払わされて本当に大変だった。次のそのグループもまた大変だった。だいたい大変じゃないものなどないんだ。みんなだいたい困窮し、疲れ果てていたんだよ。それに一次産品の価格は非常に悪かった。50何年ごろというのは、1kgはだいたい3、4トゥグルグだったんだよ、今となってはよくわからない、おそらくね。かなり後になって60何年ごろに90トゥグルグになっただろう。50何年ごろというのは価値がなかった。羊毛、カシミアなどは価値がなかったんだよ、肉といっても公的な規則で買い取っていたからね。公的規則の割り当てという名前があったからね、それは、紙の上にそういう名前のついた公的規則の割り当て。それは厳めしいものだよ。それが後になってネグデル社会になって、家畜はまあ定まった頭数の家畜を持つ、そしてネグデルはハンガイでは50頭、ゴビでは75頭だったか、そのあいだの地帯で75頭だったのだろうか。ハンガイは50頭だったよ。世帯ごとにそういう家畜の割り当てがされたんだよ、60何年にね。そしてうちの国营農場、国营農場は、ネグデルではない。そうだから協同組合や国营農場の労働者、遊牧民であっても、すべてその所轄下にある者は16頭の家畜が割り当てられる。それよりも多くなった場合、さまざまな物を取る。それがなければその資産として納める、そういう規則だった。それほど厳しく取り立てて納めたということはないだろうよ。まあねえ、人びとはまた生きた人間だから、人にはやり方ってものがあるというよ、うまくやるんだよ、そうだろう。柵のすきまに入れるとか、隠してしまってね、映画なんかで木を引きずって隠したウシが出て来るだろう〔映画「ウマを持ちたい」の1シーン〕。その映画は事実を元にしたんだだろうよ。そういうことだったんだよ。もしも、ただ所有している家畜をそのまま数えるんだとした

ら（上限がなければ）、なぜそれを人から隠して、こうするものかね。それはということもしも見つければ処分といって、罰金を取られ、牢屋に入る、そういうものだったよ。そうしていた。その後、60何年に私が大人になって働いているときというのは、原材料の価格は少し上昇したんだよ。でもどうってことはなかった。1kgのカシミア、1級のカシミアが90トゥグルグ何ムング、そういう値段になっていると話されていた。90トゥグルグというと、その当時、角の丸い段茶を1つ全部かうことはできない。角の丸い段茶は10トゥグルグそれくらいだった。まあ9kgの小麦粉を買うね。小麦粉は1kg1トゥグルグだった。そのくらいじゃあ、何も買えやしないよ。

原材料は今、だいたい北（ロシア）か南（中国）か国境を越えて交代で輸出するようになった。時にはいい値段で出しているようだよ、南へは。昔、北へは原材料はまたそれほど有益に出していなかっただろうと私は思っているよ。だいたい最も安い価格でね…衛星国としてモンゴルは原材料の基地だったんだろうと今は考えている。そんなに公的な貿易をしていなかった。でも、社会主義はまたモンゴルを援助していたんだよ、また文化をもたらしただ、モンゴルを文明化したんだよ。文明化についてはよくおこなったよ。悪くはなかった。だが、その道は完全、すべてが完全ではなかった。わがモンゴルが自らそんなふうだったからそういうことになっていたんだよ。ずっとそうだっただろうよ。

4 軍隊の生活

そして私は62年に軍隊に入り、そして秋にベトナムに贈与家畜というのを送ったんだ、ヒツジを。それに行っただよ、秋に。私が行くときというのは、またモンゴル人民共和国軍の政治管理局、軍指導本部からさまざまな命令をもらって、注意警戒をしてね。その時代は例の中国赤軍の革命というのが始まっていたと思う。「あなた方は非常に注意して行きなさい」とね。そしてまたその上に中国インドの2国が戦争をしていた。そういう時期にあたったんだ。「あなた方は自由気ままにあちらこちらに行ってはならない、非常に注意して行きなさい」と命令されていた。「だいたい中国という国は発展が遅れていて、大変粗野なものだよ。あなた方はそこに文化を運んで行く者たちだ」とこういわれていたもんだよ。本当はというと、私たちが彼らの生活の中に入っていくわけではなし、鉄道でこうやってヒツジを積み込んだ商品用の貨車に乗り込み、あれこれといっていると到着しているんだから。生活などを知ることなどはできやしない、わかりっこないよ。でも、物事はその端々から見えるものなんだよ。ある駅に着いてそこに降りたときだよ。エレーンに最初に行ったときにある若者がこっちにやってきた。警官なんだろうか、彼と少し話をした。彼は「私はモンゴル人だ」という。中国人だろうというと「違う、私はモンゴル人だ、私はナムスライという、私はモンゴル人だ」。本当に民族的な思想を持った男のようだったよ。そして、その

先、またジネンという駅について、家畜たちの貨車を交換した。そのために待っているときに、私たちというのは緑色の軍服のオーバーオールで、昔でいうならば Terminal という、Terminal という形ではなく戦車の緑、そういう服だった。2種類の素材があったよ、その時代。そういうオーバーオールを着ていたら、人びとがこうやってきて、2人の内モンゴル人がやってきたんだ。彼らは私たちのオーバーオールをほしがるといったらなかったよ。ずっと横にいて、何ていいベルトなんだろう、とかいってね。だいたいその着ていたものなどはとても立派なものだったよ。中国人というと荷物を運ぶときにはいつも肩の上のにのせるんだよ。背負い、こうやって持つということはない。いつも肩の上でこうやって天秤棒で担いでいる。だいたい2つの肩に継ぎ当てのない中国人なんかはいないんだよ。そして肩を手でばんばんとたたいて走っている。10, 20, 30, 40人いたんだろうか。その中国人はみんな同じ人民服だったよ。

D: 青い?

B: 青い綿のズボンとシャツの。ほかの服はなかったようだったよ。みんなそんなふうだった。そうだったよ。一般に貧しかった。そして、その鉄道の駅で停車すると、まず家畜に水をやるんだ。井戸からバケツで水を運んでくる。彼らから2, 3人が人員を出させて助けさせるんだ。多くの貨車へ水をくませて運び込む。そのときに見ていると、だいたいその着ている服などはかなり貧しい感じだった。ああ、例の缶詰。私たちの食事はというとだいたい乾燥した食事（携帯食）で、井戸から持ってきた水を飲むんだ、軍人だからね。乾燥したものを食べるんだ。缶詰や乾パンそういう携帯食が支給される。そしてその缶詰を食べ終わって、その缶を道中の駅に投げ捨てるんだよ、ホームにね。そして見ていると、誰も彼も、缶を拾わない者はないよ。また、草をヒツジに与える、干し草を束ねたプレスの鉄。それもまた外に投げ捨てる。それを見つけた者がまた必ず拾って持ち帰る。彼らは踏みつけてその上を踏みつけて歩いていくとか、横にこうやって足で蹴って気にもかけないというようなことはない。彼らにとって役に立つものなんだろう。必要だったから拾っているんだから。物は不足しているということだよ。そうだっただろう。そんなふうだったよ。そのあと、私たちは中国の向こう、Dusyani という場所に到着してヒツジを引き渡して、そして戻ってきた。戻ってここへは11月7日にその武漢という非常に大きな都市がある。その中で市場に行ったんだよ。そのときわが国では10月革命の記念行事の時に、旗やポスター、建物ごとに旗が飾られている。そしてそんなふうになっているだろうと、その都市で歩いてみたけれど、まったく1つの旗も見かけないんだ。中国も本当の共産主義国家だよ、そうだろう。それでもそういう旗や何かはまったくないんだよ、10月革命記念日に。総じて貧しかったよ。今は映画や何かで見ると驚くようになってきているけれどね。その後、北京では戻るときに3泊した。和平ホテルという10何階建ての建物がある、11, 12階建てだよ。そこに3泊して、皇帝の冬の宮殿、動物園などを見学したよ。1

日目は買い物，市場があったようだよ，穴の店といわれていたんだ，地下にずっと続いているんだ。地下というと壁などはなく，ハラホリンの市場くらいの大きさがある。それほどではなかったかな。とにかくそういう地下に入って歩いて，歩いて，どの方向からでも関係なく出られる，こうやって自由にね。扉などはないんだ。そういうところで1日ぶらぶらしたよ。そしてまた観察すると，北京ではやはり人びとは少しいい身なりをしている，地方に行くとはそれはひどいものだった。地方では秋になって収穫をする時期，冬用に収穫をしているようだった。例の手押し車で，その上に落ちそうになるくらいこうやって積み上げている。そしてこうやって，並んで車を引いて歩いている。わが国でウシの車を集めて，こうやって列にして行くだらう。まさにそれのようだったよ。そしてそれが列になって，鉄の車輪がカタンカタンと音をたてて，そしてそれを待って立ち止まる。そんな風だったよ。

D：どのくらいのヒツジだったんですか？ 何頭ですか？

B：1,000頭。うちのこのあたりの土地の1,000頭を届けたんだよ。1つの貨車に72頭，ときには73頭などを1つの貨車に入れてね。2つの扉のところをこうやって鉄の格子を作って，両側にヒツジを入れて，水桶を置いて，こうやって草の上で過ごしていたんだよ。そうして，夜寝るときには，扉を閉めて寝る。日中はというと，若かったし，見る物すべてに興味深くて，その中に座っているということはなかったよ。扉の草の上に窓を開けて，そこに出て立っているんだ。そして周りを眺めて，あちこちで見たことのない場所，国の興味深い自然など，都市や集落，人びとの生活そういうものを眺めていたんだ。だいたい明るくなってから暗くなるまで，ヒツジに草を撒いて与えて，そして外を眺めていた。そうやって行ったんだよ。

D：何人が行ったんですか？

B：20何人だよ。だいたい長や兵士すべてあわせて30人近くだっただらう。

D：へえ。

B：1個部隊，1つの梯隊で派遣されたんだ。前年も同じように届けたというよ。家畜を。2年目のときに私たちが行ったんだよ。それが何年派遣されたのかは知らない。何回か届けたよ。1年に何度かね。ツェデンバル書記長がベトナムを訪問して，10万頭のヒツジをプレゼントしたんだ。それを届けたというわけだよ。

D：それはどういう意味のヒツジですか？ 何のためのヒツジだったんでしょうか？

B：普通の繁殖用，家畜にする。そういう用途のヒツジだよ。

D：ベトナムに，あなたは中国を経由して，ベトナムに入ったということですよね？

B：ベトナムには入っていないよ。わが国でいう，今の中国のザミン・ウデのようなところだよ。その国境のこちら側…そこに行き，引き渡して戻ったんだ。それはなぜかという，前年，私はまだ軍隊に入っていなかった。うちの父はバグの上級の宣伝員で，バグの新聞を配る。そしてたくさんの新聞がやってくるんだ。それは党の「ウ

ネン（真実）」紙から「労働」紙、「若者の真実」紙。そしてウブルハンガイの「労働のために」紙、このようにたくさんの新聞。それらを私は読みに読むんだ。すると、ある新聞上にアメリカの何という新聞だったか、モンゴルの10万人の兵士がベトナムに入ってきたと書いてあるんだよ。書いてあった。それはその4面にね、この資本主義国というのはたいした奴らだ、いつも嘘を書くものだ、そうやって家でほかの子どもたちと、同年代の者たちで話をしていたよ、こう書いている、ああ書いているとね。それが後になってわかったんだよ。10万頭のヒツジをベトナムに送り届けたのを、10万人の兵士と間違っ書いてたんだ。もちろん軍服を着た兵士たちが届けたよ、そのヒツジを。軍服で届けてあげた。そこでわが軍を見て「うわあ、10万人の軍隊というのはこれだろう」と書いたに違いない。誇張したんだ。私はそう思ったよ。そしてその後、翌年になって、私たちが同じようにそういう白い布で縫ったこういう前に少し前の部分が長い白い帽子をかぶって、軍であることを隠していたんだらうよ、意図としては。そしてその他、服はというと何もせずに、特にどうこうしたということはない。その他は通常通り。知られないわけがないよ。そして農牧大学の学生というんだぞと、そういわれて出発したんだ。一応秘密にして行動しているんだよ。将来、いろいろなことをいわれないためにね、また兵士を入れたとまた書くのではないかと恐れていたんだらうよ。だから国境を越えず、国境上で引き渡して戻ったんだよ。その10万人の兵士ということが、今も私の頭から消えない、忘れられないね。

D：そうですか。とてもおもしろいですね。その時代、中国とは悪くない関係だったんでしょう？

B：悪くないよ。でも少し不和になりかけた、始まってしまっていたんだよ。不和になり始めていた。そういう見方を恐れて、でもそれほどひどくはなかった、大丈夫だよ。そして、その時代というのは中国は建築現場にいた中国人労働者たちを引き上げさせる、そうした時期だったよ。一般に少し不和になっていた時だった。「はい、ツェデンバルは悪い、悪い」一部の中国人はためいきをついてそういつていた。軍隊でも建物の鉄骨建設作業などで2、3人の中国人が短期で何日か、難しい仕事でうまくいかなかったため連れてきてやらせていたんだらう。働いていたんだ「ああ、ツェデンバルは良い、毛沢東は悪い」と私たちはそういつてね。その私たちと一緒に働いていたその年配の40、50歳くらいの人だっただらう、年配の人だったように思うよ。40、50歳くらいだったようだ。ちょうど労働年齢のそういう人がいた。彼らは怒って、親しくしない。そんなふうだったよ。

D：仲のよかった時期には、毛沢東の歌などさえも歌わせていたといいますよね。

B：ああ、学校のコンサートなどで歌うんだ。「東の方から太陽が昇る、中国に毛沢東が生まれた」と声をはりあげるんだよ。それをよく歌っていたよ、歌のコンサート…子どものコンサートというと、さまざまな恋愛の歌なんかは歌わない。他の歌を歌う。

例の政治の、レーニン先生、父チョイバルサンというような歌。詩もあった、そういうような詩を朗読する。そういうふうだったよ、一般にね。今は子どもたち、幼稚園の子どもでも愛の歌を歌っているよ、そうだろう。

D：あなたはウランバートルにいるとき、ガンダン寺に行きましたか、行ってみましたか？

B：行ってみましたよ。軍隊のときには まあね、ガンダンに行ったことがある。私の世代というのは軍隊も開放的でね、そういう、豪放な感じだった。私の世代はね。うちの大隊はまたかなり豪快な隊だったよ。ただ殴り合いや喧嘩などはないよ、私の世代は。それぞれが相手に勝とうとしたりはない。ただ、外に出かけてはいなくなる、そういうくせがあった。私もその1人になったよ、外出してね、少し退屈すると外にでる。土曜や日曜などには。時には仕事をさぼる。そしていなくなってしまう。夜になると帰ってきて寝る。土曜日や日曜日などには、知り合いの家などに泊まると、また続けて泊ってね。そして戻ってくる。そんなに遠くには行かないよ。市内で…ウランバートルも今思うと家も少なく、楽だったよ。時折行く店がある。そこに入ってはいろいろなものを見ては目を楽しませる。兵士が物を買ってもしかたないだろう。ときどき飴や果実を買うくらいだ。いろいろなアルヒやワインもその当時飲むわけでもないから、特に何もいよプーシグ（Belomorkanal, Kazbek など、ロシアのフィルターのないたばこ）を買って、それを吸って格好をつけるのが主だったね。その時代はまたたばこを吸う年代だったんだ。中国に行ってそこでたばこを覚えたんだよ。小さい頃というのは好奇心で父のたばこを隠れて吸っていた、ヒツジの放牧に行行って吸っていたんだ。後になって、たばこをやめて、そして軍隊に入った。たばこをやめて行ったのに、その日の Puushig といって割り当てでもらうんだよ、吸おうが吸うまいが。それを中国人に見せては驚かせていたよ、貨車の入り口に立って、それを口にしてね。そして、人がやってきて、その人のことが気に入ったらそれをあげる。中国ではプーシグはなかったんだよ。みんな巻きたばこだ。このプーシグというのはあれだよ、ロシア固有のものだったんだよ。その他の国のことは知らない。それを、女性がいたら呼んでは、これ〔をあげるよ〕、といってあげる、人が歩いていたらこれ、といってやる。彼らはとても興味を示して、こうやってのぞいて見て、穴を見て、もらってとても喜んだよ。そうして、また少したばこをやめかけていた。でも、後になって、まあねえ、兵士というのは吸わない人もいれば吸う人もいる。お互いに呼んでは「たばこを吸え、君、さあ、これ」といってね。そして、また冬の寒さの中、土木仕事をしている、そこには体を温めるという場所がある。そこに入って座ると「おまえ、ここから取って吸え」という。そしてくだらない話などをしては座り、暖まるという目的でそれを少し吸ったりしていると、だいたい喫煙の道に入っていくんだよ、それは。

D：たばこはロシアから入ってきていたんですか？ 例のパイプたばこは？

B：そうだよ。ロシアから入ってきていた。50何年、50年代に中国からパイプたばこというが入ってきていた。それは緑のパイプたばこ、緑色のとても油っばいそういうたばこだった。そして、油は入れ物の外側の紙や、その中のビニールなどから染み出していた、そういうたばこが入ってきていたんだ。もっと昔には大昔の老人たちとはいうと、大昔の中国パイプというものを好んで求める。それはかなり目の細かい油っばいもので、つまむと固まってしまう、そういうたばこだったことが思い出されるよ。そういうものを吸っていたんだらう。一部の人は咳が出るってロシアの赤いたばこを吸う。ほとんどはその中国パイプたばこから離れていって、かなり年月がたったようだ。そしてその後49年に人民共和国として革命国になってね、中国は。そして私たち両国と仲良くなって。後には商売や取引などいろいろなものが発展してきて、商売上、そのたばこなど様々な物資、中国製品がたくさん入って来るようになったんだよ、その時代は。そして大量の中国製品で満たされたんだ。中国の絹・ちりめんといって、妻子たちは中国の絹やちりめんを着飾るんだ。そして一般に中国の絹・ちりめんなどはロシア製のものよりも質がいいといわれていたんだよ。私などはどうなのか知っているわけじゃあないがね。質がよくて中国製品はすばらしいという。昔のものはよかったと、また不満そうにもいう。後になると、だいたいロシア製の質がよくなったんだよ、そうだろう。

D：そのようにいわれていますね。

B：そして鉄はというと中国製の鉄はだいたいそのうちに折れてしまうことが多く、硬度が低い、そういう鉄だよ。それに比べてロシア製の鉄は硬度が高く、鋼鉄が多い、そういう鉄なんだよ。ロシア鉄はいいといわれていた、そうだったんだよ。

D：あなたがウランバートルでガンダン寺に行ったとき、どんな様子でしたか。その時代、法要などはおこなわれていたんですか、そのあなたがいたころは？

B：もちろんおこなわれていたよ。今とまったく同じ、ずっと同じようだったよ。まあおもしろそうだというそういう感じで見に行ったんだよ。祈ろうなどとは思わないよ、若かったからね。また、宗教は不必要だという考え方が身についていたからね、高慢な感じでね。まあ一度は入ってみよう、そういう感じで行ったんだ。だいたい今の、今あるこれと同じだったよ。

D：若者や年配の人びとが法要をしていたんでしょうか、若者がいたんでしょうか、そのとき？

B：仏教学校が設立されていたよ。

D：はい。

B：それでその若い仏教学校の学生がいた。彼らが参加していたよ。年配の人たちはかなりいたよ、ほとんどが年配者だった。そして後になって、その仏教学校が作られて、若者が入り始めたんだらう、仏教学校で学んでいるってね。何年に設立されたの

か今わからないけれどね。仏教学校で勉強しているという若い僧にたくさん会ったよ。そんな感じだった。

D：その若者たちは外を歩くとき、僧の服装で歩いていたんですか、あるいは普通の服だったんですか？

B：一部は僧の格好だったよ。僧の格好で歩いているから、ああ、僧だとわかったんだよ、もしも普通の格好でいたらわかりっこないからね。僧服を着ていたんだよ。

D：ダライ・ラマが初めてモンゴルを訪問したとき、あなたはそのことについて知っていましたか？

B：噂に聞いていたよ。そのときは草原にいたんだよ。最初だけでなく最後のときも、だいたい行って見たことなどないんだよ。テレビで見るだけだ。

D：内モンゴル人はモンゴルに対してどんな感じだったんですか、あなたが行ったとき？

B：とても親しく感じていた、モンゴルに対してとても親近感を感じているようだったよ。そして、私はモンゴル人だといって、ふるまってくれるんだよ。一般にとっても親しく感じているようだったよ、たくさんの人にあっただけど、ほとんどがね。

D：あなたの世代は内モンゴルについてどういう理解をしていたんですか、当時の人びとは一般に。

B：一般に、内モンゴルはまあねえ、わが同じモンゴル人、分断された一部が内モンゴルだといわれていた、そういう理解があった。後になって、例の文革が起こって、モンゴル人たちをひどく迫害して、ひどいことをされたようだと言われたり、書かれたりした。それは真実だっただろう。小説までもが出たよ。『踏むべき土地のない足』という何という作者のものだったかねえ、そういう小説なども出版されたよ。内モンゴルのある知識人…さまざまな迫害にあって、外国に逃れ、最後には戻って来るといって、そういう小説だった。それはわがモンゴルの、こちら、ゴビが舞台だといったけれどね。そういう『踏むべき土地のない足』という本が70年代に出たんだよ。読んでいたんだけど、今は忘れてしまった。私は小麦工場の労働者だった。そしてそこに行くところある若者が本を読んで座っている。私の同年度の兵士、職人をしている彼が部屋に座っている。本を読んで座っているんだよ。何の本だろう、と見てみると、その本なんだ。それでそれを取り上げて「おい、その本、俺が今読んでるんだ」「すぐに返す、もってくるから」といって〔取り上げた〕。そして夜通しそれを読んだよ、眠らずに読んだ。朝の8時になって、読み終わった。お茶を飲んでそれを返しに行った。

D：その当時、たくさん本を読んだんでしょう？

B：ああ、私はたくさん本を読んだよ。本から離れない。また多くの本を持っていた。後になって田舎に出て、ソムの中心地に置いて行った、それでなくなってしまった。なかなかいい、すばらしい小説など、いろいろな本、かなり多くの本をもっていたんだよ。労働者だった者としてはかなり多くの本を持っていた。

5 文化躍進運動

D：昔、文化躍進運動というものがおこなわれましたよね？

B：ああ、そうだよ。それはまあねえ。それは正しい活動だったよ。

D：それはどんなものだったんですか？

B：それはまあ、遅れた状況からの脱出だよ。一般に遅れていたからね、私たちというのは。たとえばゲルを塗装する、そして埃や汚れを洗わせる、そういう活動だよ。それはだいたい正しい活動だった。必要な活動だったと私は思っている。一部の粗野な感じの人びとはつらかっただろうよ、50何年には。それを消し去る文化躍進運動というのがおこなわれたんだ。それというのはかなり家庭や人びとを清潔にし、かなりよくなったんだよ。それは仕方ない、必要な活動。私が小さい頃、私は祖父母と暮らしていたと話しただろう。うちの祖父母の2人は結婚して最初に持ったゲル、それでずっと暮らしていたんだよ。それを新しくする、建て替えるというような考えはない。必要がないからね。建てることができている、暮らせている、とね。そして竈ではなく、昔ながらに火をそのまま燃やしていた、竈はないんだ。そうするとゲルは煙にまみれていて、煙にまみれ続けて、天井のオニ（屋根棒）などはねえ、例えば移動するときにオニをこうやって取り外す。そうすると煙のあれが手にくっついてね、こうやってべちゃべちゃとくっつくんだよ。ずっと煙の中であって、こんなに分厚くその汚れがくっついているんだよ。そしてゲルのフェルトのツァヴァグ（天井の内側の覆い）がある、内側の。それは煙の汚れがついて黒く、分厚く固くなってしまっている。そんなふうだったんだよ。そして、そういうことから抜け出すために、それらを洗わせ、削らせてまた洗わせる、そしてできる者はペンキを塗る、余裕のある者は塗装するんだ。そしてそうやっているうちに、すべてを塗装するようになって、天井のツァヴァグはまた洗ってね、すこしきれいになって柔らかくなる。そうしているうちに清潔になっていく。そして内側の白い覆いの布をつけるようになる。外側にも白い覆いの布をつけるようになる。それはまた、そうだね、生活は向上している、向上しているということだよ、それは。どれほど貧乏そうでも、また向上していたんだよ。またできる者はベルジェーフ（雨を通さない生地）を持つようになる。最初、一時期このベルジェーフの覆いが出る前、このあたりではハンガイ地帯だから杉をこうやって薄く切って、1.5cmだったのだろうか。そのくらいに切って、板の壁といって、ゲルの外側を巡らせて…立ててこうやって四角にして固定する。第一には雨や砂から覆いを守っているんだよ、第二には覆いの布がよくない、粗悪な布だったんだ。こうして板の壁というそういうものが使われていたんだよ。60年まで使っていただろう。64年、65年くらいにそうこうしてそれはなくなっていったんだ。そうだったんだよ。生活の向上に従って、また人の生活が少しずつ少しずつ。『清きタミルの流れ』（長編小説）にあるだろう。誰々のゲルが最初は茶色だったのが、後になって天井が白くなって、

最後には外側すべてが白くなって。それはだいたいそういう活動になったんだよ。また、皿やお碗を洗わないんだよ、年配の、そういう少し粗野な人たちは食べるたびに皿やお碗を洗ったりはしなかったのを、洗うようにさせてね。そして一般に下着はつけなかったのを、下着のシャツを着るようになり、パンツをはいていなかったのをはくようにさせて…。そして布団には白いシーツをつけさせるようになって。私たちが文明化した活動だったんだよ、それは。大きな成果をもたらしたんだ。私たちはそのおかげでとても文化的になり、かなり清潔になった。その後60年代くらいまで続いたよ、その文化躍進運動は。また、本を読む。また後になって少しましになってくると、人びとがましになってくると、文化的な面に入り、本を読ませる、読んだ本の要旨、記録をさせるようになった。名前などを書かせて、順番にしてこうやって書かせるような様式になって、人びとをまた検査するんだよ。60何年のころには、またそういうふうになった。それでみんな本を読み、こういう本を読んだとってね。だからまたそれもよかったんだよ、そうだろう。検査してまた、力づくで強制的だとはいっても、また正しい問題だったんだよ、それは。人の頭に本が入る。本を読んだ人というのはまた何らかの見解を持つことになる。本のあちら側こちら側にある意味は人にたくさんのものを与えてくれる。ああ、そしてその時代というのは文学は一般に、生活を学ばせた、良い悪いを教え、学ばせる、そういう作用をしていたんだよ。それはまた正しいことだよ、人の教育にはとても必要だ。その当時、いろいろな悪いことなどは映画などには出てこない、小さな劇などには出てこない。「ああ本当によかった、よくぞ敵を殺した」というように、そういう悪いものを見ると、影響されて人の気持ちにもそういうものが入ってくるんだよ。一部の人が、一時期、だいたい映画を見て、それを見て、真似して事件をやったんだという、一時期ラジオでよくいわれていた。だが、今はそれはなくなった。そうこうしていてやめたんだろう、本当になくなったのか誰も知らない、わからないけれどね。

6 民主化後の生活

D：80年代末、90年代初め民主化運動がおこったとき、あなたはどう思っていましたか。このあたりの人びとはだいたいどんなことを話して、あなたはどう思っていたんですか？

B：最初はというと、私はソムの中心地に行ったんだ。そうして、テレビを持っている家に入ったところ、テレビにそれが映っている。最初の民主連盟の最初の集会だといって。おそらくほぼ最初のことだっただろう。かなりはじめの方の。そういうことがテレビで流れた。そこにうちの工場長がいたんだ。「違う、これはなんと奇妙なことだ、何ていうことだ」。私は少し、驚いて「私たちというのは民主化した国家だろう、私たちは民主国家だといっているのに、民主化した中にまた民主化するといっている、

これはいったいどういうことなんだろうか」, 私はこう考えていた。そして, そこである知識人の若者から, 彼は若いからまた民主化の空気が入りきった人だったんだろう。もともと, うちの工場で管理職などだった技師だった人だよ。後になって, ウランバートルで高い職務をおこなうようになったんだ。大統領顧問になったようだよ, エンフバヤルのときにね, 今はやめただろうよ。今は定年退職しただろう。その人が「違う, これはだいたい信仰を禁止してしまって, すべての人から信心や信じることをなくして, こんなふうにしてしまったから, 今こういういろいろなことが起こってきたんだ。いろいろな事件が起こるようになったんだ。お互いを尊敬しあい, 信仰し, これはいい, これはいけないというそういうものがあるようになれば, たぶんよくなることだろう」と話していた。そして民主化運動の彼らに親近感を持って, それはよくなるよ…考えていたんだろう。だいたい人びとはさまざまな見解をしていたよ。一部は革命党…これよりすばらしいものはどこにあるのか, 一部は「革命党はもういらない, 私たちの祖先を虐殺した, 銃殺した。うちの家畜を没収した, こうした」というていた。彼らはさまざまなやり方で遊牧民の家畜を50頭の家畜だけを残して, すべての家畜を持って行ったんだ。それはすべての遊牧民にとって, また大きな衝撃になったんだよ。そのあと, それを取り戻して, 家畜をもらって, 放牧をしているんだ。また, ネグデルの賃金というものをもらう。それはたいしたことはないよ。一般にどのくらいもらっていたんだろうね。だいたい50, 60トゥグルグ。そしてかなり多かっただとして120くらいをもらえたんだ。私は今, ネグデルでかなり長い年月家畜の放牧をした。すべての家畜を渡して, そして国营農場になったんだ。1年に何頭かの弱い子ヒツジを成育していた, ある春にね。そして, 無事に育てて引き渡した。そうしていたよ。とても大変だった。だいたい家畜の利益や何かは私たちの時代というのは, 社会主義時代というのは, 家畜を放牧して, 搾乳をしても, その労働の賃金は安かったんだよ。だいたい低い…まあ国营農場はネグデルに比べると給与がある, 国营ということからも高い給与だった, 300, たくさんの家畜, 1000頭近く放牧すると, 700, 800トゥグルグをもらっていた。そんなふうだったよ。国营農場はよりよかったんだ。そして私は第5級の溶接工だった, 小麦工場では上級の部類だったんだよ。第6級はもらわなかった。第5級で働いて, そして辞めたんだよ。8, 9級だったかな。遊牧民になることにしたんだよ。そして出るときには私はその級に応じた給与, すべての勤務時間を働くと, 毎月530いくらかの, 560トゥグルグくらいをもらっていた。時間が少ない場合は, 400トゥグルグくらいをもらうんだよ。それは労働者の給与としては悪くなかった。上の方の給与だよ。うちの妻は, また商業機関でまた長年働いた。販売係から経理まで勤めたんだ。また400トゥグルグくらいをもらっていたよ。ある月には900トゥグルグを超える給与, ある月には800トゥグルグを超える給与をもらう, 2人ともそういう給与所得者だったんだよ。それが, 2人で, 突然遊牧民になって, 田

舎に飛び出したんだよ。人びとはいろんなことをいっただろう。この2人のようにばかな者はいないよ、とね。そして草原に出て家畜を飼って。ウシを得た。3頭の乳牛を搾るんだよ、妻は。私はまたそれ以外に自分の7、8頭の乳牛がいる。それらを妻は1人で搾る。私はその何頭かのウシと格闘してね。ウマ、ヒツジは…だいたいウシが合っていたんだろう。乳牛やメスウシ（出産していない）を持っていて、80頭のウシがいたんだろうか、100頭近くのウシがいたんだろうか。そして最初の月の給与をもらう日になった。さあ、かなりたくさんもらえるだろうと思って、走って行ったんだよ。もらってみると、放牧と搾乳で合わせて200トゥグルグに満たないんだよ。

D：国営農場の家畜を飼って？

B：小麦工場の補助産業だよ。そして少し不愉快に思ったもんだ。200トゥグルグに満たないお金のしかならないんだ。わずか200トゥグルグ。その上家畜から取れる利益を利用するといっても、それはそんなにもうかるものではない。そういうものだった。でも、一度決めて辞めると行って出て家畜を飼うことになった、遊牧民になったんだから、また戻りますとはいわなかった。私は47歳で遊牧民になったんだよ、まだ若かった、そして3年がたって、民主化の風が吹いてきて、農場になって、例の多くの子どもを持つ女性たちをまとめて早期退職させたんだよ。そして例の定年の年齢の人たちを年齢制限を低くして、たくさんの人を失業させたんだよ。それに入ることになってしまった。私も50歳になろうとしていた。50歳でネグデルで働いていた者、50歳になると定年退職するように、という法律が出た。それならば早く退職して、年金をもらおうとね。そして走って行って、小麦工場に行って給与のあれやこれやを集めて書き込んだ。そして、会計から給与などの表が出てきて。そして年金が決められたんだよ。91年に入っていた。91年に50歳になっている、そして700トゥグルグを超える年金。貨幣が倍になっていたからね。（為替相場の自由化で通貨の切り下げがおこり、急激なインフレとなった）。もともとは300トゥグルグくらいの額で、それでも多い年金だよ、高い額だった。とにかくそういう金額が決められたんだ。まあいいだろうよ。自分の名前でこういう金額の年金が決められた、その上に自分の名前の上に家畜が移され、他に年金をもらって、こうやって家畜を飼ってずっと暮らすんだ。そうしていたところ、例の20号決定が出た、後になって、ときどき年金は増額するのに、私ののは増やされない。どうしたんだろうと思った。それは個人で何頭かの家畜を所有しているからなのか、田舎にいるからなのか。さまざまな方法で申し立てて、わずかな回数、増額された。そして最後には81,000になって、最近のこの均等というやり方で95,000になってね、そうになっているよ。私はひどく損をして残されたんだよ。その高い給与のときには下へ下へと下げられて、妻と私は2人して下げられた。わずか81,000トゥグルグをこうやって、こうやって下げられるんだよ。その訳はわからないんだ。

D：そして、例の家畜の私有化とって、あなたに家畜を個人財産としてくれたんです

か？

B：いいや。

D：くれなかったんですか？ それではあなたは自分の力だけでこうやって1,000頭所有の遊牧民になったんですね。

B：私には、そう、例の補助産業の家畜を少し分け与えた、くれたよ。いや、違う、補助産業の家畜はくれなかった、いや、遊牧民に1、2頭のウマ、3頭のヒツジをくれたかな。ヤギはなかった、そうだったよ。そしてうちの国営農場は、全く何もくれなかった。国家の核となる群れ、例の改良したものだったから。ヒツジはというとハンガイ種のヒツジになっていた。そしてその時代の長はなぜ、このあたりの民衆もまた、それらを分け与えろ、もらおうと追求するということはしなかった。いい争いもしなかった。そんなふうだったよ。その農場の家畜の…そのあと個人の会社になって分割して、いくつかの会社に分かれてしまってね。それらが家畜を分けて。遊牧民は前のように給与をもらって、その上に家畜をもらって、よくなるだろうと思っていたのに、そうはならなかった。そしてだいたい遊牧民はというと家畜を分け与えろ、おまえたち、これをよこせ、などとそうやって叫び立ち上がりはしなかった。だからまったく分け与えられず、そうして過ぎてしまったんだよ。そして過ぎていって、後になっていろいろなルートから、その会社などはあちらこちらに売り払ったんだろう。一部は移動させたい。ある長やその部下、いろいろな人が隠れて取ったようだよ。こうやってなくなってしまった。ハラホリンの者たちはそんなふうだったんだ。最も子どもが多い、最も長い年月家畜を飼った遊牧民たちには16頭の家畜を与えたんだ、国営農場は。私は小麦農場の者だったから、ただ1頭のウマ、2、3頭のヒツジ、こうして終わっていったんだよ。そんなふうだ。だからハラホリンはまったく家畜を私有化しなかった。このハラホリンの家畜というとだいたい民衆が自分たちの力で、自分たちの力だけで育てているものなんだよ。ネグデルはというと、その後、持っていた家畜をそのまま取って残したんだよ。うちはというとこちら側でホジルト・ソムと隣接している。私はちょうど境にいて、今は家畜をあちらこちらに移動させている者なんだよ。そしてこちら側の人びとというと、見ていると、こうやってこんな家畜をもらった、そしてそのたくさんの子どものものをまとめて、上から追加してもらって、こんなふうにもらっているんだよ。ハラホリンはそういうことなどはない、こうして終わってしまった。

D：ネグデルの家畜はそうやって分散して？

B：そうだよ、人びとに行き渡ったんだろうよ、民衆に。国営農場の家畜はだいたい消費されてしまった。さまざまな2、3の会社だろうか、いくつかの会社に分かれた。そしてその会社が分割して。そしてそれを売り払って、あちこちに渡して、いろいろなことがあったんだろうよ。私たちは中に入ってそれを見たわけじゃあないよ。で

も、そういわれていたよ。そうやって終わったんだよ。

D: では、国営農場は家畜を配分してくれず、ネグデルは遊牧民に配分してくれたんですね。

B: うちのハラホリンはくれなかった。その他の国営農場がどうだったのかは知らないよ。ハラホリンは…。

D: このあたりはそうだったんですね？

B: このあたりのは、まあねえ、遊牧民に16頭をくれただろう。それ以上はなかった。

D: 社会主義時代、放牧地の分配、今では放牧地の奪い合いなどが起こっていますが、そういうことがあったんですか、一般に放牧地についてはどうでしたか？

B: いいや、その時代というのはいたいね、一般に国営農場の家畜だけがいる。国営農場の家畜はまた頭数制限があった。個人の家畜というとそれはない。世帯ごとに16頭の家畜。そんな数では何もおこらないよ。そうして、中心地に暮らしている者たちはほぼ家畜を持っていない。私のように地方の者たちは少しの家畜を持っている。彼らは両親や兄弟のところに家畜を預けていてね。少し遠いところから来た者たちはそんなに家畜を持っていないよ。

D: 今では家畜の放牧地の問題が出ていますね、一般に人びとは奪い合っているんですか、どうですか？

B: 問題になっているよ。うちのこのあたりではそれほど奪い合いにはなっていないよ。でも、一般に家畜の放牧地は問題にあっている。そして放牧地は不足してきている。家畜が非常に増えた、一番の原因は家畜頭数が非常に増加したことだ。ヤギがととも増えた。

D: ああ、ヤギはお金になるといって？

B: そうだよ。一般に家畜は増える方向、多すぎるんだ。だから家畜の放牧地の問題は困難になっている。

ああ、それで家畜私有化のときにはもらわなかった、以前あった家畜を育てて、そうやって暮らして来たんだよ。

D: そうですね。あなたにはどんな家畜がいますか？

B: そうだね、ウマ、ウシ、ヒツジ、ヤギがいる。

D: 家畜の牧草地は今、大変な状況になっていますか？

B: 大変だよ。一般に降雨が少なくなっているからね、よくない傾向になっている。うちのこのあたりは、ハンガイの草原地帯なんだよ、ハンガイ地帯。それなのに、少し早魃が続くと、草が生えないんだ、よくない傾向だ。そして90何年には砂漠化、それが北側に広がってきている。何年後かにはハンガイ地帯に進んで来ると新聞に書いてあるのを讀んだよ。このあたりはさすがにならないだろうけれど…。

D: そうでしょうね。

B：そのように私は思っているんだよ。でも、とても早く、目に見えて、砂漠化している。昔生えていた植物、草、花など、知っているそういう草や植物が今はなくなっているんだよ。すべて消えてなくなってしまうている。今このあたりではツァヒラーという、テヒ・トホイという家畜をよく太らせる草、それは敷物を敷いているように生えていたんだ。それもまた今ではまったく見かけなくなった、そういう例があげられるよ。

D：それはどうしてなくなっているんですか？

B：まあね、湿り気がないからね。

D：ああ、雨などが降らない。

B：降雨がなく、乾燥してくると、草は水分や湿気を余分に使うんだよ。そして一般に湿気のない乾燥に強いロー *luuli* (アカザの仲間、学名は *Chenopodium*)、シャリルジ *Sharilj* (ヨモギの仲間、学名は *Artemisia*) そういうものが生える状況になっている。だが、一部ではローリ、シャリルジさえも育たない。ローリ、シャリルジが生えているというのは、どういうことかという、ハムフル *Khamkhuul* (オカヒジキ、アレチヒジキの仲間、学名は *Salsola, Corisoermum*) という草〔灌木〕がある。それがより多く生えるんだ。それは家畜が食べるには太くて固い。非常に空腹な家畜ならばそれを食べるだろうよ、それでも一応家畜のエサにはなるんだろう。一般に細いよい草は生えてはいるようだけれども、それはとても少ないんだよ。そして生えている場所の土地の広がり、植物の広がりについていうならば、アニス *Alirs*, (コケモモ、学名は *Vaccinium vitis-isoaea*) の葉っぱのようにこうやって密に生えるんだ、うちのこのあたりではそういうふうには生えていた。それが今では、茂みが少しずつ5、10cm くらいの距離でぼつぼつと生えているだけだよ。そしてそのあいだには土が出てしまっている。そして強い風がふくと、土が舞い上がる、地面に湿気がないから砂が舞い上がってね、風が吹くたびに草の周りの土が風で飛ばされて。そして、生えている草の根が出てきてしまう。生える生命力も弱くなる。そして生えなくなる。溝やくぼんだ場所などの上側は砂で覆われてしまい、植物は砂を突き破って出ることができない、そしてそこもまた砂になっていく。

7 民主化以降の宗教復興

D：ここのシャンハの寺院はいつ再興されたんですか？

B：シャンハの寺院、今ここにある寺院は最近再興されたんだよ。最初にはその「パロオン・フレ (西の寺院)」という、それはというと初代ボグド・ハーンが11歳のときに作られたというよ、そう話されているようだよ。そして後になって、ある貴族の僧が今ここにある堂塔などを建設して、そこに自分も暮らしていた、そういう寺なんだよ。それより前のパロオン・フレというのは、今は跡だけがある、それ以外は何

も残っていない。

D：1990年以降、再興されたんですか？

B：再興された。ここでは3つの堂塔が再建されているよ。もともと完全に破壊されてはいなかった。真ん中の、3つの堂塔の真ん中側のものは、こういう高い、2層のそういう構造なんだよ。私が学校で学んでいるころは、屋根を外して捨ててしまっていた。後になって、こうやって屋根をかぶせて、こういう丸い屋根にして1層にしてね。1層にしたのにこうやって板で屋根を作って、そして、その後は組合の商品倉庫や、原材料の倉庫にしてしまったんだ。そしてその3つの堂塔は、組合の所有物として残されたんだよ。そうやって残っていて、その後、ネグデルが解体されて国営農場と合併した。シャンハもほとんどソム中心地という意味を失ってきて、ブリガードの中心地ようになってしまったんだよ。そんなふうになっていたんだ、住民たちは高齢の、その昔は僧だった人たちで、いつのころに住み着いたのか、そういう年をとった人たちがいたんだ。後になると、生活のために仕方なく、彼らの子どもたちはソムの中心地に移っていく。そして、それに従って、またいろいろな物の近くに暮らすために、こうやって移動しつづけて、人が減り続けて、そして下の堂塔はなくなってしまった。その上の中心地というのは、ブリガードなどの中心という形で、まだ状況はそう悪くなかった。後になって、例の寺院を復興させることになって、復興された。その端の2つの堂塔はまだ無事だったが、真ん中のものは屋根が壊れてしまっていた。そして2つの小さな端の堂塔を少し修復して、そしてそこに入って法要や読経を始めたんだ。その後、その真ん中の堂塔を以前の状態で再建して、そして3つの堂塔になったんだ。これはまあ大丈夫だろう、まさか壊れることはないだろうよ。こちら側のそれは、私がさっき話した、寮の子どもたちのあれだったんだよ、台所だったという2つの小さな堂塔だった。その2つは後になって、ネグデルの倉庫にしてしまっていたんだよ。そしてそれがどうなったのかは、まったくわからない。どうしたんだろうかという、ハラホリンへと運び、そしてハラホリンに建てていた建物へと壊して運んで、そしてレンガは利用して、礎石はというと、このクラブ（集会所）の玄関の階段があるんだ。これはそのシャンハ寺院の堂塔の礎石、そしてエルデネ・ゾー寺院の礎石などなんだよ。これらを持ってきてこうやって利用したんだ。

さあ、そのシャンハ寺院は後になって、80何年、70何年になって、外側というと、生レンガのこういう石造りの壁があったんだ。外側には鉄飾りのあるこういう青い石で作られていた。そして中には生レンガの石で作った、そういう壁を持っていた。それまでも取り壊してね。ここに、うちのこのあたりに、後になって功労建築者になった人がいた、ここにいた、建築のゴンボという老人がいたんだ。彼がこの建築の仕事をしていた、ほとんどの破壊作業をしたんだろう。そして、こちら（ハラホリン）に運んで来たんだ、党指導部がそうしろといったんだろう。その時代というのは党が真

っ先に語られる、そして国というのは後で語られるもんだった。その宗教の教えを普及させているものを破壊しろ、といったんだろう。そして破壊して、そして運んで、運んで。もともとこれはネグデルの中心地だったんだ。感じのよい管理部や何かのある、比較的大きなクラブを持っていて、丸太で建てられていた、細い若い木で建てられた、大きな、田舎のソムとしてはとても立派な、感じのいいクラブなどがあった。そして学校など、いろいろなものがすべてあったんだよ、ネグデルの中心なんだからね。そうだった。そして、例の国営農場と合併したことで、後になって、それらすべてを壊して、どこに運んでいくのか、あちらこちらに運び去って、そうしてなくなってしまったんだ。そして後になって寺院が再建されて、また人びとも多く住むようになって、今では1つのバグの中心地になっているんだよ。そしていろいろな子どもたちを寺に入れて、またかなり規模も大きくなって、一時期を思うとまた人びとも暮らすようになった、それなのにまた再び移動してしまったよ、こちらに戻ってね。そこに今は店が1軒あるだろう。そこはここよりも値段が高いよ、ここから運んでいくものだから。あれやこれやいろいろ障害になるものがあるんだ。そして今はわずかな世帯、20いくつもの世帯があるようだよ、ひどいね。20軒くらいの家があるようだ。そんなふうになってしまったんだよ。

D：再興された寺は、今、活動していますか？

B：活動しているよ、少ない人数で。10何人かの僧、登録上は20何人の僧がいるんだよ。年配者はそこに住持しなくなった。比較的若い、若者や子どもたちがいる。昔そこにいた、最初に寺に入っていた者たちは今は偉い僧になって、ウランバートルに行ってしまった。ほとんどが都市に。一部は仏教学校の教師にまでなっているようだ。一部はいろいろな寺にいるんだろうよ。そうだろう。今ではここは僧になって住持するには、世間から隔離された場所だろう。進歩やさまざまな物からも遠い。恒常的に電気はあるから、テレビなどはある。そして、その僧というのは寺に住持して、こうやって法要をおこなって、こうやって暮らしている。もらえる給与やお金はわずかだよ。2万、3万トゥグルグあるかどうか。そんな状況で若者たちがどうやってここに定着するっていうんだ。その上、妻子を持った、子どもができた。自分を養い、その上家族を養うためのお金が必要になってくる。そうしてウランバートルに行ってしまうんだよ。ゲセル寺の近くにたくさん住んでいるというよ、うちのこのあたり出身の僧たちが。そしてあちらこちらでいろいろな寺に住持するんだという。なかなか優れた僧たちがいるんだよ。

D：あなたは時々寺院などに行って、読経させますか？

B：させるよ。

D：どこに行って読経させますか？

B：シャンハで読経させているよ。ここ（ハラホリン）でも読経させる。2カ所だね。

シャンハツまりバロン・フレーというのは、私の先祖たちが暮らしていた寺、小さい頃仏弟として暮らしていた寺。

D：あなたの？

B：父や兄たち、先祖たちはこの寺に暮らしていた。そういう意味で、私はまたここに行く。だいたいがうちの所属していた場所だからね。ここに（ハラホリン）に行くというのは、ここに定住しているという理由から。どちらにも同じように参拝するよ。

D：今はまた社会主義時代を思えば、宗教や信仰は少しは広がってきましたよね。

B：おお、広がったよ。宗教はきまり通り進んでいけばそれはそれでいいと思うよ。一部ではまた少し誤って進んでいるといたくなるようなことも見かけるがね。宗教という名前を使っている者がいるのはどうしたもんだらうかね。いろいろな寺に所属せずにいる僧がいるようだね。彼らはまた、自分の個人的な利益を見て、でもまあ、自分たちのできることをしているんだらうけれどね。だからそういう僧のところに人びとが通っているということなんだらう。もしも、何も知らないとしたら、人びとがどうして通うものだらうか。でも、私の考えでは一般にある寺院の所属になって、そしてそこで経典を読み、信仰しているのが、本来は適しているように思うんだよ。私としては少し批判的に見ているよ。一部は個人の利益や興味ばかりを考えているんだらうか、でも、自分ができているのなら、まあ、それでいいのかもしれないね。彼らはまったく住持する場所がないんだらうよ。市場経済化したからこんなことになっているんだらうよ。

D：今、この僧たちは仏教の、一般に仏教についてあれこれあるんでしょうか。さまざまな教えなど、今人びとに布教するなど、そういうことをしているんでしょうか？

B：行かないよ。うちのこのあたりでは、そういうことはしていない。民衆が自ら、自らの信心で寺に行き、徳のための法要をさせて、助言をもらって、こうやっているんだよ。

D：あなたは仏教というと、こういう宗教なんだという、どういう理解をしていますか？

B：ああ、まあねえ。これはだいたい仏教というのはもっとも慈悲深い、もっともそういう宗教だよ。また科学ということもできる、仏教とはそういわれているが、それは本当だろう。だいたいどの宗教でもいいんだよ。ときおり本や何かで宗教の教えなどを見かけて、ときどきそれをめくってみると、人の幸せのためにと、すべての宗教はそういうよいものだよ。そしてだいたい『オチル・オクトロクチ』というアメリカのある仏教者が書いた本がある。昔の『ドルジゾドヴ』だよ。それを自ら翻訳したんだよ。『ドルジゾドヴ』を利用して、非常に成功している。これは最上のものだと、そういわれている。この仏教の本というのは、モンゴル語で読むと私たちは理解できない。大きな哲学の非常に深い意味のある本、それはほとんど理解できない。少し筋を追ってみて、追いかけて、先に進む人ならば、理解できる。私のようなこうい

う一般民衆はまあねえ、正しい宗教だと思っている。だが、一般にどの宗教であっても、人の幸せのために祈るものだよ。それをおこなう方法が違うんだと、その人は書いていたよ、遂行させる方法がね。だいたいモンゴル人は仏教を信じているのが正しいことだと私は思っている。いろいろな宗教が入って来ているよ。いろいろな宗教が入ってきたといわれている。例のイスラム教などがあるのかどうか、よく知らないよ。キリスト教はかなり入ってきているようだね、いろいろと。

D：そのようですね。今ではかなり入っていますね、また。

B：そう、かなり入ってきているというようにいわれているようだね。引きつける方法がいろいろあるんだろうよ。どうかというと、例えば家のない人、飢えた、貧しい人たちを連れてきて、食事を与えるんだ。またああいうこともするらしいよ、体の不自由な人たちをかなり集めさせているというようだ。そういうことで人を引きつけている。仏教などはそういうことはしない、自らの信仰心で人びとがやってくる、そしてまあこれでいいと考えているんだろうよ。そのキリスト教を信じている人びとはまた強固な信仰を持っているようだね。うちの妹の2人の子どもは話すことができないんだよ、ウランバートルにいる。その2人はキリスト教の教会に通っているらしい。仏教はいらないんだという。1人はキリスト教を特によく学んでいるようだよ。自分の頭で物を考えることができているんだからね。彼らから得られること、得ることが1つある。その1人の息子が結婚して、家を持った。ウランバートルにいる。そこに訪ねて行ったんだよ。だいたい人はそれぞれ違うものだよ。その若者たちはみんな話すことができない、例の体の不自由な人たちの学校にいて、そしてそこを卒業した男の子たち、女の子たちなんだよ、大勢のそういう話すことのできない子たちが来るんだ。そして後で、彼らを入らせるんだよ。普通の人たちと一緒にさせると彼らは何もできなくなってしまう。そしてクラスメートは結婚式の一番後になって全員で入ってきた。彼らというのはこうやって、大勢で笑っているんだ。私はというと横で話すこともできない。入ったとしても何にもできない。ときどきそこに行く、あちらこちら行くんだ。彼らはみんなで一斉に笑ってね、とても楽しく、お酒を飲まない、まったく飲まないんだ。そして飲み食いして、ジュースなんかを飲んで、そしていい食事を作って食べて、そして騒いでいるんだよ。酒は飲まない、酒は悪だと、まったく飲んではならないんだよ。少しは飲むかもしれないけどね。彼らというのはその中で1人飲むことなんてできない、でも、外では飲むんだろうよ。とにかく常には飲まない。彼ら若者たちはとてもいい、一番重要なのは酒を飲ませないことだ。自らの気持ちを禁じる、アルヒは必要ないと、そういう理解が生まれたように思われたよ。それはまたいいことだよ、それはまた適しているよ。聞こえない者たちがアルヒを飲んでいろいろなことになっていくとしたら、どうなるだろう。とても知恵のある学のある者であってもアルヒにおぼれてしまうとどうなっているか、そうだろう。そう思えば、

彼らをまた1つ正しい道に入らせたんだと、私は良いことだと思っているんだよ。他のことは何もわからないよ、聖書などはわからない。それどころか自分の宗教の経典すらも知らないんだからね。

D：田舎などでも今キリスト教の人びとがいますか？

B：いないよ。うちのこのあたりは、この中心地には1つあれがあるというよ。キリストのそういう支部や何かが。教会といっても普通の柵で囲まれたもの、そういうのがあるんだというよ。どんなものがあるのか、私は興味がないんだよ。知らない、ただそういわれているよ。教会なんかを回ってどうこうする、そういうのがあるようだね。

D：多くの宗教がはいってきていますね、モンゴルに。

B：モンゴルにはいろいろな宗教があるようだ。よくいわれているのはモハメドだったか、イスラムだね。知っているのはキリストとイスラムの2つだけだね。4、5つくらい宗教が入っているそうだね。それらやその他のものがどのくらい入ってきているのかはよく知らない、違いはよくわからないよ。イスラムはカザフ族が信仰しているというね。

D：一般に、さまざまな宗教があったほうがいいんでしょうか、あるいは以前のように仏教だけがあったほうがいいのか、どうなんでしょう、あなたはどう思いますか？

B：まあねえ。折り合ってね、宗教間でうまく適合して、よい関係を築いて、上下になることなく、同じレベルで、そうやっているならば、それらを厳しく追い払ったり禁じたりすることはないだろうよ。ただ、様々な宗教的な分裂や争いなどについていろいろなことがいわれている、そんなことになってくるのだったら、またよくないことになるよ、そうだろう。そうすることなく、みんな同列でこうやっているのだったら、何もすることはしない。そのまま一緒に存在していればいい、それをあれは悪い、これはいいというように、追い出したりする必要はない。私にとっては必要ないね。また1つの亀裂を生むことになるだけだろう、そうだろう。

D：あなたの世代では、結婚するとき両親が引き合わせてくれていたんですか、自分で見つけていたんですか？

B：自分で見つけるよ、自分で。その時代というのは両親が関与することはない。私たちの時代というのは、そういうことはとてもオープンだったんだよ。いろいろな金持ち、貧乏の違いなどもない。みんなできる程度の同じような結婚式をしていたんだ。もちろん、金持ちの人たちはいたよ。でも、うちの田舎ではだいたいと同じような生活レベルだったんだよ、帽子を着ているものは帽子を着ているもの、少ないものは少なく、多いものは多く、貧乏は貧乏だった。でも、そこに特に禁止したり、障害になるようなことはなかった、この人と結婚しろ、絶対にこれだという、そういうものはなかったんだ。そして、自分たちの気持ちが一致すれば必ず…それは、今はそのころとは違うようで、金持ちは貧乏人とは結婚させないというような、そういうことが都

会ではとても顕著なものなのじゃないのかい。映画などでみていると、本当なのだろうと思われるよ。それらは空想で作られてはいない、物には必ず元がある。フィクションでないならばね、そうだろう。フィクションならば違うだろうけれどね。今テレビでやっている「困難なクラス」という番組、これもそういうものが現れているようだよ。

D：そうですね、それは。

B：それは本当だろう。一般に田舎の子どもたちには特に関心をもたないかもしれない。いや、関心を持ったとしても、都会の人びとはさまざまな見方や考え方が、田舎の者とだいたい合わないんだよ。違うんだよ。田舎の者たちは一般に同じようなものだから、大丈夫だよ。物ごとに裏がなく、人として悪くなっていない。物事をいろいろ差別して見たりしない、そういうことはあるだろうよ。物ごとを区別してあれだこれだ、貧乏金持ちなど、いろいろなことすべてを区別するようなことはしない。さまざまに何かを利用する、利用しよう、そういう気持ちはない。都会の若者たちを見てみると、一部は利用して、利益がなくなればそれが友達でも、夫でも、妻でも、捨ててしまおうというような考えになってしまっているんじゃないだろうか。

D：ええ、そういうことを見かけますね、また。

B：そういうことを見かけられているようだねえ。それはだいたい間違った育て方だよ。財産というのは恐ろしいものだからね、仕方がないのか、今は人が金持ちになって生活する、金持ちの人はよく見える。よく見えない人などはない。いい生活をするためには何が必要か、金。じゃあお金をどうやって得ようかという問題が起こってくる。そしてその問題が出てくると、非常に間違った方法で得ようとする。私ならば、今お金が必要になると、さあ、どうしよう、何をしてお金を得ようかと考える。だが、今の一部の人びとはどうやって何とかうまい手で人からいくら借金できるか、そういう考えをしている。何かをしてお金を得ようというそういう考えがないんだ。年寄りの私が少し何かをして何ができるだろうか。工場を設立しようとしてもできない、何かをすとしたら、少し皮をなめすくらいだろう。それから手で何かを作るよ、作ろうというならば作るよ。柔らかい石があったら、それを彫刻することができる。でも、それをどこに持って行って売ることができるだろうか。もともと私はやるとなれば、悪くないものを作ることができる。かなりの物を作ることができるよ、また。鉄でも、薄い鉄ではまた第5級を持っているんだよ、また悪くない鍛冶だよ。軍隊にいるときに学んだんだ。そしてこの小麦工場で溶接工の横で一緒に働いていて、それをマスターしたんだよ。通風口の計算で、ほぼ最初から線を引いてきたならば、次の物はこんな感じだと作ってつなぐことができる。いろいろな調整などもすることができる。溶接は人に負けないくらいすることができるよ、また。でも今私にするべき何かがあるというんだ。私は年寄りで、冬の寒い時期に外や道路に座りたいわけではない。もしも

今40, 50歳くらいならば、溶接の小屋を作って、物の溶接をするならば、私のところに人がやってきて、仕事をさせているだろう。人に負けない溶接ができるんだからね。今70歳になっている者が、どうやって今それをするができるだろうか、そうだろう。もちろん、若者の中でも一部はそうやっているだろう。ただ、みんながみんな、これをすれば5, 10トゥグルグを得られるから〔働こう〕というような考えは、今なくなっているよ。どうしたら簡単にお金をもうけられるか、とね。簡単にお金を得る、いい暮らしをする、アルヒを飲む、いいタバコを吸う、そういうようなことを考えている。そしてそれをどうやって獲得しようか、でもそれに到達する何の考えもない。

D: この地域にホトクトや転生者といわれた人がいたんでしょうか、人びとが話していた、地方の人たちの話の中でいわれていた？

B: うちのこのあたりではいなかっただろう。この2つの寺院の上位の僧たちはとても優れていたと話されていたよ。私のさっき話した2人の僧がいたという、その1人はホトクトや転生者というような名前ではなかっただろう。でもとても優れた僧だったといわれている。ガンダン寺などにいた非常に博識な学者僧だったといわれていた。今となってはわからないよ。よくわからない。おそらくそういう人がいたんだろうよ。ただ普通の、何々ホトクトなどという名前は特になかっただろう。おそらくね。ここにあるいい伝えがあるんだよ。「エドギーン・ゲレン（修道僧）」というある修道僧がいたんだという。うちのあるあたりのこの近くの南側にエドギーン・エンゲルという場所がある。そこに1人の修道僧がいたといわれている。そういう伝説があるんだよ。彼はかなり貧しい生活をしていて、年老いた親と2人で暮らして、5頭のヤギを持っている、そういう暮らしをしていた人だったんだ。いつの時代だったのか、どの時代にいた人なのか、伝説になってしまったらしく、詳しくはわからないんだ。そしてボグド・ハーンが彼を呼び出したという。そして2人で、年寄りと一緒に5頭のヤギを引き連れて、ボグド・ハーンの前（首都）に行ったんだろう。進んで行き、ボグド・ハーンの前に着いて、5頭のヤギの乳を搾ってタラグなどを作って、それを少し集めて分けておいたんだ。小さな革袋のようなものがあつたらしく、その小さな入れ物に入れて持って行った。そのタラグをガンダンの容器に入れたところ、その容器にいっぱいになったという、その容器が。ほんの少しのものをこうやって入れたところ、いっぱいになった、そうなんだというよ。とても不思議な力のある人だったといわれているよ。それは、まだ例の弾圧の時代だろうか、何かで捕まえて釈放されたのだろうか。どうしたのか、とにかく何か罪を犯したらしい。役人が捕まえに行つたところ、あちらこちらにそのエドギーン修道僧が座っているという。あそこにもその人、ここにもその人、あちらこちらにたくさんのこのエドギーン修道僧が現れて座っているのだという。そして、どれも捕まえることができない、役人は仕方なく戻って行ったという、そういう伝説がある。伝説だよ。ここから北の山裾に、少し

こういう高い、山の山裾に、こういう小さな丘のような、小さな突起の、岩がその頂上にある、そういう山裾のある場所に、こういうオポーがある。それがその人の遺骸だろうと、そういわれているんだよ、そのように語られている。そして、その人がいつの時代に生きていたのかはわからないんだ。

D：エドギーン修道僧。さあ、それを研究してみる必要がありますね。どんな人だったんでしょうか、その人は？

B：そして、そのボグド・ハーンのところに行ったのだというよ。経典を読み、そうすると人びとは魔法見せろといったんだという。ボグド・ハーンはその人の力を知っていたけれども、その他の人びとはよく知らなかったことから、特に気にならなかったという。その他の僧はよく知らなかったんだらうよ。そして、あなた、さあ、魔法を少し見せてくださいというと、その人はオンザドのような大声で読経したんだという、驚くような大声でどんなリズムだったんだらうか、寺院の屋根がこうやって割れるように震えて、また上から埃などが落ちてきてね。ああ、もういい、もうやめなさい、とボグド・ハーンはそういったんだというよ。そんなふうだった。語られているよ。彼はでも、特に学問を追究して、本などを書いたなど、そういうことはしなかった人のようだ。だが、その人が他に何をしていたのか、誰も知らないんだからね。とにかく、そういう魔術を持った者、違う力のある人だったんだよ。そうだろう。そう語られているんだよ。

D：他にそのように語られている、地方でいい伝えられている、そういう僧や転生者はいたんでしょうか？

B：知らないね。特に知られていないよ。

D：最近になって、こうやって、オポー（土地の神）や水などをまつると、雨が降ったりしますか。一般にそれと関係がありますか、ないですか？

B：いいや、でも少しは降ったりすることもあるようだよ。

D：まつると？

B：ああ。まつっていると、だいたい少し20、30分後に少し雨が降りそうになる、少なくとも少し風が出て、一瞬、天から強く雨などが石をばらまくように落ちてくる。そうしていると、ああこれは間違っまつたんだらうとって、またみんな笑ったりする、そんなものなんだよ。でも、少しは物が降ってくる。降ることは降る。たくさんではなく、少しのもの、少しではあるけれども物を見せてくれているようだよ。それはまた、だいたいまあそれでいいとしているんじゃないだらうかという気持ちが生まれているんだよ。

D：あなたは家で灯明やお香をあげますか？

B：あげるよ。モンゴル語でならば、モンゴル語の経典があれば、それを読む、モンゴル語で読むんだよ。

D：おお、どうやって学んだんですか？

B：自分で、独学でね、試して努力していて学んだんだ。

D：社会主義時代に？

B：そうだよ。草原に出たあと、かなり努力した、まあまあよく読むことができるよ。モンゴル語の経典もまた難しい、一部はね。バリーン・オロイン・ノム（木版経典）は前にあるna, gaの句点がない、そういうものなんだよ。読んでみて、少し見ていてこうしていると、慣れてくると読むことができる。手書きの本は、そういう句点がないけれども、また人が書いた物は違う。その時代というのは、キリルのようにこの字のあとには必ずこういうものがなくてはならないという、そういうものはない、人がそれぞれ自分のやり方で書く。時にはあれだよ、名詞は同じ読み方をする語だから、同じように読む語があるんだよ、そういう語はというと、それらすべてを分けて書く。それはというと字を違えて書いてある、そういうものだよ。そしてそれらを、私はというと辞書があるわけではないから、同じようにこうやって書くことはできない。でも、読むことならば、こうやって同じ読み方をする語だから、読めるよ。そして、それ以外にもいくつかの経典を書き写したんだ、まあ、興味があったからね、趣味というかね。冬になるとテレビなどもないし、ラジオを聞くくらいだよ。ラジオを聞くんだよ、私たちは。ラジオは一般に最もたくさん情報を与えてくれるものだよ、テレビよりも多くね。そして日中、仕事をして座っているときに、ラジオから放送が聞こえてくる…耳をすませて座っているんだよ。情報を得る。そしてラジオが終わったあと、ロウソクの火をつけてめがねを掛けてそしてそれらを書き写すんだよ。そう、いくつかの経典、アルタンゲレル（Suvama-prabhasottama-sutra）、バンズラクチ（Pancharaksha）、タラヴチムベ（Sanskrit: Arya-ghanaja-mahabhricaphulukarma-avirnasodhaya-bhudharakusumasancaya-sutra）、ダラブジャヴ、そしてナイマン・ゲゲーン（八陽経）など、いくつかの経典を書き写したんだよ。時々風を通す、でもそのすべてを読むことはないよ。今では快楽に陶酔して、テレビにうつつを抜かして、まったく本を読むことができないんだ。本はたくさん持っていたんだよ、私は非常に読書をする者だった、でも今は読まなくなってしまった。ああ、無駄なアメリカや韓国映画を見て、それはというと人が殺しあって、罪悪を集めてね、こいつを殴ってしまえ、こいつを殺せ、とね。だいたい体と言葉と心の3つの罪悪というのは、心の罪悪を集めているということだよ。10の黒い罪悪というと、この3つの上にあるんだという。これはというと、舌には4つの罪悪があり、心体には3つずつの罪悪がある。こうやって10の黒い罪悪、この体から出ているんだというよ。そうするとそのテレビを見て、これを殺してしまえと座っているというのは心の1つの罪悪を犯しているということになるんだよ。仏教の経典はわが国の昔の名訳者の僧侶たちがすばらしい翻訳をおこなった。その翻訳した経典はまさに母語で、母国とする人が著したように書いてあるんだよ。

彼らというのはだいたい賢明な知者だったんだろう、本当にすばらしいものなんだ。

D：今の、昔のモンゴル語から新しいモンゴル語へと置き換えると、また現代の人びとは理解できないといいます、そういう話もありますよね？

B：そうだよ、そのまま字を置き換えただけならば理解できない。意識して、ダムディンスレンが元朝秘史を現代モンゴル語に置き換えたようにうまく、そうやって訳したならば理解できるだろう、精選されたモンゴル語にね。そうすると、その翻訳者の力量、知識が問題になる。今、仏の教えとって、エンフバヤル（元大統領）の翻訳があるだろう。それを読むと、まったく、仏教の教えがまったくとっていいほど聞こえて来ないんだよ。読んでみるとキリスト教の聖書、聖書を翻訳したようだ。

D：ああ、なるほど。

B：翻訳がそのように不完全なんだよ。仏教の経典というのは、読むと流れるようになってくるんだよ。それが、この使われている言葉や語句はというと（ひどい）、それは何ら学歴のない私のようなものが翻訳しているんじゃない。そうだろう、学者で優秀な人だろう、翻訳を専門とする学者なんだろう、エンフバヤルは。それなのに非常にできの悪いものなんだよ。聖書を読んでいるかのように思われてね、そう感じられるんだよ。ああ、だがアメリカ人の僧の書いた本、これはこのように見えたよ、モンゴル人が翻訳したようだ、それはとってなかなかよく翻訳されていたよ、いい翻訳だった。

D：そうですね、キリルで書かれた経典も必要ですよ、また？

B：ああ、そうだよ。必要だね。だいたい宗教を信じようというならば、信仰を持つとしていなければ、経典を知らないことが妨げになっている面がある。それはあるだろう。モンゴル語になっている経典はまた理解できない。だいたい仏教の経典がキリル文字で書いてあったとしても、理解できないよ、哲学の本などは理解できない。少し平易にした教理の本ならば、さまざまな教訓がたくさん載っているんだよ。それならば理解できる。『バダムサンボー師の教訓』という小さな本がある。それはとってほとんど詩歌だよ。そして、その人が善悪どのような道をとるべきか、完全な教えの本だよ。こういうときはこのようにおこなう必要がある。大体は教訓なんだ。そしてまた、詩歌ともいえる。そういう非常にすばらしい翻訳がある。バダムサンボー師という人は10何世紀の時代の人だよ、ほぼ、チングスの時代の人だろうか、そういうチベットの人だよ。それより前の時代かな。いつも私は覚えられないんだ。とにかく、その人の書いたものをモンゴル人が翻訳したのがある、それは驚くべき翻訳だといつもそう思うんだよ。ただのモンゴル人がその人の名前を書いたとしたら、彼は詩人としてもまた優れた人だよ。どこを取ってみてもすばらしいんだ。

D：では、いいインタビューでした。本当に感謝します。

B：ああ、少し話しすぎたかね。いろいろな種類のテーマに関して話したね。

D：そうでした。

B：仏教など。

D：でも、とても興味深かったです。このすべてがまたモンゴルの歴史として残りますね。

B：社会主義時代というのは、だいたい資産を持つというような理解はない。ただまあ、そういう賢い知恵の回る人たちなどはそれを築いていたんだろう。もしも資産を持っている人たちがいたら、軽蔑して、「この悪い強欲者、どん欲、そいつは欲張りだ」という感じで批判する。長たちはもっとひどい対応をする、このどん欲な奴め、とね。ああ、ほとんどみんなそういう風な反応でね、そうだったんだよ。そしてまあ、一般的に500以上、500トゥグルグ以上の給与をもらって、一ヶ月生活する。70トゥグルグの布というのがあった、60年代に。他にもいろいろ高価な布がある。これで男たちは着飾るんだ。絹やちりめんは10いくら、20いくら、30いくらという絹がある、女性たちはこれで着飾る。それらを買って、そして食料や燃料を準備する、こうして十分に生活していたよ。楽しく暮らそう、そういう考えだったよ、私たちというのは。だいたいそうやって若い時代を過ごした。今の人たちはというと、少しお金を得ると、それよりもっと稼いで、こうしようと考えている。一部の人は得ようとして必死になって、いろいろなやり方で努力している。一部はまあいいやといって、あるままに、私のような者はそのまま、得られたお金を丸ごと使って何とか暮らしている。そうしてね、この2つの社会（社会主義から資本主義）になって、全く逆の社会になってから、私たちというのは、一時期ひどく衝撃を受けたんだよ、一般に。今でもその衝撃から抜け出せないでいる。一部、生活があまりよくない者というのは、とても貧しく、貧困状態だろう。どうしようもなくなって、彼らはマンホールなどの穴に入って、子どもたちを道に捨ててしまうだろう。疲れ切った者のすることだよ。

D：あなた方の時代は冬の食料の準備や、搾乳した家畜の乳などを、個人的に利用していましたか、どうでしたか？

B：ああ、もちろんそうしていたよ、それは。私のように田舎に親戚などがいて、両親に何頭かの家畜があるならば、自分たちでそれを食べるよ。そしてまた、自分の物だけで足りなければ、国营農場から決裁させる。ヒツジやその他家畜を決裁させて食べる。遊牧民は、国营農場の労働者は、ウシやウマを決裁させて食べるんだよ。その帳簿はどうなっていたのか、そこで決裁させて、ウマをつないでおく綱から選んで連れてきて、そうして食べるんだ、そういうものだった。食料不足といえば特にあふれるほど豊かではなかったけれども、でも特に欠乏して困窮するほどではなかったものだよ、だいたい。食料不足ではあるけどね。モンゴル国というのは人が飢え死にしたことのない場所なんだよ。この何頭かの家畜、これがあるからね。ああ、特別なあるたとえ話を話そうか。2人の貧乏人が1人の金持ちの家畜を放牧していた。その2人

には持っている物は何にもない。そして、ヒツジが出産する時期に、その家の家畜を飼う仕事をしていた。その2人はとても努力してヒツジに子どもを生ませて、育てている。その金持ちは思った。「さあ、この2人にはまったく食べるものがない。この2人は今、私のヒツジから食べているんだろう。飼っているヒツジの中から少し弱いものを屠って食べたに違いない。他に食べるものがないんだから、何を食べるというのか、この2人は。何もいわないということは絶対に食べている」。こうして、ある深夜、彼らのところに行ってみた。夕暮れに行って、ゲルの外で耳を澄ませていると、天井から煙がくすぶり、食事を作っているようだという。「やっぱりそうか」と思った。こうしてまた耳を澄ませると2人が話している。「おまえとおれは徳のある人の力で楽しく暮らしているなあ」と2人が話している。「さあ、この2人はまさに食べようとしている、今ふん捕まえてやる」とね。駆け込んでいった。そうすると、どうだったかという、子ヒツジを産んだヒツジの羊膜をゆでて食べているんだ。そして「徳のある人の力で俺たち2人は楽しく暮らしているなあ」と。人の心というのはそれほど美しいものなんだよ。その飼っている家畜を殺して食べる、そこからごまかすというような、そういう気持ちはないんだよ。そういう良い心を持っている。そして、その金持ちは喜んで「さあ、おまえたち、これを取れ」と、そのまま与えたんだというよ。このようにモンゴル人は飢え死にすることはないんだよ。また他にもこういう話がある。2人のモンゴル人が中国に行き、どうしたのだろうか、乗るウマをなくしてしまったんだ。そうしてこちらに向けて2人で中国から歩いて戻ってきて、そして南ゴビに至った。2人は空腹で死にそうになっていたんだというよ。食べるものはなく、どうすることもできず、飢え死にしそうになっていたらしい。そうやって進んでいたところ、1つのウマの頭部、遺骸の頭に出会ったという。そして、それを拾い、少し火をおこして、その骨をこうやって火の上で持っている、骨が焼けて、下から熱くなってきた。熱せられて、こうしていると、その脳みそにほほ火が通ってきた。そして2人はそれを食べたところ、体に力がわいてきたんだという。ということはそれこそ、一番よくない部位の肉でもそういうものなんだよ、そうだろう。脂味のないよくない部位の肉でも食べれば力がわき出るといふ。そういうものなんだよ。だいたい、自分たちにとって生来適した食べ物というものがある。私などは昆虫を食べることはできない。モンゴル人はだいたい食べる物の種類は少ないんだよ、そうだろう。いなごでもバッタでも、さまざまな虫や蟻でも、食べられるといわれている。本や物語の中でも書かれているだろう。そうだけれども、わがモンゴル人はそれらに関心を持って食べようとはしないんだよ、そうだろう。そうだね、ヒツジ、ウシの肉、そしてさらに太って脂肪のついたものを食べる、痩せたのは食べない。ロバの肉を食べると聞いたことがあるかい？

D：まったく聞いたことがないです。

- B：そうだね。モンゴルに文学があったとき、中国はまだ貧乏だったんだろうか。読んでことのある話があるんだ。ある貧しい中国人が1頭のロバを持っていた。そしてそのロバは年を取って、そして痩せ衰えて死んだという。すると、その人はその肉をいろいろな野菜と混ぜてゆでて、長い時間沸騰させた。それはバンタンになって、煮込みになるだろう。そんなふうになってきたところで、たくさん野菜、調味料を入れたんだよ。そしてその後、そうしてね、また食事を作る能力があったんだろう、それを売って来たんだという。料理を作ってそれに箸をつけて陶器に入れて、人に料理を作ってそれを売ってお金を取る。箸を入れてかき混ぜてみると、その料理はとてもおいしくできていたんだろう。私などはロバどころかウシが死んでもそれを捨ててしまふよ、そうだろう。もしもその人のように考えて、わが国の人たちが死んだウシの肉を、入ってきているいろいろな調味料を加えて、そうして雑炊のようなものにして、調味料を入れたならば、その話の料理に劣るものはないよ、そうだろう。そうやって生活すれば、モンゴル人が生活するならば、食べるものはたくさんある。自分たちが使わない、できないのであって、ないことはないんだよ。怠け者なんだ、本当をいうと怠け者だよ、今の若い者は。もともと怠け者、非常に怠けもの。できあがった、完成した物で生活しようというふうにいるようだね。私は今そのように思っているよ。
- D：今というのは田舎から、どういうんですかね、遠く田舎で家畜を飼っていた人がソム中心地へ移動し、ソム中心地からアイマグ中心地へ、アイマグ中心地から都会へと移動する、そういうことになっていますね。
- B：そうだよ、そうだ。中心地や定住地の近くにいれば、体も楽で、楽しく幸せに暮らせる、という考えでいるんだよ。
- D：田舎で家畜を飼うことが大変になって、人びとは移動してきませんか、どうして人びとは移動しているんですか？
- B：一般的には大変なことは大変だよ。だいたいきつい仕事だよ、家畜の仕事というのは。まったく自由もなく、暇もない。ああ、季節がよく、夏の豊かな時期になって、家畜は太って、こうやってアイラグや乳製品が豊富になっている時は、遊牧民ほど人の中で豊かで幸せな者はないように見える。ここでじゃんけんをしてアイラグを飲んでいる、あそこで宴会をしている。そうだろう、飲み食いして遊興しているんだよ。さあ、そして困難な時期が来る、いろいろな吹雪にも見舞われる、自分の飼っているヒツジも死んでしまう。家畜をなくさないためにと、それが生活すべてなんだからね。そして、一部は凍死する、迷って死んでいる。さまざまなことが起こるんだよ。そうでなければ、凍えて帰ってくる。それは大変なんだよ、そうだろう。そして、毎日仕事がある。泥や土を掘る、家畜の糞を掃除する。干し草や飼料を準備する。家畜の仕事というのは、今日こうやって、やってしまったから終わるということはない、明日、それをまたするものなんだよ。こうやって毎日繰り返しおこなう。ほぼ一生、その仕

事を繰り返すんだということだよ。終わった仕事というのは存在しないんだよ、家畜の仕事はね。そういうものなんだ。だから第1にそうになっている。第2には、まあ生活のあれだよ、ただ家畜の仕事が苦痛だからとか、いつも楽を追いかけているというわけではないだろう。これにはまた多くの面がある、多くの方向から見なければならぬ。子どもが学校に通うため。生活する権利がよりよく得られ、お金も得られる、また商売をすれば少しはいい暮らしができるなど、様々な理由で彼らは移動しているんだろう、そうだろう。生きる権利だよ、それは。ただ1つ今お金を得ようと、楽をしようと動いているのではない。だいたい生きる権利をもって生活する、また幸せのために努力して移動している人びとなんだよ、彼らは。そうじゃなく、ただ楽な生活、ただお金を得て、食べようというそうして移動している人たちではないよ、大体は。だが、その中には若者たち、彼らはというと考えのない、ただ楽な生活をしようという若者たちがいるよ。それを私は批判しているんだよ。そうではなく、移動という、また少しいい場所に移動する、そうだろう。今、西部のアイマグの人たちは大勢移動している。それは市場へと近づき、もう少しいい生活をしようというんだ。あそこには家畜はある、でも市場がない。肉を売る、市場がないんだよ。アイマグ中心地、ソム中心地の2つはすぐに需要を満たしてしまふ、それで終わりだよ。そこで車に積んで走って行く。夏の時期ならば道中で売れてなくなる、でも、冬の時期は肉がいろいろな方向から入ってきて集積してしまうため、値段が安くなってしまふ。ガソリン代が出せなくなる。そんなことから、家畜を持っている者は、家畜を追いながらこうやって移動しているということだよ。そうだろう。そういうことだよ。

D：またその上に、子どもたちが都会へと、学校に行く。彼らに従って、また都会へと移動しているようですよ？

B：ああ、そうだよ。彼らに従って行く。そしてその子どもたちは都会で妻子を持つ。夫を持つ。そこに溶け込むことになる。そうなる彼らに近づいて行くより他に仕方がない。

D：今では100いくつとか、200だとか、大学がウランバートルにあるんですよ。技術学校はなくなってしまいました。

B：だいたい大学を卒業する。本来大学で学んでいる人というのは長になるべくそこで学んでいるんだろう。長になる、よい給料の仕事に就く。でもそういう仕事は見つからないんだよ、そういう市場はないんだよ、そうだろう。最初はみんな学校へ。今ではまあ専門学校、カレッジなどができているよ。それは本来必要なものだよ。非常によく専門を身につけた労働者というのは、長よりも多く給料をもらう、もらうものだろう。それを理解する必要があるよ、若者たちは。そして彼らというのはまた人と同じものを欲しがる習性がある。例えば中くらいの成績の子どもがいるとする、そしてその子が中くらいのレベルの大学に入ったとすると、それを見て、私もそこに入る、

私はその子より劣っているものなんてないと思う。(その親たちは)おまえはその建築専門カレッジにいけ、そいつ以下になってどうする、というこういう気持ちが生まれてくるのではないかと私は想像しているんだよ。

D: そうですね、そういうものがあるでしょうね。

B: そう。私は他よりもできるはずだと思う。そうして、2, 3の大学を卒業して、職がないんだ。それで両親が何頭かの家畜を売ったお金、両親の年金のお金、それを渡すけれど、流れてなくなってしまう。そいつはというとまったくお金を稼がないんだよ。2, 3もの大学を卒業したという、無職。頭の悪い者というのはどれほど学校に行ったとしても、学んだことをその頭で利用する、それを使う方法は見つからないんだよ。そして、それより少しましな者はまあ生きていける。そして、コネのあるものならば、ある仕事に入って、そこに寄生して生きていくことができるだろう。でも、引っ張る者のない、知人のない私のような田舎の者たちの子どもは、どれほどまあまああの成績だったとしても、特別に優秀でなければ何もできないんだよ。就職している者はというと、優という成績を持って職についている。それは。先生にいくつか物をつかませて、そして1つでも優という成績をつけさせて、そしてそれを持って行っているんだよ、他の人と同じようにね(成績表では優)。いったい雇う側はその成績を信じている人がいるのかどうか。とても厳しいもんだよ、そうだろう。

D: あなたの子どもたちの中では、1人が今、田舎で遊牧民をしているんですか？

B: そうだよ。1人の子どもが遊牧民になった。一番勉強ができるのを遊牧民にしてしまったんだよ、私は。そしてその他はこのソム中心地にいるんだよ。1人はソムに、1人は都会に。2人の娘がいる、1人はエルデネトで、1人は韓国に行っている。去年から。「早く戻ってこい」と叱っているんだ。戻ってこない。「お金を稼ぐわけでもなく、ただ、そこでぶらぶらしているのだったら、早く戻ってこい」。もともとはこのハス銀行の、融資の専門職員として働いていたんだ。そうしていると、突然私は行くことになったとあって、そして引っ越しをして、そして突然行ってしまった不孝者なんだよ。それを私たち2人が最初から知っていたならばね。夜になって突然、今日明日にも行くことになったとあって、ある夜仕事を引き継ぎするといつて、そして一晩中座って仕事をまとめて、朝になってウランバートルに向かって行った。母親は仕方なく、一緒にウランバートルへ行ったよ。そして泊ってその翌日飛んで行ってしまった、そういう奴なんだよ。そうってしまった以上、今は何もできない、私たち2人はどうすることもできず、なくしてしまったようなものだよ。去年の冬、ツァガン・サルのおかげで戻ってきて、何日か泊って、そしてまた戻って行ったんだ、また延長させたといつて、行ってしまった。そのあとは、時々仕事を変えたと聞く。どうやって生きていくのかねえ、今。「向こうで仕事があるようなないような、ぶらぶらしているならば、戻ってこい」と私は叱るんだよ。でも、まあ、自分でわかっているだろう

うよ。無駄なことを話しても何もならない、そうこうして過ごしていくんだらうよ。

D：今日は吹雪になるといいましたが、大丈夫なようです。

B：大丈夫だね。少し南側だろう。うちのこのあたり、ウブルハンガイの北の端は、吹雪だといっても、少し弱いんだよ、そして…西の谷間からこうやって過ぎていくんだよ。そしてウブルハンガイの南側を回って、こうやって通過していく。だからウブルハンガイといわれているんだよ。そして、夜になるとまた天気が変わるだろうね。だいたいわが国の天気予報というのは優れているよ。外れることは少ないね、だいたい当たる。天気予報をよく聞いている必要がある。

D：昔は遊牧民カレンダーというものがありましたよね。

B：ああ。遊牧民カレンダーという、季節ごとの手法、時期や日を示した、年月日、曜日があって、それらを示したカレンダーだよ。今の物のようにさまざまな情報はなかった。そして、いい日を見つけるといって、カレンダーから探しても、まったく見つからない。ある人がいっていたんだという。よく見るという人が「カレンダーをよく見る」というと、「ああ、おまえは仕事をしないね」といわれたという。いろいろな仕事。どういうことかという、日を見て、いい日を見つけようとする、いい日というのは見つからないんだよ。するとその仕事をするのができないということだろう。ああ、これには悪い日、それは悪い日だ、それはこういうことをする日だといって。結局仕事ができないということなんだ、そんなことがいわれていたというよ。

D：でもあなたもまた重要な日は見るんでしょう？

B：ああ、見るよ、でもまあねえ。

D：これはバトフー議員ですか？

B：バトフー議員のカレンダー。

D：このあたりから選出されたんですか？

B：そうだよ。選挙の年はカレンダーがたくさんになるよ。いろんな種類のカレンダー。

ああ、話しすぎて、火も消えてしまった、話しすぎたようだね。

D：たくさん興味深い話をされましたよ、あなたは。

B：まあね。時間があれば話すことはあるんだよ。さあ、これでよかったかい？

D：十分です、よかったです。